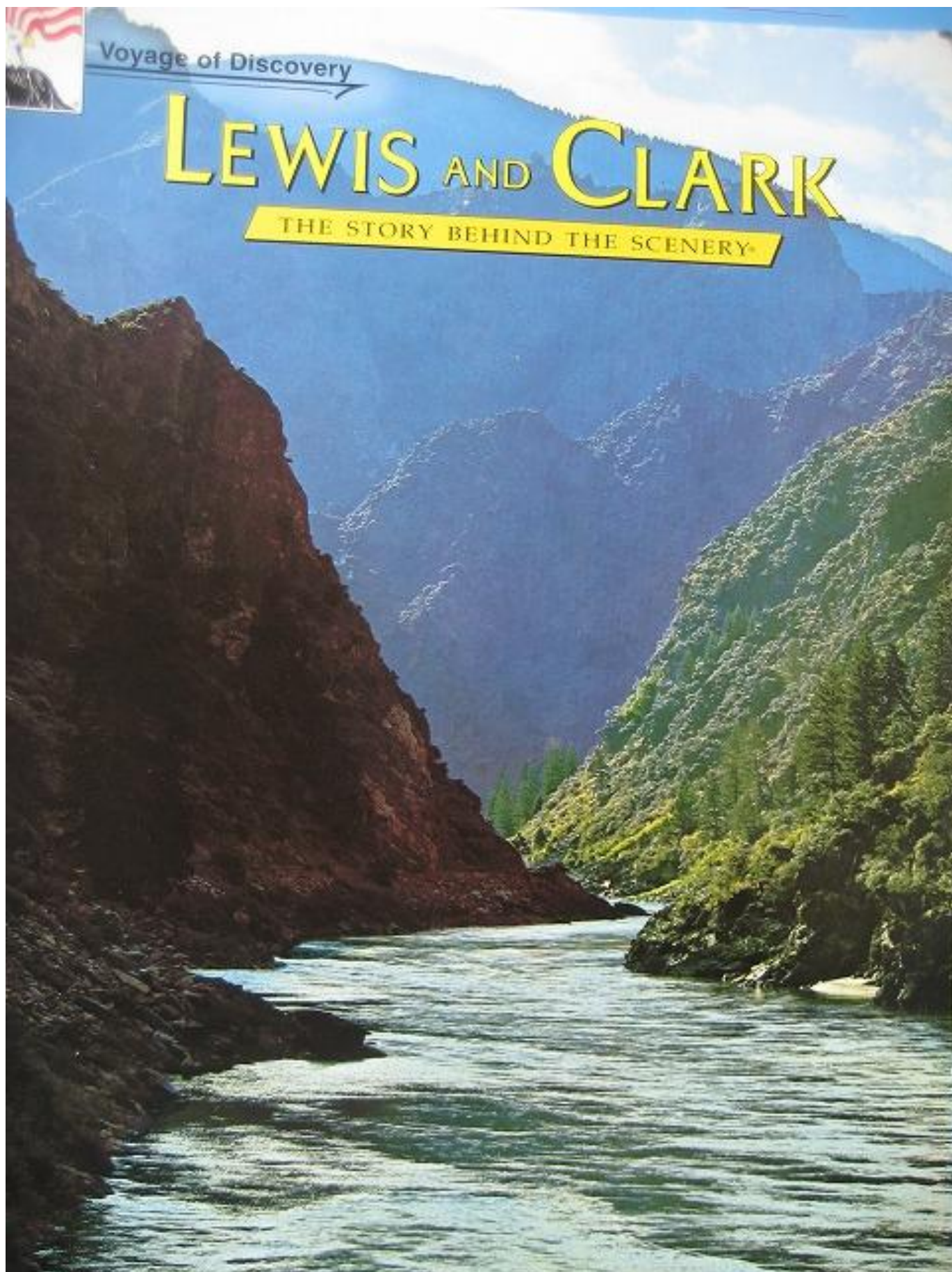


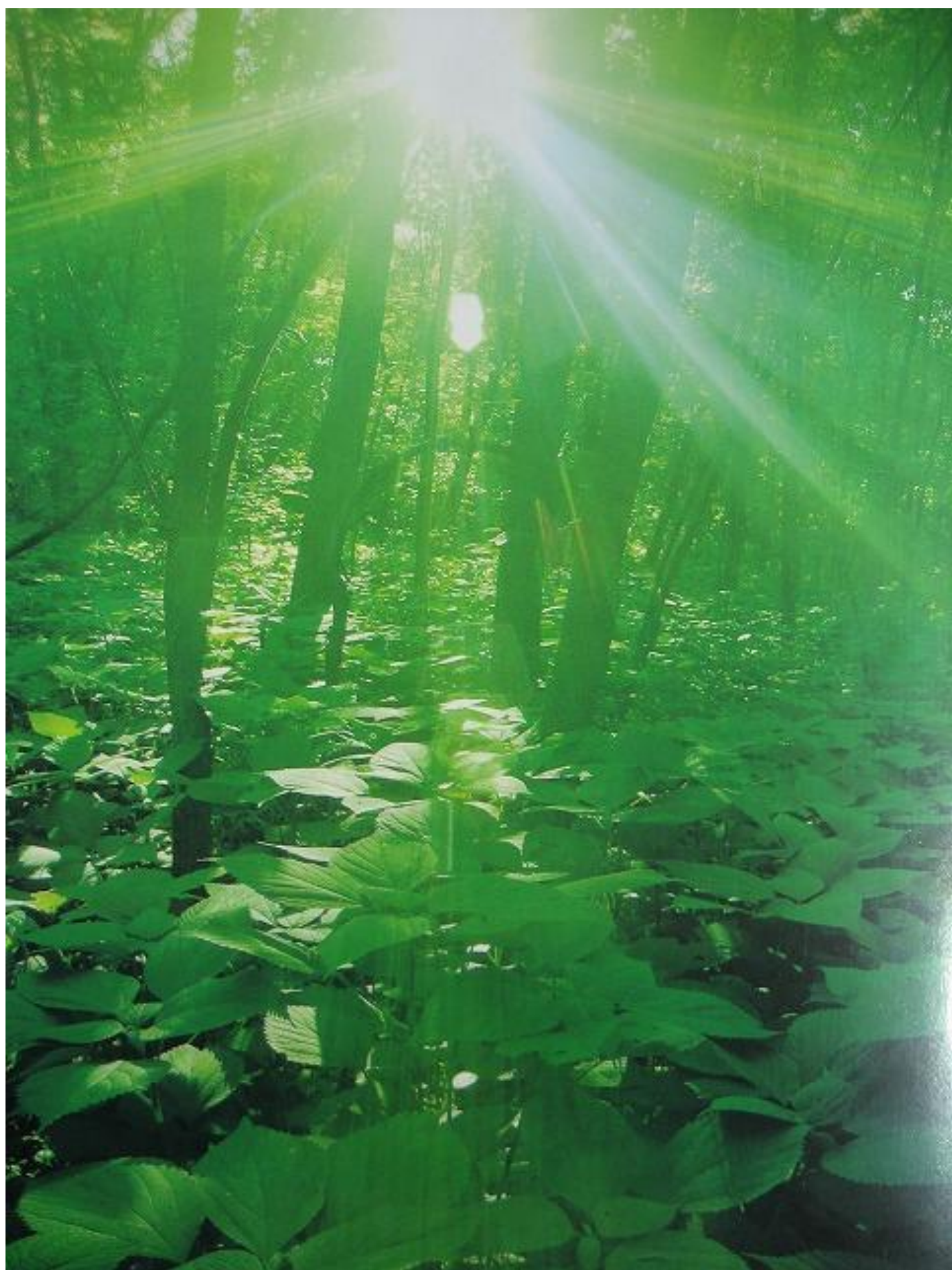


Voyage of Discovery

LEWIS AND CLARK

THE STORY BEHIND THE SCENERY®





Lewis and Clark

大発見の航海

景観の裏に隠れた物語

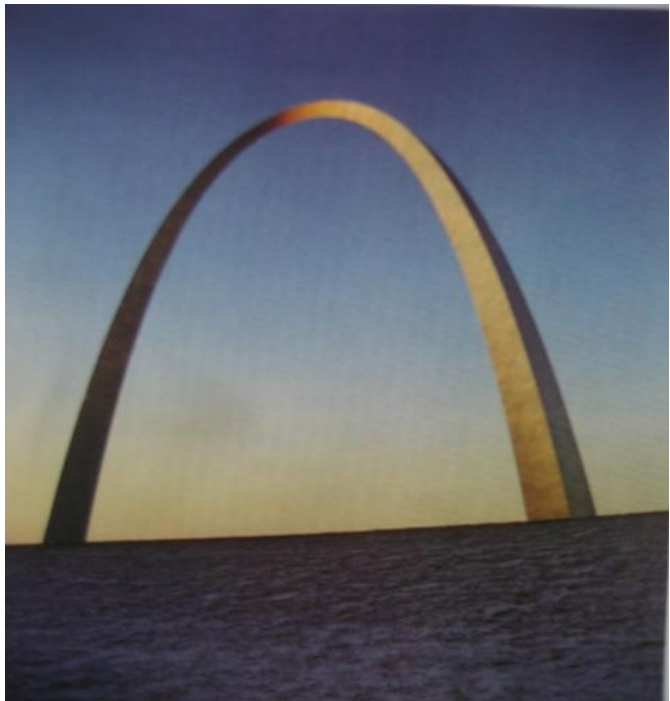


写真 **David Muench** 解説 **Dan Murphy**

景観を撮る写真家達の指導者である DAVID MUENCH が、これらのページを自然の対する鋭い感覚的なもの、そして、情感とか、光の当たり方についての芸術家のもつ本能的なものに導いてくれています。Lewis and Clark の壮大な探検を、写真を通じて後世に伝えようという National Park Service の機関からの要請により、Dave は、ほぼ一年間というものをこの仕事に専念をしたというわけです。ここに掲載されている写真は、その結果、選ばれた写真ですが、これらは、St. Lois にある Museum of Westward Expansion で、常時、公開展示されているものです。

DAN MURPHY は、彼の鋭い洞察力と、率直な解説の中で、Lewis and Clark の探検隊の、飾り気がなく、しかも、熱意のこもった仲間達に敬意を表して、その思いやりの気持ちを明らかにしている。DAN は、National Park Service の熟練職員でもあり、また、その博物館の最初のスーパーバイザーでもあるが、彼は、Jefferson National Expansion Memorial で働いているときに、この写真の展示物の飾りつけの仕事に携わり、そのときに、この Lewis and Clark の冒険のドラマのとりこになった。

JEFFERSON NATINAL EXPANSION MEMORIAL と言うのは、ミズーリ州のセント・ルイス にあり、二世紀の間、その“Gateway to the West”の National Park Service により管理されているものである。この建物は、630 フィートの高さの Gateway Arch と呼ばれるもので、それは、西部を開拓した人々の栄誉を称えて建てられたものである；このとても大きな Museum of Westward Expansion が、彼らの冒険そのものを物語っているのである。この本の中に出てくるそこに展示された写真は、その博物館の重要な特徴そのものであり、そして、その写真は、この博物館の 1 つの壁に沿って、16 フィートの高さで、なんと、500 フィートの距離にわたり、展示されているのである。

表紙写真 : Salmon River, Idaho. ページ 1 : Joe Matthews による Gateway Arch.

Book Design by K.C.DenDooven.

Tenth Printing, 2005

LEWIS AND CLARK ; VOYAGE OF DISCOVERY. 1977 KC PUBLICATIONS, INC

“The Story Behind the Scenery”; the Eagle/Flag icon on Front Cover are registered in the U.S. patent and Trademark Office.

LC 76-57451.ISBN 0-916122-50-6



1804年当時、アメリカはまだ、17州の集まりとひとつの大きな未知の土地、——新しく手にしたルイジアナであった。太平洋に出るというルートは、たんに空想のものにすぎなかった。

1804年5月14日 月

私は、おおくの隣人達の見守るなか、午後の4時に出発した。そして、穏やかなそよ風のもと、ミズーリ川を遡っていった・・・。

ウィリアム・クラーク

Thomas Jefferson は、アメリカ合衆国の大統領に選出されたときに、彼の私設秘書として、その任務に求められる資質としてはちょっとばかり疑わしい、しかも、その名のつづりがどう見ても、想像的のような一人の男を指名しました。それでも、それは、素晴らしい決断でした。なぜかということを理解するために、われわれは、アメリカの独立戦争が終結したとき、そのときは、Lexington や Yorktown で、受けた傷跡がまだ、もやもやとした時代に痛みを残していたのですが、そのざわざわとした時代に立ち戻らなければならないのです。戦争を終結する条約というものが、この新しい国にたいし、ミシシッピー川までの土地を明確にして与えたのであった。当時は、人口のほとんどは東の海岸地帯に固まっていたのであるが、アメリカの西部に向かって領土を拡大していくという壮大な物語がそのとき、すでに始まっていたのである。狩猟人や、獲物の仕掛け人たち、そして、土地の投機家たちは、こぞってアパラチア山脈を越えていった。こうして、氷河時代から静寂を保っていた森が、突然、鉄の斧が“打ち下ろされる音”を聞いたのである。ケンタッキー、そして、テネシー、さらにインディアナを越えて、開拓者達が西へ西へと広がって行き、それからは、森の木々は、家族の語り声、そして、赤ん坊の泣き声すらも聞くようになったのである。

ミシシッピー川のもう一方の岸、つまり西岸は、スペインが領有権を主張していた一まさしく、そこはただたんなる野生の大地ではなかったという事実だ—そして、ほんのわずかの者達が、いかだを組み、これを超えて行っていた。しかしながら、世界のな

かでスペイン帝国は、すでに衰退の一途であり、Jefferson 大統領は、いつの日にか、合衆国がミシシッピー川を越えて、その未開地に乗り出してゆくという壮大な計画を持っていた。彼自身の心の中の燃え上がる開拓精神はすでにそこに存在していたのだ。

もし、(ジェファースンに取っては、いつと言うことであるが)、アメリカが、その西部地域を統合するようなことになれば、実際に手に入るものはいったい何であろう？ その西部地域がどれくらい広がっているのか、ましてや、そこに何があるかなどということを知る者は誰もいない。それゆえ、この大地を探検し、地図を作らなければならないのだ。そこが、どんな土地であるかが分からずして、その土地を治めることなどできないのである。

そして、この西部を探検しなくてはならないという別の動機があった—それは、インドに繋がる一連の水路という古くから伝わる夢なのである。これは、結局、コロンブスが新しい世界を発見したとき以来の、誰もが予測することができないずっと大きな難関(従って、その褒章もずっと大きいものである)を用意している気晴らしなのである。とはいえ、その夢は決してなくなっちはいなかった。オリエントとヨーロッパ、もしくは、たとえアメリカの東海岸とを繋げる水路の通商路であっても、それは、まちがいなく富をもたらすものであることを意味していた。ジェファースンは、“ミズーリ川”と呼ばれる主要な川が西部からミシシッピー川に注いでいるということを知っていた；そして、Gray という名前の海軍大尉が、太平洋の海に注いでいる主要な川を発見し、その川に、“コロンビア川”

と言う名前をつけていたことも知っていた。これらの川の水源は、まちがいなく、お互いに交叉しているのではないか？ このことについての確たる根拠はないが、しかし、沢山の人が、ひょっとしたらそうではないかと思っていた。彼らは、ミズーリ川をその水源まで辿って行き、わずか一日ほど陸路を進めば、コロンビア川をくだり、太平洋に出られる—そうすれば、もう、中国だ！と信じていた。これは、どうしても確認しなければならない。

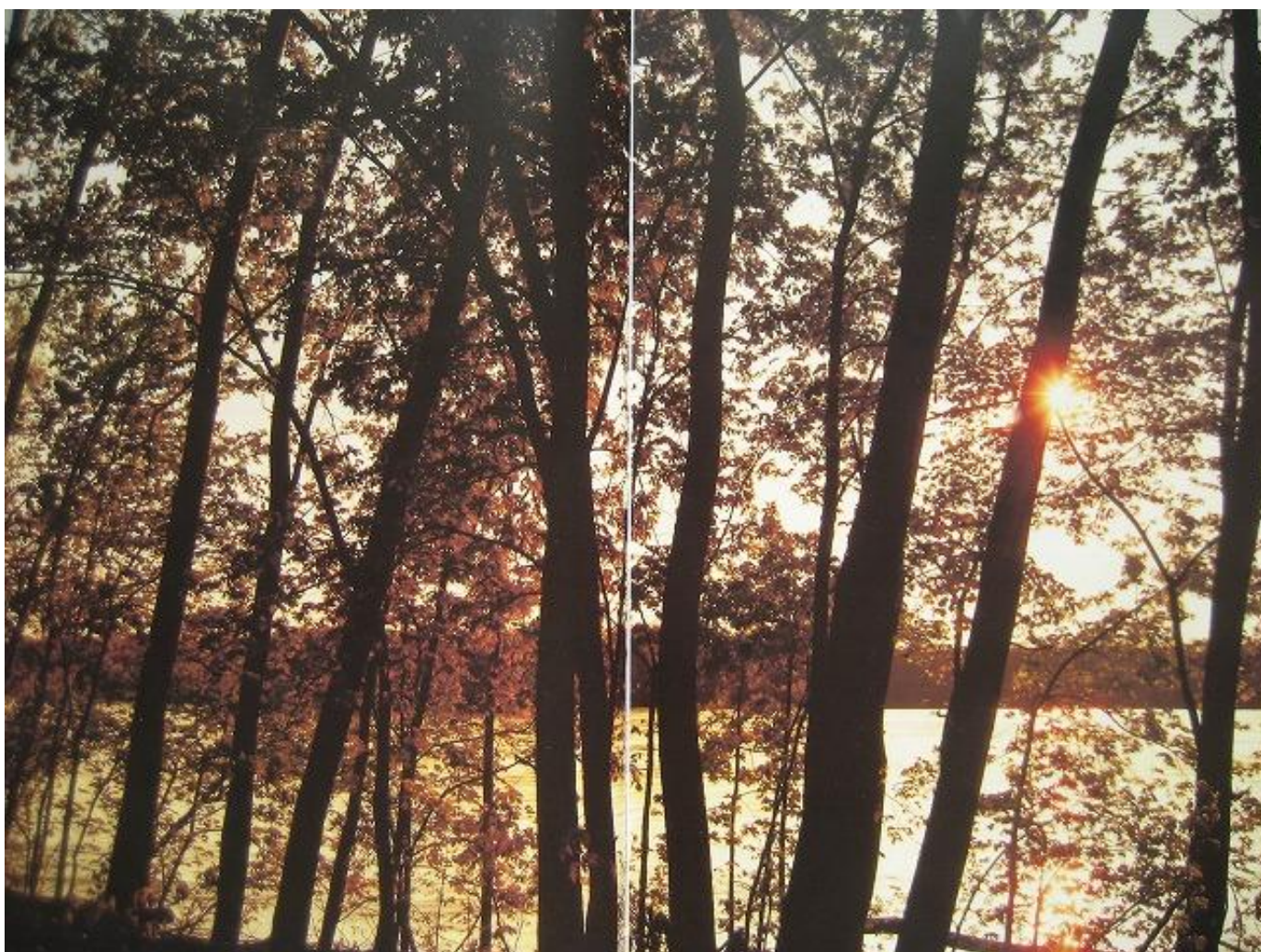
もう1つの事実を加えるなら、スベルをつづることができない秘書の秘密は明らかだ。その事実は、トーマス・ジェファースンの好奇心を満足させるものである。彼は、素晴らしい法律家であり、そして、政治手腕に長けていたのだ。そして、やがては、素晴らしい外交を展開することになる；さらに、彼は、天文家でもあり、考古学者であり、発明家であり、そして、この上ない自然科学者でもあったのだ。自然の現象に関するすべての疑問が、彼の好奇心をいっそう駆り立てた： 花は一体いつ咲くのか、化石は何を明らかにしてくれるのか、動物達はどのように生きているのか、どんな植物が食べられるのか。西部は、究極の大発見の魅力を秘めていた。

こういうことすべてのことから、ジェファースンは、長い間、その西部地域に学術調査隊を送ることに関心を持っていた。彼の頭のなかには、すでに、失敗に終わっていた過去の挑戦の記録が入れられていた。しかし、彼は今や大統領なのだ、そして、時は熟した。こうして、かれば私設秘書官に。メリウェザー・ルイスを召抱えたのである。ルイスは、バージニアのジェファースンの隣人で、アウトドアライフに非常に長けていた。彼は、開拓地の軍隊に勤める優秀な軍人であった。そこで彼は、知識と、素晴らしい判断力、そして、部下を率いる秀でた指導力を発揮していた。彼こそ、まさに、ジェファースンの探検隊の指揮官に向いていたのだ。まだ、整理が完全に完了していなかったホワイトハウスの中での彼等の共同作業は、その旅—懸命に予測できないものを予測するという—計画のために時間が費やされた。ジェファースンは、ルイスのために、航行額、医学、そして、自然歴史学といった、詰め込み教育の準備をした。

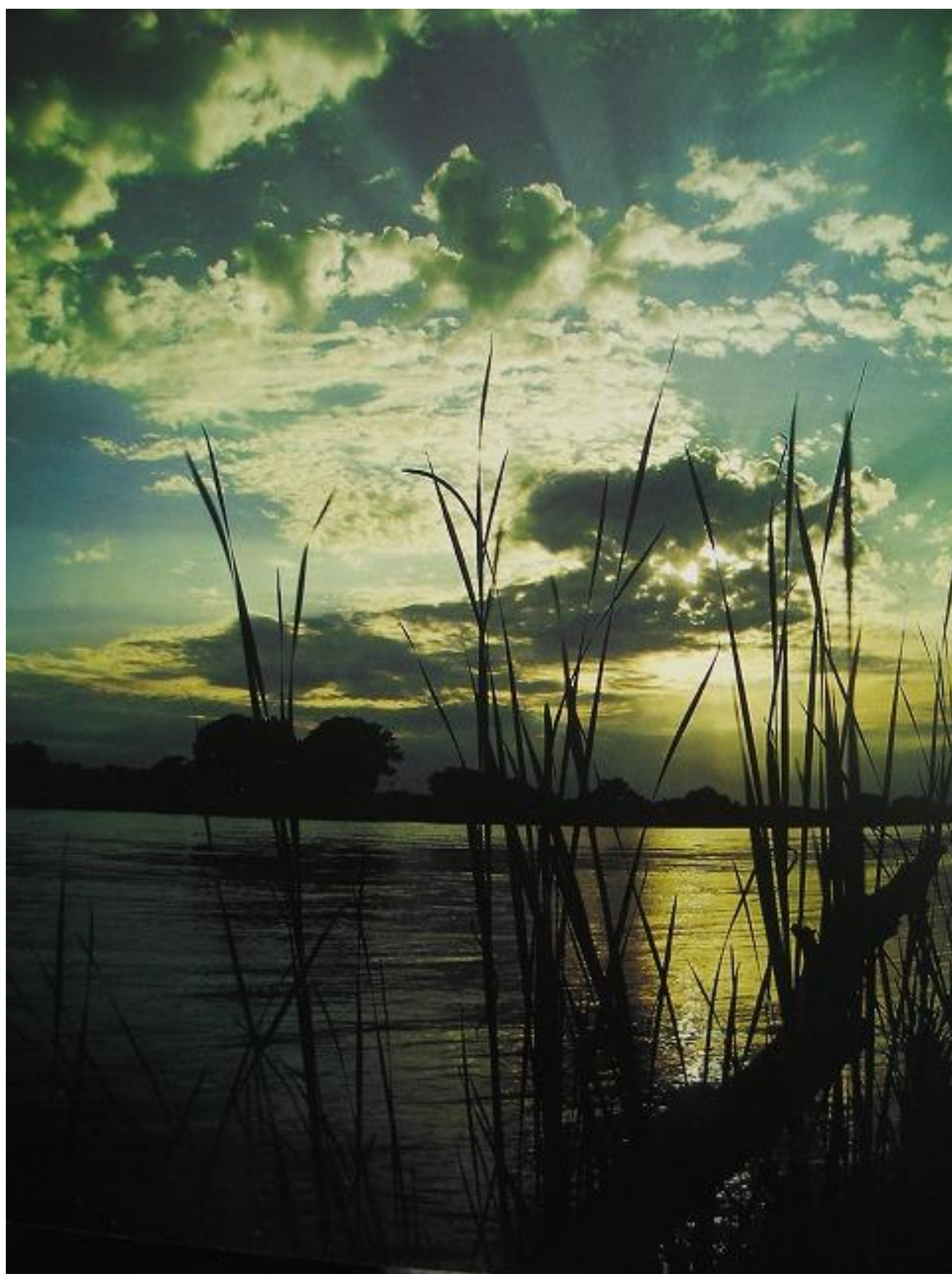
ところが、それは、フランスで起きた激しいもので、丁度、嵐のなかに稲妻のようにやってニュースで、この順調に進んでいた計画が中断された。ヨーロッパの勢力地図を“塗り替える”という戦略を小休止した、ナポレオン・ボナパルトが、スペインにルイジアナ地方を請求し、これを手に入れたのだ。この新しい光明のなかで、西部への領土拡大の見込みは全く違った意味合いを持つようになった。いまや、西部は、力を失いつつある帝国の力ない手中にあるものと言う代わりに、領土拡大にとどまるどころを知らない侵略の天才軍人の手中に納まったのだ。そして、ジェファースンの懸念は、西部への領土拡大どころか、アパラチア山脈から、ミシシッピー川のとの間の領土を確保するというだけでも頭が一杯であった。世界の市場への荷物の積み出しをしているこの地域はミシシッピー川、とりわけ、ニューオーリンズに頼っていた。その荷物の積み出しにおいて、外国の力に頼るということ、特に、勢力の強い敵対国に頼るということは現実的なものではなかった。

それは、ただの空回りしているような脅威ではなかった。ジェファースンのもとに、ナポレオンはすでに、カリブの島々に侵略のための基地を築くために軍隊を送ったという知らせが届いた。そして、ルイジアナを強化するために他の手立てを準備しているというわけである。ジェファースンは、二つの顔を持って外交交渉で対応しようとした。彼は、合衆国は、イギリスと同盟を結び、必要ならイギリスと手を組んでフランスと戦うつもりであると表明し、と同時に、彼は、パリに使節を送り、ニューオーリンズの買収交渉を試みた。どんなふうにして、彼等がルイジアナ地域—これは、ミシシッピー川とその支流の流域全体で、ロッキー山脈まで見渡せる領域—全体を持ちかえるようになったかという話は、まことに興味をそそるものであるが、ここでは簡潔に書く記すにとどめておかなければならない；ナポレオンが送り出したカリブ海の島々の軍隊は、黄疸熱と **Toussaint L'Overture** という輝かしい黒人将軍のために疲弊しきっていた。そこでナポレオンは、二つのことが現実になると考えていた：その1つは、イギリスの海軍力に対抗してニューオーリンズを維持することは不可能であろう、そして、アメリカの西部地域の見るからに、自発的な意気込みを持った開拓精神の浸透は、とどめることはできないだろう。こうして、彼は、その最善の策を決断した。それは、アメリカのその全体を譲渡するというもので、そうすれば、もっとヨーロッパ人が冒険するための金も手に入ると考えた。こうして、ジェファースンの西部地域への冒険隊が現実のものとなり、彼は、“発見のための使節団”という公式な解説書を書き上げた。それは、どのようにして隊員を入隊させ、解雇するのか、どんなコースを辿るのか、インディアンとどのように対応するのか、そして、自然の歴史をどのように観察するのか、などといったことについて、極めて分厚い、広範な領域にわたるものであった。しかしながら、重要な点は、次の章の内容である。

あなた方の使節団の目的は、ミズーリ川と、その流れそのものを探検することであり、そして、
そのコースと太平洋の水とつながりは、通商のために重要なもので、そのもっとも短くて、かつ、



この大陸を横断している水路の現実的なつながりを探検することである。



ジェファースンは、ルイスに、共同指揮官を選出するように頼んだ。そして、ルイスは、ウィリアム・クラークを選んだ。彼等は、軍のなかで一緒に勤務したことがあった。クラークは、ルイスを心理的な側面でこれを補佐した。彼は、ルイスが時々落ち込み、内気になったときには、明るく、そして、心優しく振舞い、また、神経質になっているときには、気を大きく、そして、朗らかな態度をとっていた。ルイスと同じように、彼もまた、野外旅行に長けていて、指導者としての権限を与えられていた。そして、彼は、インディアン達との折衝では、超一流の交渉力を発揮していたものと思われる。

1803—04 年にかけての冬に、二人のキャプテンは、俺らが、キャンプ・ウッドと呼んでいる、ミズーリ川の河口からミシシッピーを横切るところに設定されたキャンプ地に居た。そこで彼等は旅の準備をしていたのだ。すでにそのときに彼等は数人の隊員を雇い、セント・ルイスの経験豊富な貿易商たちが、彼等に必要な知識を教え込んでいた。志願者もやってきた：その中から何人かが選ばれたが、断ったものも居た。こうして、徐々に経験豊富な開拓精神を持った隊員、きつい仕事や緊急時に耐えられる優れた連中を集めたが、彼らは、その一方で、鍛錬や、組織化にはなかなか言うことを聞かなかった。後にそんな逸話が話された隊員の名前に、コトラーやドラウリアードなどがあるが、彼らは、最初は、吞んでくれたり、訓練に遅れてきたり、ある居歯、指揮官にくっつかかったりしていたことが訓練記録の中に報告されていた。しかし、彼腹はみんないい人間たちだった。

この冒険隊は、溶かせば、直ぐそれが鉄砲の玉になる銅製のカプセルに充填された弾薬などの資材をハーバート・フェリーの軍の物資配給所から調達した。そして、インディアン達と取引をする商品も用意した。そのなかには、ビーズの入った梱が 14 個、そして、タバコに、リボン、そして、釣り針などが含まれていた。食料は、粉、豚肉、ウィスキー(100 ガロン)、塩、トウモロコシ、ろうそくなど。そして、科学器具としては、六分儀器、温度計、望遠鏡、そして、象限器、さらには、何よりも重要なノート(もちろんこの時点では白紙のもの、誰が、これらのページにどんなものが記述されるかなど想像できただろうか？) 彼等はこのほかにも医学ようの説明書きや器具も手にいれた：野外の活動では彼らは、自給自足にならざるを得ないのだ。

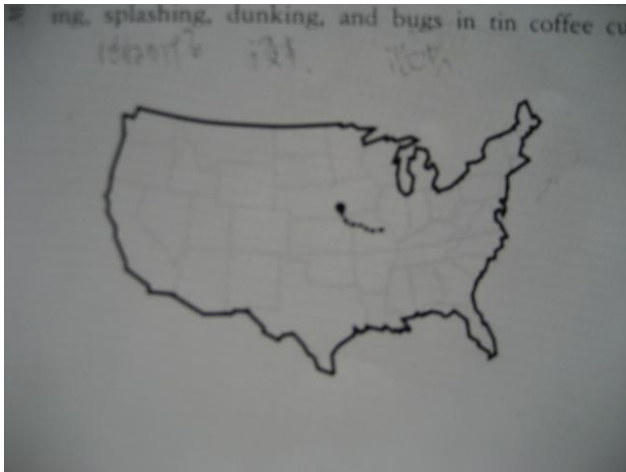
そして、待ちの時間の終わりが現実のものとなった。彼等は、積雪の問題が、泥の問題に置き換わったということで、冬が過ぎたと認識することができた。そして、ある日、彼等は、イリノイの森のなかに、延齡草(エンレイソウ)の花が満開になっているのをみた。そして、準備の最後の追い込みが始まった。そこには、どんな旅になるのかという精神的な興奮状態があった。一人にしておくこんな風にさせたのだ。彼らは、クラーク隊長がボートへの荷物がうまく分配されているかどうか確認するために、川に押し出せと命令したときには、すべてが準備できているということを知っていた。(実は、そうでなかったのだが、)そして、その一週間後、彼等は、恐ろしいほどの豪雨のしたで、眠りについた。しかし、この夜の睡眠が彼らのキャンプ・ウッドでの最後のものであったに違いない：クラーク隊長は、彼等に、明日、出発すると話した。

1804 年 8 月 1 日

私の誕生日のこの日、鹿の鞍したの肉、エルクの毛皮、そして、料理するためのビーバーの尻尾と、デザートにさくらんぼ、桃、流行のペーコン料理、そして、ブドウを注文した……。大草原には、アメリカではあまり馴染みのない、さくらんぼ、りんご、ブドウ、ラズベリー、グズベリー、カレント、ハッスルナット、そして、様々な沢山の植物や花に溢れていた。

ウィリアム・クラーク

1804 年 8 月 1 日、冒険隊は、あるオトー族のインディアンが、この冒険隊にとっては最初となる完全に用意された会議(これは、ジェファースン大統領が彼等に指示した外交的な仕事の一部であったが)に来るのを待ちながら、キャンプの中にとどまっていた。彼等は、この場所を、自分達が今、まさしく、それを行おうとしている場所(川は、それ以来、この場所の形を変えてしまっているが)ここを“Council Bluffs”と呼んだ。



ここに滞在することが長引くのは歓迎された。彼等は、ミズーリ川のどろどろの流れの中に船を漕ぎ出して以来、すでに、二ヵ月半が経っていた。この冒険隊についての幾つかの本では、この間の出来事を飛ばしたら、あるいは、何も記述していない。というのは、ここでの出来事や、そこで行われていたことは、良く知られた、みぢかな出来事ばかりだった — 後になり全体が知られていないということではなかったが — からである。しかし、毎日書かれた日誌の記載には、どんな普通の内容の記録ではあっても、そこには、素晴らしいドラマがあったことが記録されている。そして、それらが、男達のグループが、この発見のための探検隊をして大陸を横断していくことを可能に

する自己責任と精神的な結合を育んでいるということに気付きはじめていることを明らかにした。

彼等は川と格闘した。不安定な砂と泥、あるいは、器の狂いそうなほどの突き出している倒木のなかを悪戦苦闘しながら進んでいくなかで、彼らは、一インチ、一インチずつ川を遡っていったのである。ある隊員が、“蛇にかまれた”。とルイス隊長が、樹皮と硝石で作った湿布薬を塗って、出血治療をした。そうして、彼は、回復することができたのだ。ミズーリ川での真夏は、突然、男達と荷物をずぶぬれにするような強烈な嵐が来ることを意味していた。それは、蒸し暑い日の連続、昼には、そよ風の一吹きもなくオープンになるようになるというものだった。男達は、日射病に苦しみ、休み休み、前進を続けた。彼らは、軍隊の鍛錬というものを学んだ。一人の男が仕事中に酒を飲んだということで、50回の鞭打ちの刑に処せられ、また、別の男は、仕事中に居眠りをしたという理由で、100回の鞭打ちとなった。(冷酷ではなく、彼らの状況に応じて与えられたものである)。そして、問題は蚊だ！ 男達が眠りにつくことさえできず、そして、立っていてさえ、“とにかく、蚊が厄介だった” 隊員たちは、熊の油を塗りながら、前進をした。

馬鹿騒ぎがあったが、その中のあるものは非常に荒々しいものだった。日誌には、こうしたときのことをあまり詳しく述べていないが。しかし、昼間は、一日中船の中にいて、夜になると、船を押したり、泥水が跳ねたり、あるいは、水に使ったり、さらには、錫のできたコーヒークップに虫が飛び込んでいたり、ろくなことがなかった土手でキャンプしていたかれらに、健康的な男達の姿を想像することは難しい。

確信のある能力など、こんな状態では、どんなときにもそれを懸命に発揮することなど全く必要なかった。日誌には、馬鹿騒ぎは、ほんのわずかの時間だけだったと述べている：あるとき、それが、拳骨の殴り合いになったこと、そして、砂がヨークという奴隷の目に入ったことがある。しかし、そうしたことについてのなんの記述がないときでさえも、われわれは、そんなことがあったということには確信が



持てるのである。

大地は素晴らしかった。そして、隊員たちは気分が良く、狩猟に出かけた者は、彼等が利用するもの以上に沢山の獲物をし止めてきた。隊員たちは、水が豊かで、川底がよく平らになったようなところをせつせと遡っていった。そして、南の風が彼らにセイリングをさせてくれ、さおを使ったり、あるいは、綱で引っ張るというような骨折り仕事をせずに、順調に川を遡っていくとき、— こうした日のことを彼等は、祝日と呼んだ — が、何日かあった。そして、川がまがりくねったその向こうには、新しい情景が展開していた。

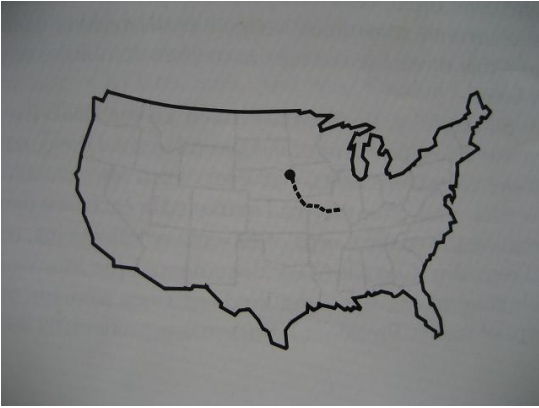
こういうわけで、キャンプでのこの日は、クラーク隊長にとってはとても良い日であった。彼は、うまく行っている限り、この探検隊の共同指導者だった。そして、彼は、来る日も来る日も、彼の開拓者としての目を喜ばせてくれる新しい発見を見ていた。この日は、彼の 34 歳の誕生日だった。



1804年 8月20日 月

この日、フロイド軍曹が、ひどい悲しみとともに命を閉じた。彼は、死ぬ前に、私に、“自分は遠くにいく”、そして、私に文字を書いてほしいと言った。私達は、彼の名前をつけた小さな川を1/2マイル下ったところにある崖の頂上に彼を葬った。

ウィリアム・クラーク



ルイス隊長の誕生日が、8月18日にやってきた。そして、隊員たちをその日を祝った。しかし、次の日、彼等は、荘厳な気持ちであった。チャールス・フロイド軍曹がひどい病気になったからだ。彼は、開拓者の家系を持った良い男であった。（彼の父は、ウィリアム・クラークの有名な兄であるジョージ・ロジャー・クラークとともに軍人になった）そして、彼は、今度の冒険隊には、志願兵として参加していたもので、彼の仲間達は彼を軍曹として選出していた。彼は、前にも、七月の終わりに一度病気をしており、良くなったばかりであった。そして、いま、また、倒れたのであった。

しかし、歴史は、この一人の男のために待つことはできなかった。隊長たちは、オトー族と協議会を開き、彼らに、プレーリーに住んでいるインディアン部の間の敵対関係はもはや終わりにしなければならない、そして、新しい力が、いまや、かれらのすべてを統治するといって話しをした。このことは、インディアン達をぎょっとさせただろうし、また、混乱を招くニュースであったに違いない。しかし、彼等は、自分たちの間に平和がくることには同意をし、これで、キャプテンたちも満足した。

フロイド軍曹の病状はなかなか良くならなかった。彼は、痛みがひどくなり、食事も、また、薬も受け付けなくなっていた。クラーク隊長は、一晩中、彼の脇で看病していたが、21日になり、丁度良い風が吹いてきたので、彼らは船出をすることにした。その朝、おそく、この病気の男の脈が亡くなってしまった。そこで、かれらは陸に上がり；チャールス・フロイドかつぶやいた。“私は、遠くにいくよ”

こういって、彼は息を引き取った。

いつでも、死に直面するということは辛いものだ。しかし、この男達、我が家から遠くはなれ、原野のなかにいる者達にとっては、それは、もっとずっと辛く、悲しいものだった。彼らは、このとものなきがらを、近くの丘の一番高いところまで運び上げ、そこに埋葬した；隊長・ルイスが、彼が、この探検隊では決して使いたくないと願っていた弔辞の言葉を読んだ。日誌には、この日の出来事については、そう沢山のことは書かれていない；その晩、フロイドの川と名づけられた支流の近くのキャンプで書かれた日誌のはしがきは、ただ、“素晴らしい晩”という簡単な言葉で終わっている。それは、もの悲しいものであったに違いない。





彼らが、探検隊のこの先について考えなければならなかったのはどんなことだったのだろう？ 彼らは、すでに出発してから三ヶ月が経っていたが、しかし。いまだ。現実には厳しい状況に遭遇したわけではなかった。ただ、一人の男が逃亡し、もう一人の別の男は、逃亡を試みた容疑があった。そして、いま、フロイド軍曹が亡くなった。

驚くべきことに、このフロイド軍曹が、この探検隊の唯一ただ一人の犠牲者だった。今日、われわれは、彼は、盲腸で死んだと考えている。その二週間前にも具合がわるくなった彼の病気は、おそらく、病原菌から来る感染性の盲腸炎で、それが、後になって貫通したのだろう。その当時では、この状況は、たとえニューヨークやロンドンでさえ、正確に対処することはできなかったに違いない；だから、この1人の死は、この旅に対して直接的な影響を及ぼすようなものではなかったのだ。

冬になる前に、別の男がいなくなったが、この男がこの探検隊から抜け出した最後の男だった。しかし、将来おこるとおもわれた出来事が、彼らが遊戯を始めていたその晩に隠されていた。それは、浅瀬が舞台となった。流木がフットライトに火をつけた。ミズーリ川のつぶやき、ライトモチーフ、そして、暗闇のカーテン。真っ暗な壁のように彼らのまえに未知なるものが横たわっていた。彼等の思いはめぐり、そして、別の岸を調べようと、まさぐるように見た。多分、すでにそこには、フロイドがいたのだ。

隊員たちは、チャールス・フロイドがいなくなり空席になったアメリカ軍軍曹にパトリック・ガスを選出し、そして、再び探検を続けた。

1804年8月24日 金曜日

・・・果てしない大草原の中に、小高い丘があり、それは、少しばかり滑稽な形をしていた。そして、この地方の別のインディアン達の集団は、それが、悪魔の住処だと思い込んでいた・・・マハ族、スー族、オトー族などなど、この辺りの実に沢山の部族のものが、この伝説を信じていた。彼等を説得して、その丘に近づいて行くには、どんな説明でも十分なものはなかった。

ウィリアム・クラーク

1804年9月20日 木曜日

この日、私は川岸を歩いていた・・・そして、沢山のバッファローとヤギを見た。なんとここで、私は、彼らは丘の崖にある穴のなかに入り込んでいくのを確かにこの目で見た。・・・ここにいたヤギは、一匹もひげがなく、とても機敏で、しかも、端麗な動物であった。

ウィリアム・クラーク

日々の生活 ― それは、毎日の前進の、そして、しなくてはならないことの実行の過程である ― は、やり慣れたことと、そして、新しいことの奇妙な組み合わせとなった。

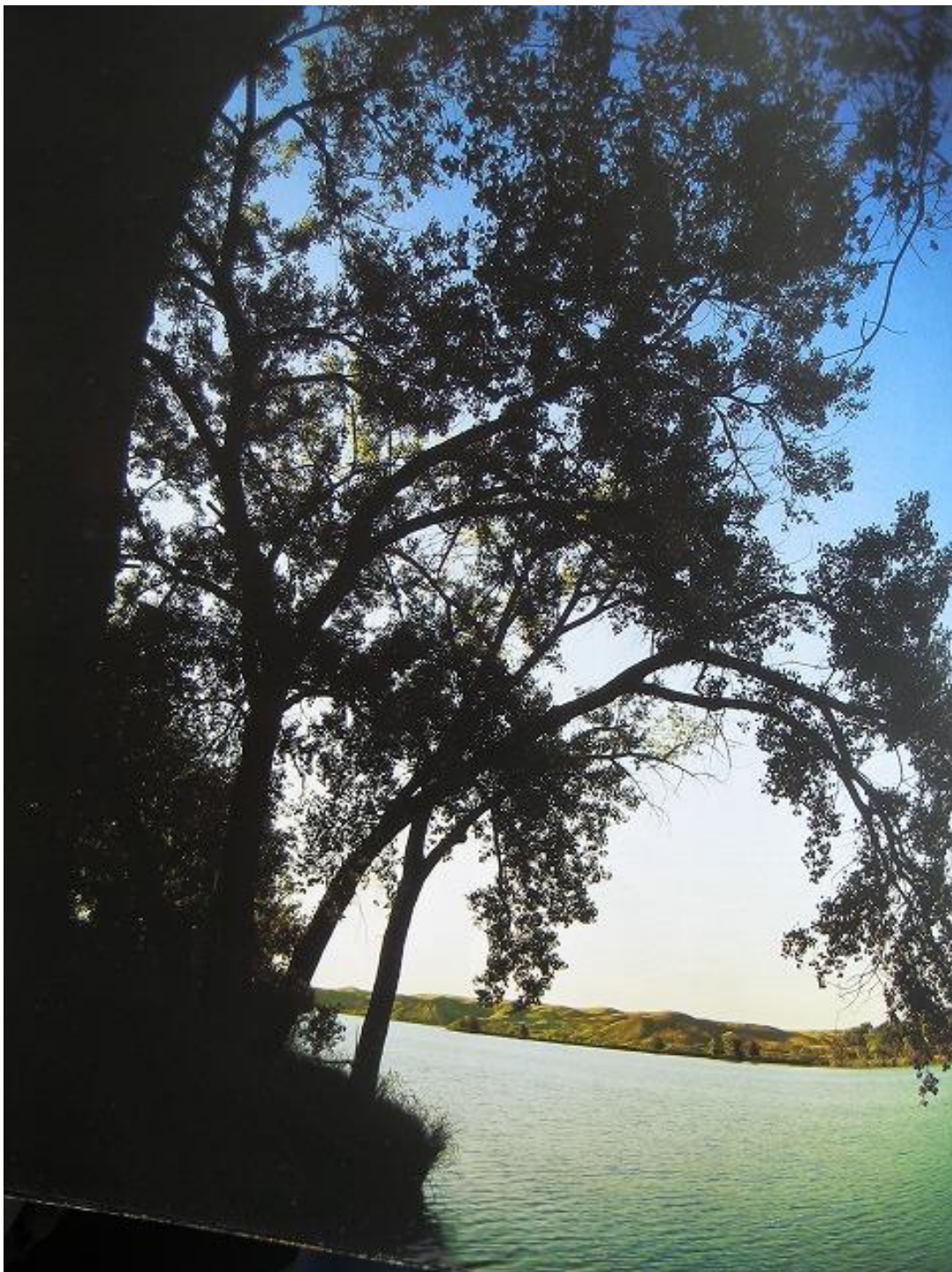
川は、いまや古くからの顔見知りとなった。隊員たちは、朝の温度がどの程度であれば、それが、その後、どの程度になるのか、泥が、彼等の船にどんな悪さをするのかを、そして、この流れに逆らってロープを引っ張ることがどんなものであるのかを予測することができた。隊員たちは、その日、昼にはどれだけ暑くなるのか、正午の数時間がうんざりするほど長く続くこと、そして、夕方の休息までが、やたらと長いこと、さらに、蚊が何時もまつわりついてくるということを知っていた。

彼等は、その川がいつの日か、通商のためのハイウェイになることを夢見ていた。そして、それが、今、彼等のライフラインであった。―深い茂みと、大草原中に広がっているイチョウの木が、彼等のボートを支えながら、そして、彼等にその山々に辿りつく道筋を示しているのである。しかし、気まぐれさと計り知れない意地悪さをもったその川の流れは、彼等に重労働かも強いていたに違いない。土手に沿って、土を深く抉り取り、それが緩むと、今度は、膨大な突き出したもの ― 樹木ばかりでなく、すべてのものが― 一度に崩壊し、川に崩れ落ちてくるのであった。直ぐ近くで呼び声がした。たとえ、崩れ落ちる土手が、ボートや隊員たちを呑み込まなくても、そのためにできる大波が同じことをするのだ! そして、そこには、“木こりたち” が居るのさ。―流れのなかでひよいひよい動いているすべての木々が、時々、川底で楔



の役割をしていた ― そのために、ボートはいつも転覆の恐れがあり、そして、油断をすると破壊しかねない状態だった。

そんなわけで、彼らは、注意深く、ゆっくりと川を遡って行った。どこの曲がり角に来ても、流れと、障害物に逆らって、船を操っていくというには新しい難問が待ち構えていた。しかし、そんな時にはいつでも、新しい情景が目の前にあった。そして、どこでも新しいことに感動したあとは、沢山のものを調査し、テストをし、そして、それらの記録を記すという、この発見のための探検隊としての仕事が残っていた。クラーク隊長は、川の曲がり角に来るたびにその位置を、樹木の種類を、そして、その辺りの地表に散らばっている化石の記録を取っていた。ジェファークソン大統領は、とりわけ、この後半の部分に興味をもっていた。事実、彼自身、大ナマケモノ（今では、*Megalonyx jeffersoni* として知られている）の化石の発見した経験があり、それをホワイトハウスの東の部屋の彼のコレクションのなかに保管していた。そして、多分 ― まさしく、多分であるが、― その大きな動物は、いま、ルイスとクラークが入り込んで行こうとしている広大な地域に今も広く生息していると思われた。



その大草原は、どこまでも続いていたが、その変化は微々たるものであった。しかし、どここの平地の中を流れる川とも同じように、ここの川も、あらゆる植物、ならびに、動物たちの生息を支えていた ― 生命は、水を求めて川のほうに引寄せられ、藪が生き物の隠れみのとなり、そして、そこには豊かな自然があった。彼等がフロイドを埋葬した崖から二日ほど上流に遡ったところで、探検隊は、初めてバッファローを殺した。それは、オスのバッファローであったが、その肉のなんと素敵であったことか。隊員たちは、インディアン達が、すでにそのとき、何百世代にもわたって楽しんできたあるものを発見した。（そして、それは、その後、二世代後の移住者達により再び、“発見”されることになるのだが、）； バッファロー、これは、大草原の絶品の食料であった。

ある一人の兵士が新しい鳥を指差してみていた：今日の、何百万人という旅行者と同じように、彼は、黒と白のマグピーを発見したのだった。8月と9月になり、隊員たちは別の“新しい”動物たちを発見し、その記録を残していた：プレーリー・ドッグ、コヨーテ、白い尾をしたジャッカルラビット、そして、西部の灰色狼であった。また、かれらは、新しい種の鹿も発見し、それをミュール鹿と呼んだ。それが随分と大きな耳をしていたからである。そして、クラーク隊長が“ひげなしヤギ”として、最初に言及していた動物は、今日、アンテロープと呼ばれている。かれらは、ヒラウチワサボテンを見つけだした；この新種で、とても興味のあるものだった。しかし、次の夏に彼等は、それをわざとらしい雄弁でののしることになった。

徐々に、徐々に彼らの気持ちの中に、風で細めた目で見えた心のなかに、様々な経験が大きくなっていった。記録をかけた手帳はどんどん厚くなっていった。そして、沢山の標本や研究のための毛皮をしまった入れ物が一杯になっていった。隊員たちはなおも、川を遡って進んだ。

1804年9月24日 月曜日

テトンと呼ばれていたスー族の部族が、北西側の岸の2マイルほどのところにキャンプしており、われわれは、その川を彼らの名前にちなんで、テトンと呼ぶことになるだろう……

ウィリアム・クラーク



彼等がミズーリ川の上流地域に差し掛かった、9月の後半の日々は、とても平穏であったが、しかし、隊員たちはとても神経質になっていた。そこが、テトン・スー族の領域だったからだ。セント・ルイスの裏町で、不満だらけの貿易商たちが、ルイス隊長にこの部族の情報を与えていた。彼らは、川を完全に塞いで妨害をするか、あるいは、貿易商たちがそこを通り抜けるときには法外な通行料を要求するというのであった。（好いように解釈するなら：テトンの人たちは、貿易ビジネスの仲買人みたいなもので、かれらは、もし、セント・ルイスの貿易商たちが、直接、その上流にいる部族たちと取引をするようになると利益を得ることができないと欲していたのである。）そして、丁度一ヶ月ほど前に、友好的なヤンクトンスー

族が隊長たちに、テトンが、彼らに隣接するインディアンたちを襲撃し続けているとも、話していた。

ついにそのときがやってきたのだ。遭遇が、まさしく、何の気なしに居たときに始まったのだ。9月23日に、三人のインディアンの少年が、川を泳いでこの見慣れぬ訪問者達のキャンプにやってきたのである。（十代の物怖じしない少年達の結果以上のものは、どんなものも想像することは難しい）隊長たちは、次の日に協議会を持つようにと、この少年達を伝達者にして彼らの部族のもとに送り返した。そして、その晩、岸を厳重に警戒して、船は、流れの真ん中に停留した。

協議会は、土手の上で、通常のやり方で始まった。まず隊長たちが、毛布とコート、そして、タバコをプレゼントした。インディアン達の返礼は、これもまた、通常のやり方だった：必ずしもそれは満足のいくものではなかった：お前さんがたは、贈り物が

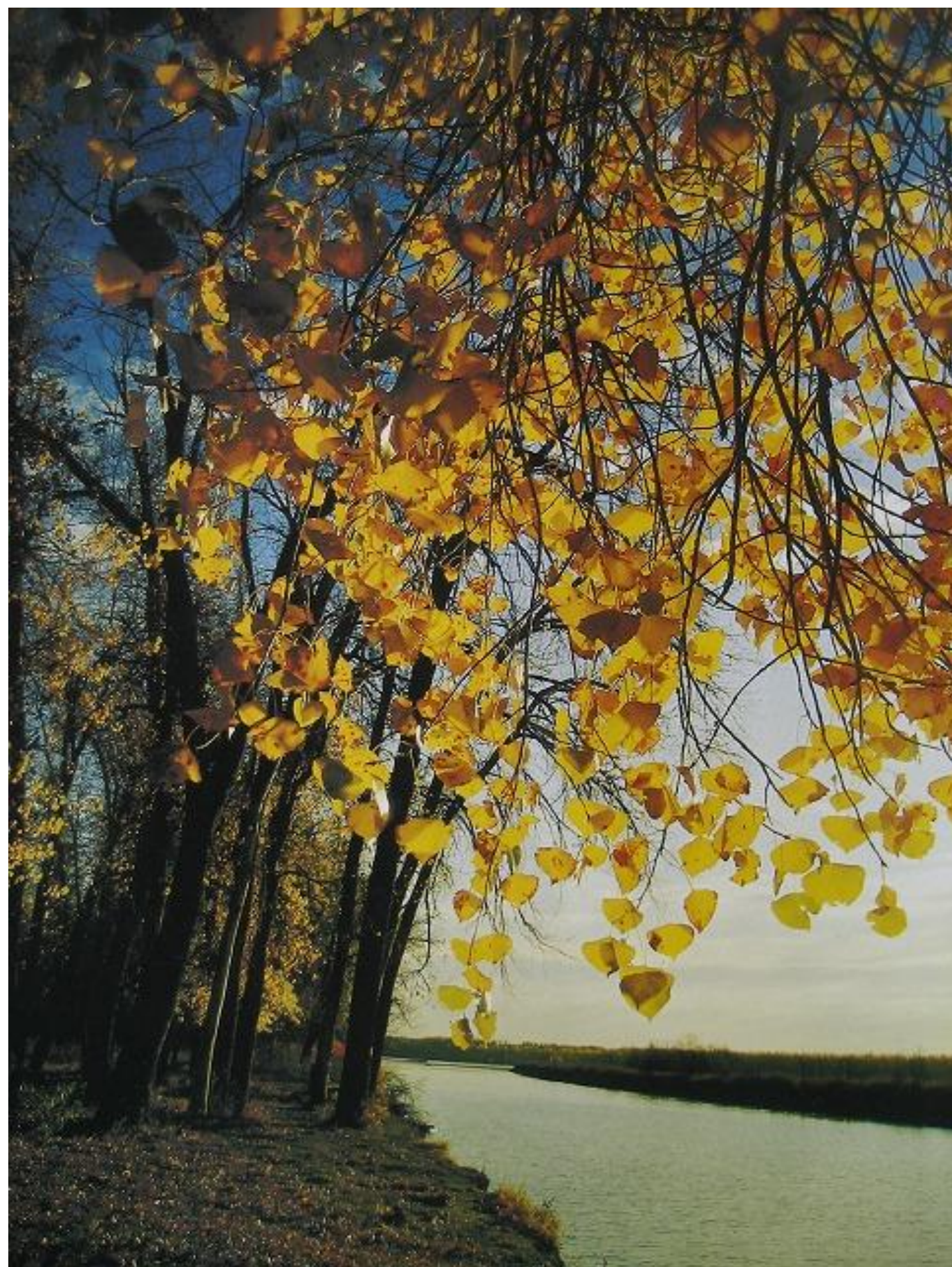
少ない；ここは通すわけには行かない。しかし、ここで、テトン族は、新しい状況に出くわした；この男達は、通常の貿易商とは少し違っていた。酋長達のうちの一人が、クラーク隊長にぞんざいな態度を示した。そして、隊長は、彼のサーベルに手をかけ、引き抜くぞと言う態度をとった。と、インディアンの方は、弓を引く構えをした。そこでルイス隊長が、ボートの上にいる隊員に、発泡の準備をするように命令をした。発泡の準備と、弓を構えたのは、ほんの一瞬のできごとだった。そして、岸の守りを固めるために、さらに十二人の兵士が船から岸に飛び移ってきた。この異常な事態は、いまや、インディアンたちのほうが不利な状況になった。そして、彼等は引き下がったのだ。状況は一瞬冷静になった。しかし、その晩は、暗闇のなかに沢山の監視の目が光り輝いていた。

次の日には、テトン族の別の作戦が見られた。隊長たちは、宴に招かれて、装飾のついた毛皮の上に案内された。そして、精一杯の歓待を受けたのだ：400 ポンドもある素晴らしいバッファローの肉、ロースト・ドッグの最上部分、そして、ペミカンのもてなしを受けた。その後、饗宴が始まった：“10 人の演奏家・・・タンバリンを鳴らすもの・・・鹿やヤギの角にひずめ野取り付けた杖で、これで、ガシヤガシヤ音を立てるのである・・・”しかし、テトン族の捕虜になっているマハ族の男が、兵士の一人に、テトン族は、次の日に探検隊を殺す計画であると話した、そこで、緊張の夜となった。



次の日のあさ、探検隊がそこを離れる用意をしているときに、別の対決があった。インディアンたちが、兵士達に荷物をどんどん運んできて、それをひっくり返すように要求してきた。ルイス隊長はこれに対して、群集に向け真っ直ぐ狙いを定めて、シーベル銃の発射の準備をするように命令した。それは、一触即発の状態となった。しかし、ここで、再び、テトン族は後に下がった。こうして、川は開かれたのだ。

その晩、探検隊は、そこから数マイル上流まで到達していた。守りだけはしっかりとて、隊員たちはよく眠った。彼はそれを知っていたのだろうか、ジェファースン大統領も、良く寝ていた、それは、このこと — つまり、国際的な外交交渉における極めて重要な最初の接触、— が、うまくいったからだった。新しい秩序が古いものに挑戦した、そして、それがうまく行ったのである。この大平原での知らせが、力の中で変化をしている世界に広がっていった。



1804年10月26日 金曜日

われわれは、・・・最初のマンダン族の部落から、1/2 マイルほど下流の地点・・・に到着し、ここにキャンプを張ることにした。われわれが到着すると、直ぐに沢山の女達、子供達がわれわれの見学をするために、群がってきた。隊長・ルイスは、主要な酋長と、われわれの通訳をつれて村に歩いていった。私のリュウマチの痛みがひどくなり、結局、私は行くことができなかった。

ウィリアム・クラーク



テトン・スー族と偶然に出会ってから、二週間経ち、発見のための探検隊は、アリカラ族の村のある岸のところまで来ていた。この大草原の通信は、その仕事をよくこなしていた。そのため、アリカラ族は、テトン族を屈服させた男達が居るということを知っていた。ある日の、やや朝遅くに開かれた協議会で、その日は、そのニュースと同様、天気も随分喜ばしいものであったが、キャプテンたちは、アリカラ族の酋長が、“道は開かれているし、誰もそれをあえて封鎖することなどできない、そして、われわれも喜んで見送るだろう・・・”と言っているのを聞いた。

このほらで、探検隊は、クラーク隊長の黒人の召使であるヨークがとんでもない神通力を持っていることを思い知らされた。インディアン達は、それまで黒人を見たことがなかったのだ。そして、それに加え、ヨークは紛れもなく強靱な男で、かつまた、理知的な男でもあった。彼がインディアンの子供達に向かってうなり声を上げると、子供達はキャーキャーと言って大騒ぎをしていた。そして、力を鼓舞するような見事な芸を見せてあげた。(ヨークはこの旅の間中、インディアンたちとの重要な接触のときに、計り知れないほどの手助けをしてゆくことになるのだ。)

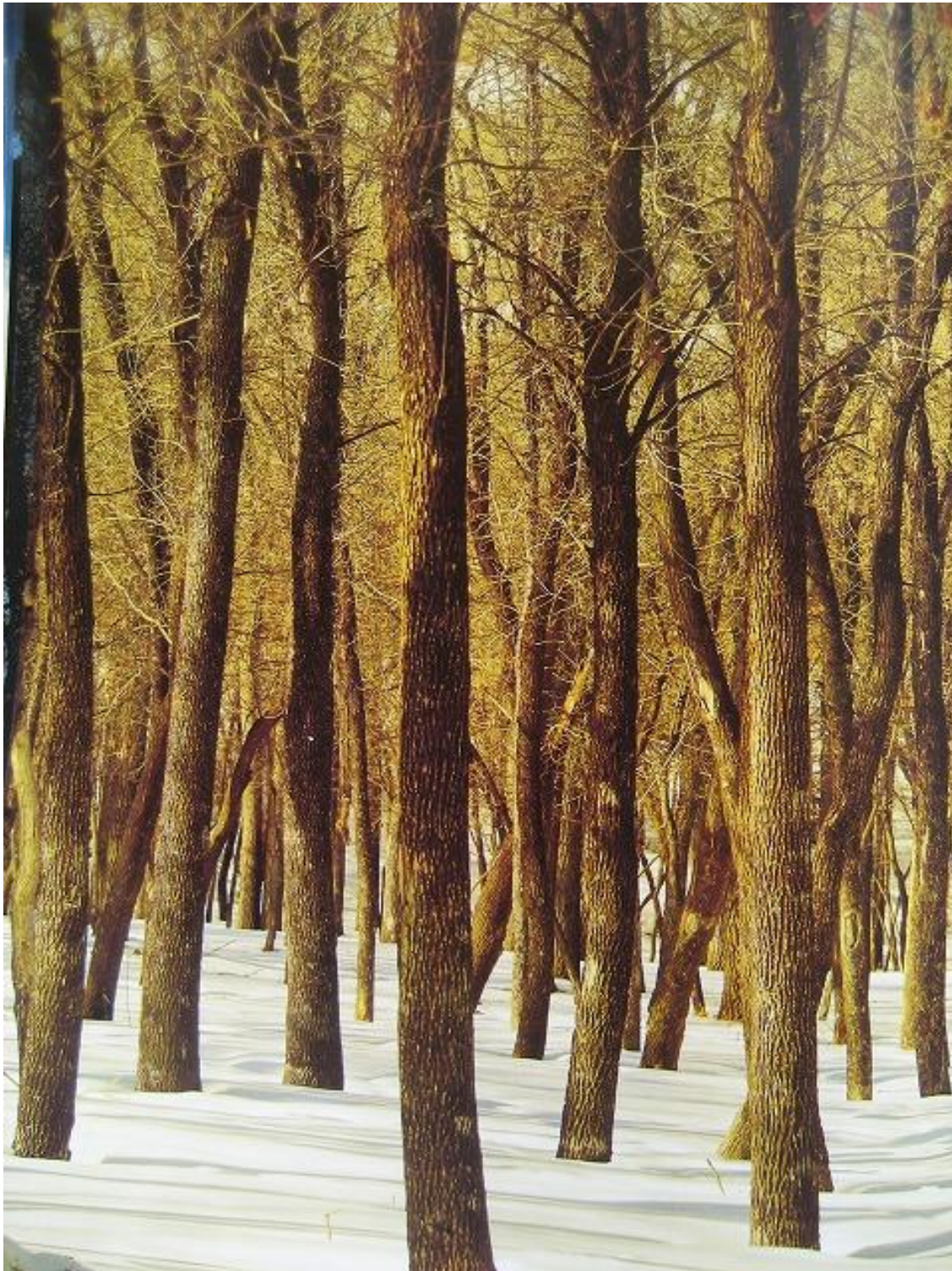
探検隊は、上流インディアン達の性的な習慣を知った。ヨーロッパ人たちと同じように、彼等なりのやり方で、しっかりとそれでいて厳しいものであった。にもかかわらず、気品のある客―それは、まさしく、兵士達、そのものであった、を喜ばすための提供物を含んでいた。彼らの日誌の中に見られるはかない言及は、疑いもなく、その行間に読むべき沢山のものがあることを残していた。

秋がどんどん過ぎ行き、彼等はさらに遡らなければならなかった。川の冷たさが、彼らが、今、その流れのなかに踏み込んでいかなければならなくなっていたときには、彼等を痛めつけていた。そして、ある朝などは、流れに突き出た縁に氷が張っていた。そんな中での仕事と、冷たい川の水は語り始めた；三人の男たちがリュウマチに苦しめられた。そして、クラーク隊長は再び、彼の首に併発した痛みで、ほとんど歩くことができなくなった。

しかし、天の恵みがあった。その寒さのおかげでとりとめもなく隊員たちを痛めつけて



いた蚊がいなくなった。そして、秋の色づいた木々の葉が、がけつぶちや大草原のなかで、錦の色に輝いていた。黄色く色づいたイチョウの木の葉は、キールボートの舳先のところで渦となって、そして、それを過ぎるとサーッと消えてゆき、まさに威風堂々たる舞曲を舞うかのように、水面に浮かんで流れていた。隊員たちは、彼らの獣道を東の土手から西の土手へと泳いで渡っていくバッファローの大群をみた。（そして、あるときには、インディアンの一団が、このように夢中になって、弱みを見せているバッファローを 40 頭以上も殺しているのを見た。） 彼らは、昼間、南の方角に移動していく空とぶ一群の鳥を見た。そして、夜には、その泣き声を聞いていた。あるとき、雪が降り、そして、それが繰り返されるようになった。キャンプファイヤーは、夕方はとても心地よく感じられた。そして、朝方は、もっと快適であった。隊長たちは、特別の綿のコートを配給した。いまや、隊員たちは、食料のために射止められた動物達の皮を剥ぎ、それを今度は、ぱりぱりにして、さらに、ざっとなめし、マントやコートを作っていた。来る冬に備える時だったのだ。



ここで、助けとなったのは、Tableau と Gravelines という、この探検隊の臨時で加わっていた二人の男たちである。彼等は、この領域で仕事をしていた貿易商で、よくインディアンの言葉を知っていた。その彼等から、隊長たちは、どちらかというと友好的なマンダン族と、彼等の近くに住んでいたインディアンの部族が、テトン・スー族のために北のほうに無理やりに追いやられ、ほんの二三日前に、身を守るために大きな村に集まっているところだということを知った。それを聞いて、隊長たちは、そこまで行き、その状況を調べ、そして、もし状況がよければ、そこで、この冬を過ごそうと決断した。

1804年11月2日 金曜日

この日の朝、夜明けに私は、4人の男達と、この冬を過ごすための適当な場所を探すために川のほうに降りていった。そして、3マイルほど下ってところに、沢山の木を手に入れることのできる場所を見つけた・・・木を切り倒し、そして、インディアンたちの小さなキャンプがあり、かれらはそこで狩をしていたのだが、その近くにキャンプを建てた・・・。

ウィリアム・クラーク



彼等は、インディアン達の部落から、2マイルほど離れたところに、木を手にすることができ、そして、狩をするにも丁度良いような場所に来た。そのときには、もう、無駄にできるような時間はなかった。彼らは、直ぐに、この冬を越すために設営する砦のための木をきる仕事を始めた。その砦の形は三角形だった — 二つの伸びた腕のところは、ログハウスになっていて、物見やぐらに繋がっていた。そして、三番目の側は、川に面しており、柵で囲まれていた。100ヤードほど離れたところに屋外トイレがあった。隊員たちはこの建物を、マンダン砦と呼んだ；彼らは、ここで、これから六ヶ月

間を過ごすことになる。

北ダコタの冬は、なまじの厳しさではなかった。とりわけ、1804—05にかけての冬は寒かったようである。温度は、昼間でも零度以下で、時には、マイナス 45℃以下になることもあった。見張りは、（もちろん、24 時間休みなし）辛い寒さのなかで交替しなければならなかった。狩は、必然的に苦痛を伴うようになった。狩人たちは、しばしば、出かけたら、できたばかりの毛皮を着て、その大平原で睡眠をとりながら、四日も帰られないようなことがあった。霜焼けが当たり前で、あるとき、ルイス隊長は、インディアンの少年の凍りついた指先を切断しなければならなかった。

しなければなら
ない仕事は山ほどあ
ったし、また、沢山の薪を切
ってこなければなら
なかった。隊員たちは、壊
れたり、痛んだ器具の修理
をした。二人の鍛冶屋の男
が、壊れた鉄製のストーブ
の残骸から、器具や斧の頭
を作り、これで、マンダン
族から、トウモロコシ、ジャ
ガイモなどを手に入れる取
引をした。さらに、隊員た
ちには、科学的な仕事が残
されていた；彼らが集めて



様々な標本を綺麗にし、それにラベルをつけるのである。そして、それを春が来たら、セント・ルイスに送るように箱詰めしていた。日誌には、インディアン達の習慣に関する情報が書き込まれ、— これは、今でも、考古学者たちが一生懸命勉強していることに目を向けてほしい、— これで、一杯になり始めていた。

隊長たちは、インディアン達 — マンダン族、そして、物々交換のためにやってくる様々な取引グループ、と会うために沢山の時間を費やした。そうしたインディアン達のなかには、この探検隊がこれから行こうとしている地域のもの、あるいは、誰かを知っている、そのまた、誰かをしっているような者達がいた。汚い床に杖で引っかけて書かれた一本の線を、そして、どこに滝があり、山があり、そして、峠、川があるのかを表現するような仕草を通訳してもらうことで、彼等は、自分達のこれから先のことについて沢山のことを知ることができるようになった — そして、その中には、誤解も沢山あったのだが —

外交交渉も為された。彼等は、試してみて、そして、何時も襲撃ばかりをしている大平原の部族たちのなかで、彼らに、ワシントンに居る彼等の新しい白人の酋長は。平和に暮らすことを望んでおり、そして、よき貿易相手になるように望んでいると聞いて聞かせて、一時的な休戦状態の安全を確保するなどちょっとだけうまくいくこともあった。そして、その冬、このキャンプを訪れたのは、必ずしもインディアン達だけではなく、カナダからは、イギリスの貿易商がやってきて、隊長は、彼等にルイジアナが買収されたという仰天するようなニュースを、そして、この大自然の統治者が変わったということを話した。

また、ここでは、楽しいひと時もあった。日誌には、毎日、ダンスパーティーが開かれていたと記録されていた。クルザットは、フィドルを持っていて、彼は、この旅の間中、この楽器が傷ついたり、壊れたり、あるいは、盗まれたりせずに何とかこれを大事に保管していた。ここで、良く晴れた、厳しい晩に、木の枝が、外でばぎばぎ折れている間、彼は、もうもうと燃える火のもとで演奏をした。インディアン達は、おそらく、この兵士達が踊りながらする馬鹿騒ぎを大いに楽しんだのであろう。（それは、彼等自身の洗練されたスタイルの踊りからすれば、いい加減で他愛のないものであったが・・・。）しかし、ヨークは何時も大人気であった。だから、白人のクルザット — 彼は、フランス人の父と、シャウニー族の母との混血で — フィドラーを奏で、そして、見物人（犬たちと、多分、一匹か二匹の馬）は、これを眺め、そして、インディアン達、アメリカ人の兵士達、一人の黒人、何人かのイギリス人の貿易商たち、そして、そのほかの混血人たちは、自分なりのステップを楽しんでいた。見張りが交替し、足で拍子を取りながら、指でとんとんと打って、うれしそうに兵士が入ってきて、笑い声でぺちゃぺちゃとおしゃべりをし、いろんな話をして、そして、数種類もの言語で情報の交換を行った。こうして、発見のための探検隊は冬のキャンプを過ごしていた。

1804年12月25日 クリスマス 水曜日

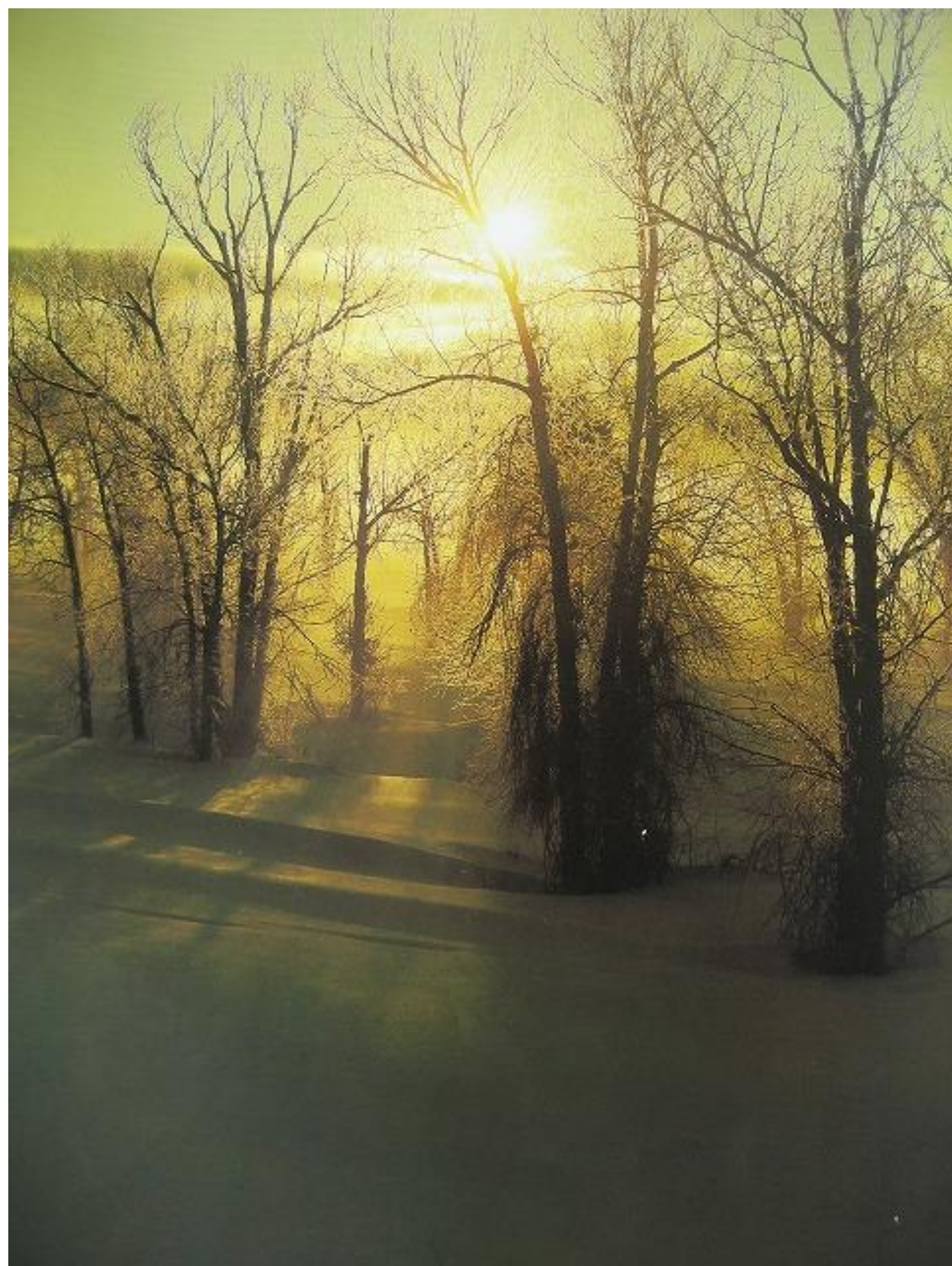
・・・隊員たちは見るからに楽しそうだった、私は彼ら全員に、ちょっとばかりのタフィア(ラム種)を与え、われわれの国旗を掲げるときに3発のカノン砲の発砲を許可した。そして、何人かの男達が狩にでかけ、他のものは、お祭り騒ぎが終わる夜の九時まで踊り続けた。

ウィリアム・クラーク



“タフィア”は、手に入れるには制約のある粗製の、家庭で発酵させたラム酒であるが、これは、何時も隊長たちにより、特別に仕事がきつかった日とか、非常に困難な仕事が達成された日にだけ、みんなに配給された。しかし、この日はクリスマスで、お祝いすることが命令された。インディアン達は、このときには、砦に近づかないように話されていたが、しかし、彼らは、一人の男を見て、この日が“偉大な祈禱の日”であることを知った。そして、彼等は、とにかくこれを見学していた。

この歴史的な旅のなかで、再現するのが一番難しい場面は、毎日



の生活そのものである。主要な決断とか、あるいは、出来事は、普通、日誌のなかに良く記録されていた — しかし、ほんの小さな出来事、(われわれにはとても興味のある細かなことも、実は、ルイスやクラークにとっては、あまりにも常識的なことであり、そのために彼らはそのことに言及しなかったのではないかは、どうだったのか？ マンダン砦の生活がどんなものであったかを見出すために、われわれは、そこにヒントがあるなら何でもつかむように、日誌の行間にあるものを読まなくてはならない。



あるひとつのことについて言えばこうだ。その日は寒かった；しかし、これは、単に、まあ、その程度ということであり、日誌のなかでとりわけ強調されているというものではなかった。かなり寒かったというときには、— 気温が、一日中零度まで上がらないようなとき— そんな時には、隊長たちは、最初は、隊員を必要に応じて外に出すだけだったが、だんだんそれを平常的にするようになった。しかし、しなければならぬ屋外での仕事はあった。砦の中の暖を確保するために膨大な量の薪を必要としたのだ。さらにそれに加えて、鍛冶の炉にくべる炭が必要だった。



この探検隊の快適という概念は今日のわれわれの持っている感覚とは全く違っていた。家具を作っていたというような記述は日誌のなかになかったから、彼らは多分、短く切った丸太の上に座っていたのであろう。動物の毛皮でできた布の覆いなんてなかったし、取替えができるベッドシートなどもなかった。堅く冷たい床に敷いたバッファローの毛皮は暖かかったが、ちょっと使っていると、バッファローの毛が抜けてしまい、その布につきささっていて、それが、隊員たちの目に入った。洗濯をするということは、火の上で水の入ったなべを温めるということを意味していた。そして、零下 40 度にもなると、わずか 100 ヤードしか離れていない屋外トイレに行くことが、まるで、一マイルの道のりのように思われた！

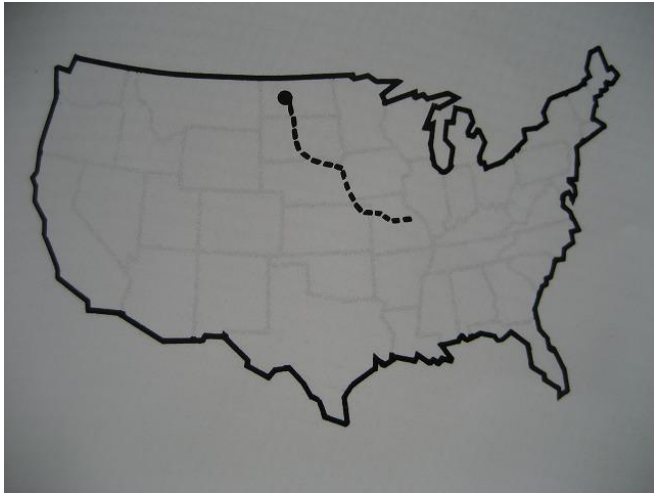
各人の日誌のなかには、辛い日々の生活の犠牲と苦悩の記録がある。冷たい氷の上で滑り、あざをつけた；ひどいときには、骨折したり、あるいは、ひねったりした。プライオール軍曹は、肩を脱臼した；その箇所を直すそうとしたが、元にもどるのに、四回も治療した。時には、よく、ナイフを滑らせた、そして、少なくとも、二回は、隊員が、斧で重傷を負った。裸火での生活は、たびたび火事になったことを意味している。霜やけは当たり前だった。時には、ものすごい霜やけになった。また、リュウマチにも悩まされた。特にクラーク隊長はひどかった。(ある日には、彼の首のリュウマチがひどく、彼は、食事すらできなかった；そんな時には、彼は一日中地図作りに専念していた)

これが、開拓者達の典型的な冬だった。



1805年2月11日 月曜日

この日の夕方、5時ごろ、シャボノの妻の一人〔サカガウェア〕が元気な男の子を産んだ。
ウィリアム・クラーク



この冬の間、シャボノオという名前の男、彼はインディアンたちと一緒に生活していたのだが、彼からの申し入れがあり、この探検隊の通訳として雇われた。（彼は、フランス語のほかに、幾つかのインディアンの言葉を知っていた—しかし、英語は話せなかった。ラビッチが、フランス語を英語に訳した。）彼には、二人のインディアンの妻がいた。その中の一人は、彼女は、16歳で、数年前にミニタリス族により略奪されてきて、その後、売られたか、あるいは、ギャンブルの代償なのか、シャボノオの持ち物になったショショネ族（スネーク族とも言う）のインディアンだった。彼女の名前はサカガウェアといった—この名前は、最近の女学生なら誰でも知っている。隊長たちは、すでに、インディア

ンたちから沢山の情報に手に入れており、このとき、ミズーリ川の水源地から、コロンビア川の水源地まで、高い山の峠越えていくには、沢山の馬が必要であり、その馬をサカガウェアの部族、つまりショショネ族から買わなければならないということを十分に認識していた。だから、シャボノオが、彼女と一緒に連れて行くと頼んだ時に、これを了承した。

しかしながら、この2月11日の時点では、誰の気持ちの中にも、馬を購入するなんていうことは考えていなかった。このとき、サカガウェアは、まだ、十代の娘だったし、彼女は、おなかの中に子供がおり、マンダン族の土作りの小屋のなかにいた。それに、外はまだ雪が降っていた。通訳のフランス人の男が突然小屋に入ってきて、ルイス隊長に、ガラガラヘビの粉薬を飲ませれば、直ぐに赤ん坊が生まれるといった。そこで、早速それを試すと、なんと、10分後に赤ん坊が生まれた（ルイス隊長は、その薬が効いたかどうかは疑わしいといっていたが、）こうして、この兵士の探検隊には、少女と、そして、生まれたばかりの幼児と一緒にいくこととなった！

春がやってきた。隊員たちは、早々に、氷の川に漕ぎ出す丸木舟をつくり、それを、手直しするために、砦の中まで持ち込み、準備を始めた。川を船で遊んでいくことができる場所は、ここからは少し狭すぎたので、大きなキールボートは、それまでに集められた科学的な標本とともにセント・ルイスに送り返すことにした。分隊が上流に行き、6艘の丸木舟を作れるだけの大きな木を探し出した。こうして、間に合わせの船乗りが、熟練しなければならない新しい道具を手にしたわけである。これらのボートは粗造りであったが、よく働いた。

ある日のこと、川の氷がとけた。そ



して、隊員たちは驚くべき光景を目にした。なんと、この冬の間ににおぼれて、そして、下流に流されていく、丸々と太ったバッファローの死骸をインディアンたちがかき集めているのだった。― 氷から氷に飛び移りながら、その周りに綱をかけているのである。それは、まさしく、“丸々と太った” バッファローの素晴らしい食料であったが、しかし、これは、兵士達には全く準備のできていなかった、この高地大草原のご馳走であった。

4月7日に、キールボートと、その船員がセント・ルイスに向かって川を下っていった。そこには、毛皮の箱と、インディアンたちの工芸品、鉱物、押し花になった植物、研究用の生皮、そして、生きた標本；一匹のプレーリー・ドッグ、四羽のマグピ、そして、プレーリー雷鳥など、を入れた籠などが積み込まれていた。（このキールボートは、5月の25日にセント・ルイスに到着した。そして、貴重な荷物は、やがてワシントンに送られ、ジェファースン大統領を完璧なまでに喜ばし、そして、彼を魅了した。その資料の一部は、今日、Harvard's Peabody Museum ならびに、Philadelphia Academy of Natural Sciences で見ることができる。）

このキールボートは、川を真っ直ぐ下っていったが、隊長たちは、隊員たちに丸木舟と丸太舟に乗り込み、そして、上流を目指していくように命令を下した。これが、この隊の最終的な隊員たちで、太平洋の海岸に行くことになったその数は、33人であった；（隊長たちも含め）28人の兵士、2人の通訳、ヨークとサカガウェア、それに、若い赤ん坊であった。その日の日誌に、ルイスは、“……われわれ、今こそ、少なくとも、2,000 マイルの広大な大地に踏み込もうとしている：そこに、天使がいるのか、それとも、悪魔が待っているかは、行ってみなければ分からない。”と記していた。

彼は、正しかった。

1805年4月25日 木曜日

……イエロー・ストーン川の土手にキャンプを張ることにした……この辺り、どこを向いてもバッファロー、エルク、そして、アンテロープの大群で覆われていた……バッファローやエルク、そして、アンテロープはとてもおとなしく、われわれが餌を食べている彼等の近くを通っても、彼等は別段驚いて興奮しているようなことはなかった；そればかりか、時には、われわれが彼等の注意をひきつけたときなど、彼らは、われわれが一体何者かと探るようにすぐ目の前まで近づいてきた……

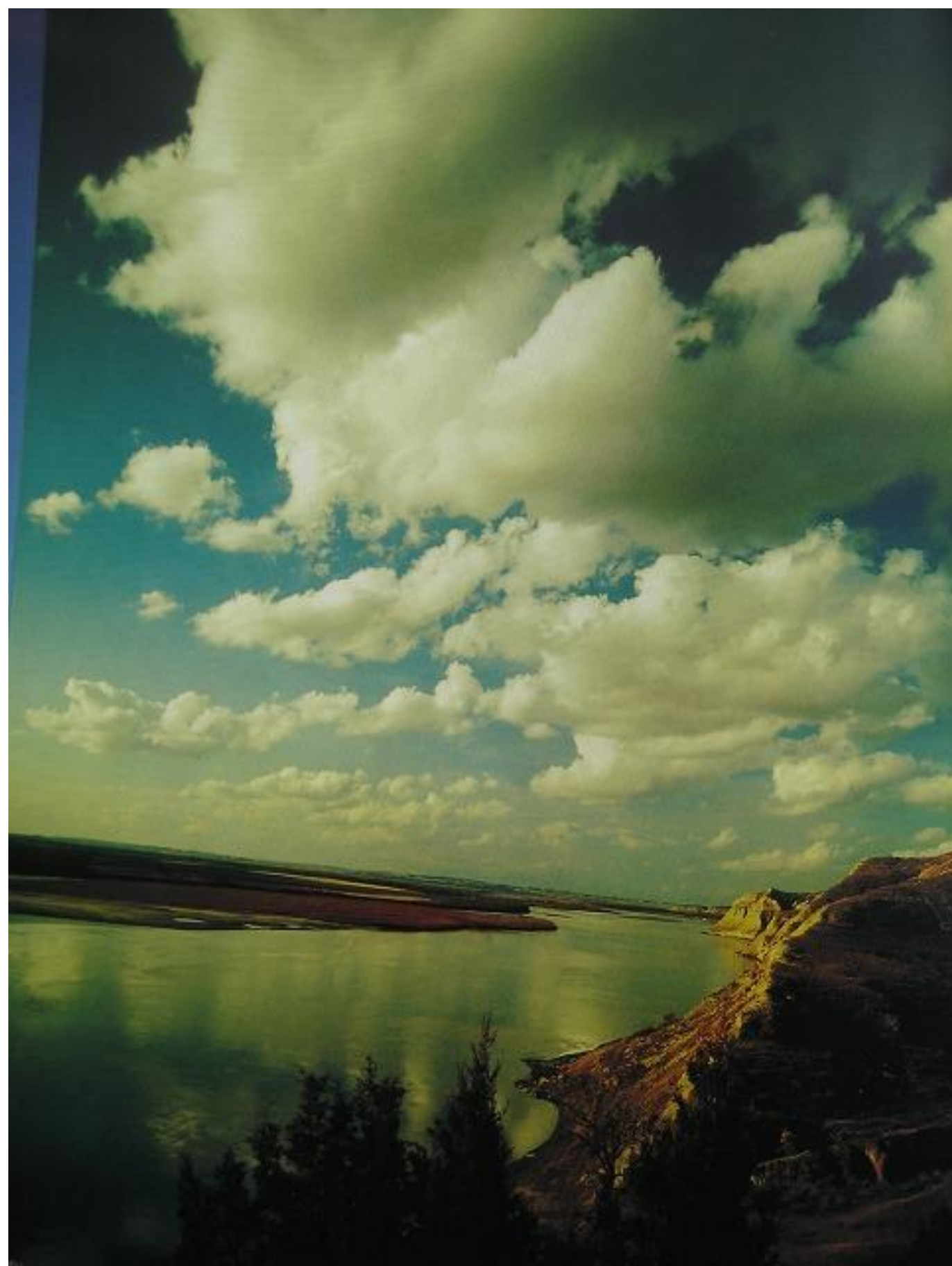
メリウェザー・ルイス



最初の日、あるいは、マンダン砦を出発してからしばらくは、狩猟の男達は沢山の獲物を見ることがなかった。動物達が、大きな住居の周りから遠ざかっていたためである。しかし、再び移動してゆくには良い気候であった。二人の隊長は、長い間土手を歩いていた。4月9日にクラークは、蚊をみた ―ただ、それは一匹だけだったが、彼の記録は極めて感情的になっていた。彼がそれを日誌に記すのにトラブルがあったからだろう。彼の心配は当を得ていた。まさに、次の日、ルイスはこう書いていた。“今日は、われわれにとって蚊がとてもうとうしかった。”と。そして、クラークもこう書いている。“蚊が厄介だ。”と。明らかに、隊長たちは、時々、日誌を合作していた。（多分、ボートに揺られながら並んで話をしていたの

だろう）；彼等の書いていた綴りはとても違っているが、文章は非常に似ている。

直に、獲物が現れ始め、その数は、これはもうとても多くて数え切れないほどだ。彼らは、“膨大な数の”、バイソン、エルク、



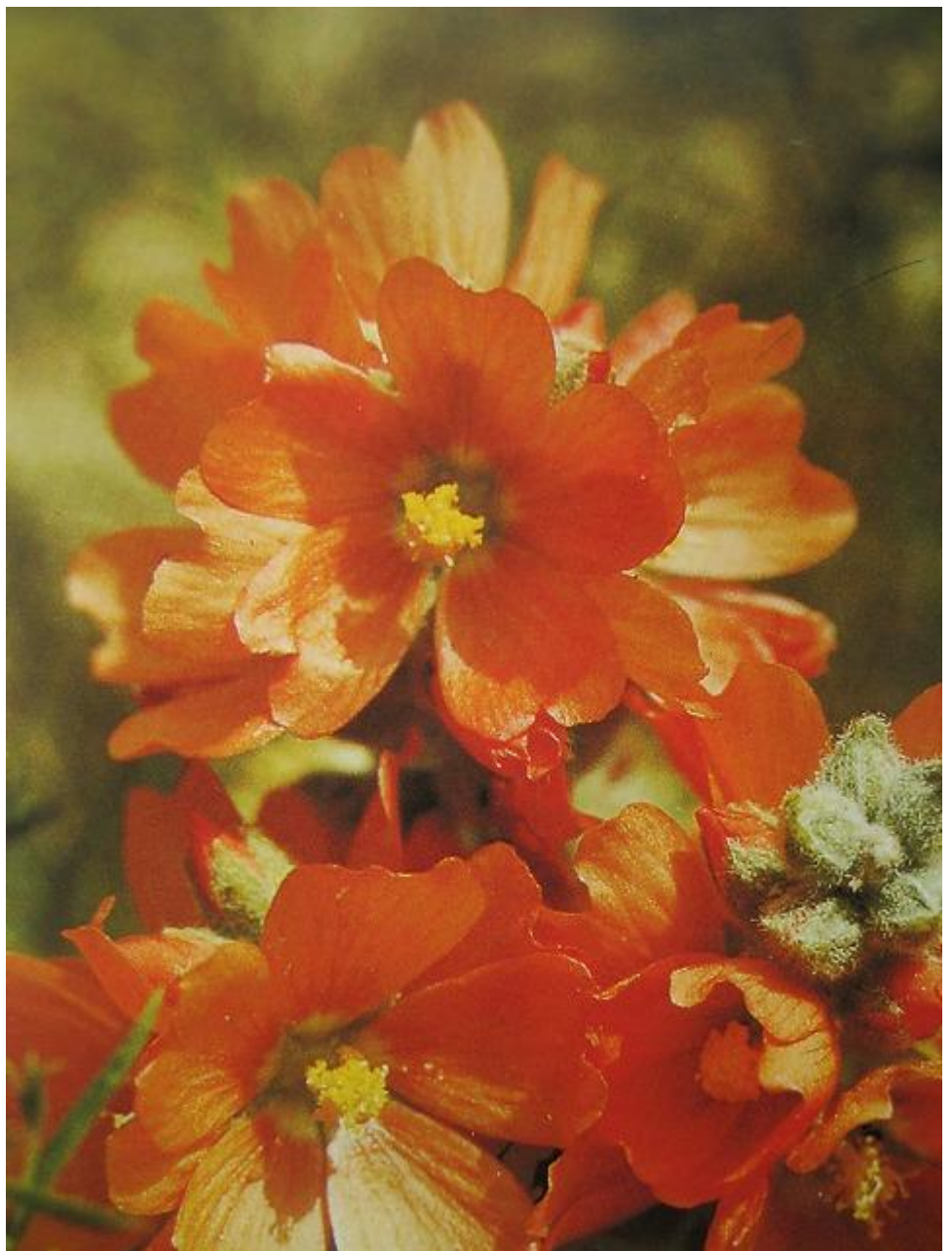
そして、何匹かの熊を見た。ビーバーの姿も沢山見え始めた。彼らは非常に上品で、とりわけ、その尻尾は見事であった。

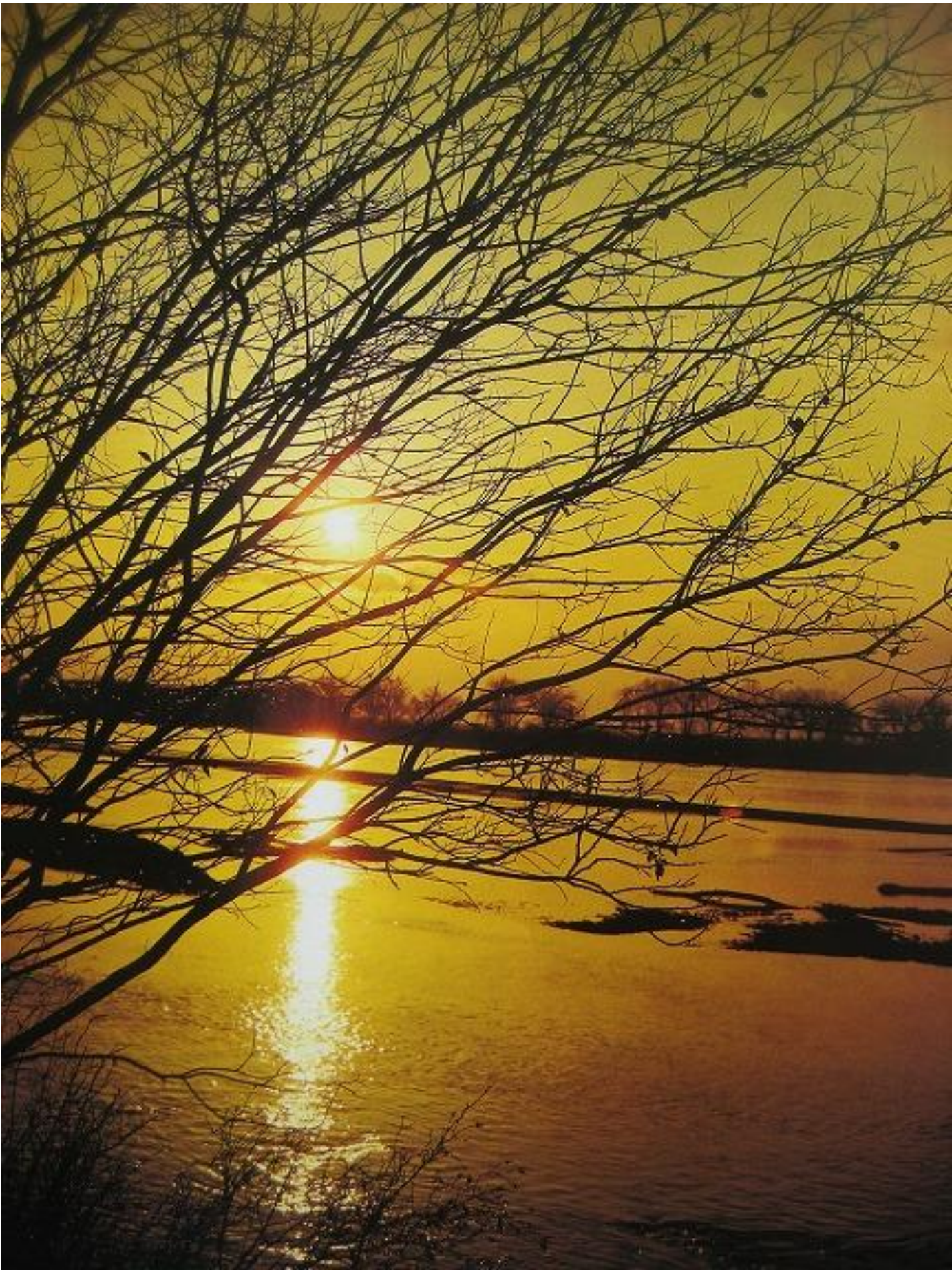
彼らが、マンダン砦で雇った通訳のシャボノオは、船乗りとしては失格だった。不運なことに、かれは、突然、突風がボートを襲ったその丸木舟を操っていた一人だった。彼は、思わず櫓を誤って漕いでしまい、ルイス隊長とドリユエーが、その状況を立てなお曾田時には、もう、ほとんど、転覆寸前であった。それは、まちがいなく災難であった。彼らは、冷たい春の雪どけの川の流れの中に 200 ヤードも流され、そして、一丸太船(pirogue)のほうは、丸木船(dugout)のほうよりもいづれか安定していた。その丸木船の上には、三人の泳ぎのできない隊員、サカガウェアと彼女の赤ん坊のジーン・パプテスト(ニックネームをクラークが“ポンプ”とつけていた)、そして、彼等のもっとも大事な書類と取引交換ようの品物が乗っていた。それは、人同然だった!

何回か、強い風がふいて完全に彼らの行く手を阻んだ。そんな時には、彼らは岸に上がり、一日中、あるいは、それ以上に待つことを強いられた。たびたび、丸木船のなかの荷物が水浸しになったが、このことは、その旅にそれを乾かすために止まらなければならなかったということを意味している。失敗は良き先生である、こうしたことは、一度経験したら、彼等は、二度と失敗しなかった。彼らは、学び、そして、だんだん賢くなっていったのだ。

4月13日に、この日彼らは、しばらく一緒についてきた三人の白人のわな猟師たちと別れた。発見の探検隊は、それから彼らが如何したのかは知る由もなかったが、彼らは、それ以後、一年半の間というものの、そのほかの“部外者”たちに会うことはなかった。ここから、彼らは、この大陸に何千年と過ごしてきたアメリカ人にだけ会うようになった。

彼らは、イエロー・ストーンの河口を捜し始めた。冬の間、それは、鹿の毛皮の上に描かれた墨の筋にすぎなかったのだ;今、彼らは、いつの日か、角を曲がると、彼らの左手に轟々と音を立てていることを予測していた;彼等は直ぐ近くに来ていると判断して、ルイス隊長は、前にどんどん進んでいった:それが正しいと思っていたのだ。そして、10 マイルも行けば直ぐに見つかると思っていた。ボートがここにあがってきたとき、彼等は全員でウィスキーの樽をたたいて祝った。ルイス隊長は、この場所こそ、西に進む水路の重要な分岐点であると理解した ―そして、辺りにはビーバーたちが群がっていた。彼は、ここに砦を作るべきだといった。そして、24年後にユニオン砦がこの場所に作られたのだ。(今ここは、国立記念碑となっている。)





1805 年 5 月 9 日 木曜日

・ ・ クラーク隊長は二匹のバッファローを射止めた ・ ・ ・ 最上の肉を確保した、そして、私が射止めた雌牛から右手利きの料理人のシャボノオがバウディン ブランクと呼んでいるものをつくるのに必要なものを用意し、直ぐにかれにそれを使って夕飯を作らせた；このホワイトプディングは、われわれすべてのものが、この森での最高級のもの1つであると賞賛した ・ ・ ・ 約 6 フィートもあるバッファローの大きな腸の下半分が最初の一切れで、 ・ ・ ・ 背中に続く肩の肩甲骨の真下の筋肉、そして、ヒレ肉がつぎに求められるもので、これらは、一組の腎臓とよい具合に混ぜると素晴らしいものにするのに必要だった；そして、こうしてできた組み合わせに、適当な量の胡椒と塩と少量の粉が加えられる ・ ・ ・ 食べられるようにこうした食べ物がうまく詰め込まれる。この詰め物は一端が縛られているのだ ・ ・ ・ そして、これを二度ほどミズーリ川の水に浸して、パタパタと動かし、洗浄してから、ヤカンの中にひょいを入れる；これを良く茹でてから、それを取り出し、次に、熊の油で、表面が茶色になるまで揚げる。こうして、猛烈な食欲の苦悩、あるいは、荒野の旅人達が途方にくれるような食欲を満たす準備ができる ・ ・ ・

メリウェザー・ルイス

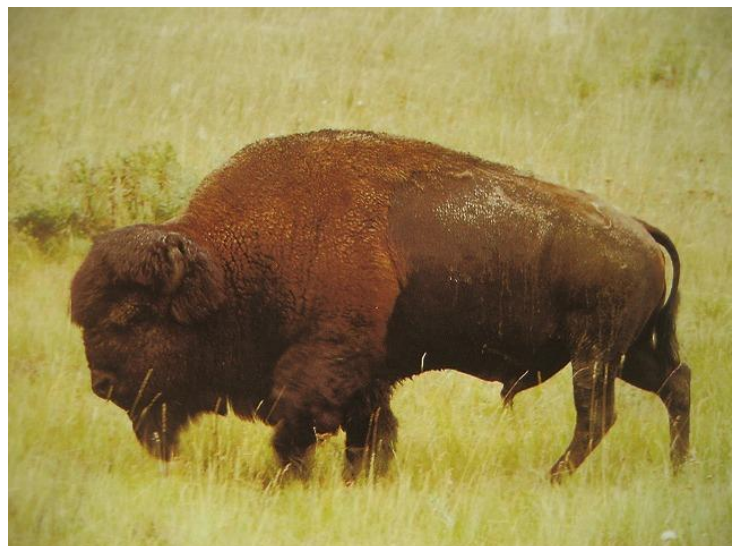


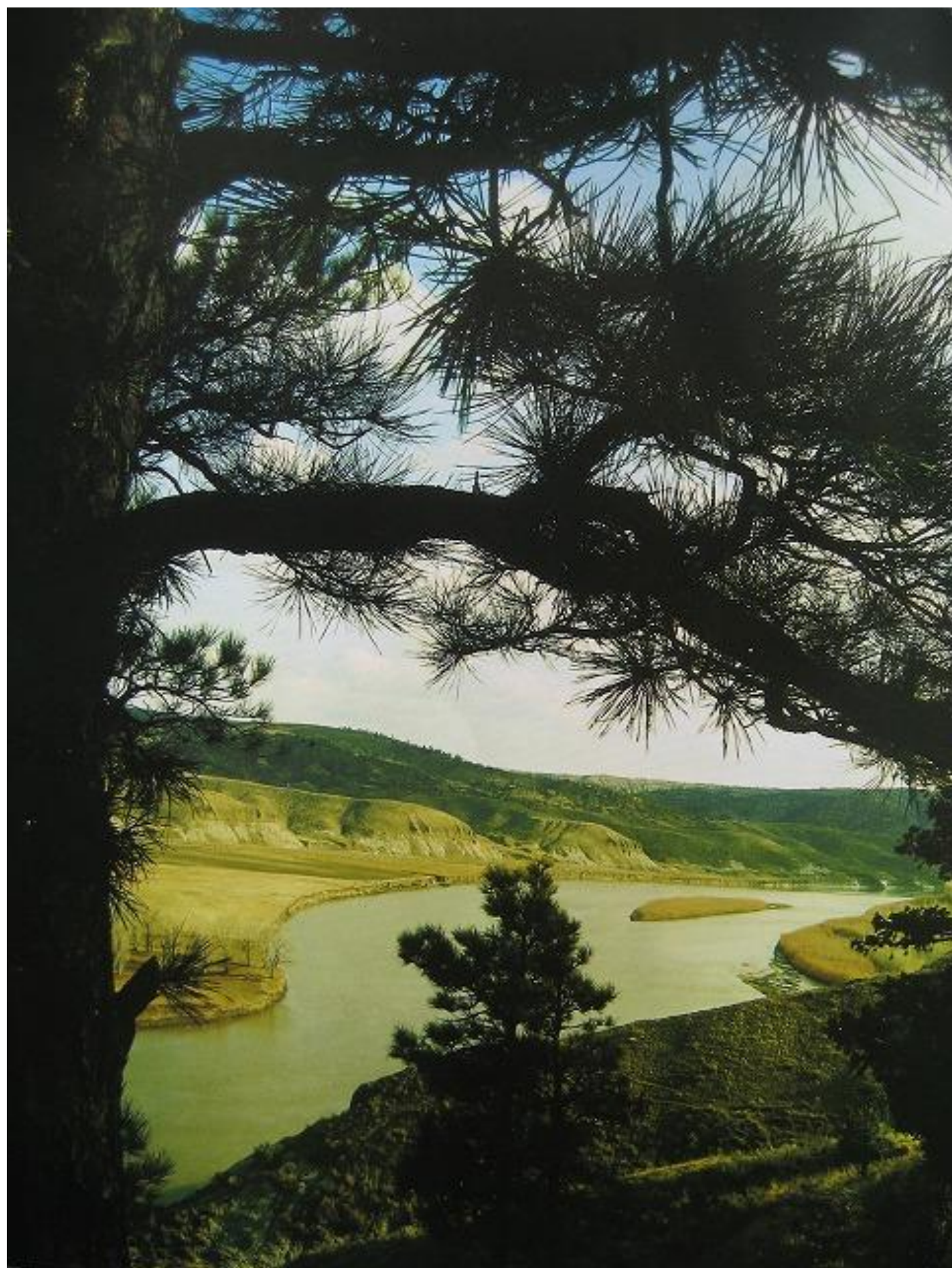
野外で生活し、そして、まさに前進するために必要な怪力労働を実行している 31 人の健康な隊員たちの食欲は、ものすごいものだった。この探検隊は、通常三つの“食事グループ”に分かれていて、それぞれが、独自の料理番をもっており、彼は、見張り番とそのほかの仕事を免除されていた。また、優れた狩の腕をもっていた二人の隊員、トリュイヤーとコルターは、すべてのグループのために狩をしていた。狩は、このミズーリ川の上流の流れに周辺では困難なものではなかった：ルイス隊長は、二人の尾てこは。簡単に沢山の食料を確保できると宣言した。（このことは、単なる比喩のようなものではなかった：それは、辺境地の軍にとっては極めて重要な認識であった—

これは、将来、軍部がこの地域で作戦を展開するときに必要とするであろう情報の類であったのだ）

しかし、この獲物の数は、旅全体の間、数えられなかったにちがいない。そして、慎重な隊長たちはそれをしていった。かつて、ハーバー・フェリーの兵器工場で、彼らは、当時、軍が実験中であつたある乾燥スープ（それは、悪評高き、“C-割り当て”の試供品）を支給された。そして、マンダン砦で過ごしていた冬の間に、彼らはそれをインディアンたちのトウモロコシと交換した。そして、いま、隊長たちが、隊員の何人かがすでに保管してあつたトウモロコシを切ったことに気付いたときには、そこに沢山の大きな粒があつた。この旅の終わりの前に、腹をすかしたこの探検隊は、やせた馬や犬、牛脂でできた蠟燭、そして、一食べ物が何もない、その味を知ることになるのだつた。

しかし、今は5月だった。そして、沢山の肉があつた。確かに、あるのエルク、鹿は秋のものに比べると堅かつた。また、風が砂を一口ごと吹き込んだのも確かだった。しかし、ルイスが書いていた。“ ・ ・ ・ われわれは健康そのものだ。そして、あらゆる必要な栄養を満たすだけのものを食べている。われわれは、まさしく健康的な食事をしている ・ ・ ・ ”





1805 年 5 月 11 日 土曜日

ブラトンが・・・茶色の熊を撃った。すると、その熊は途端に向きを変えて彼を相当な距離の間追いかけてまわした・・・われわれは、やっと・・・非常に深い藪の中に隠れている熊を見つけた。そして、二発の玉をその頭めがけて撃ち込んだ；・・・調べてみると、ブラトンの弾は、肺の真ん中に命中していたことが分かった、が、それにもかかわらず、この熊は彼を半マイルも追い掛け回していたのだ；こうした熊は、われわれのようにそう簡単に死ぬようなことはなかった；私は、正直、私は紳士が好きでないということと、一匹の熊より、二人のインディアンと戦うほうがよっぽどましだと白状しなければならない・・・

メリウェザー・ルイス



5 月のはじめに隊員たちがグリズリーの足跡を見つけ、その大きさを測った。すると、それは、なんとわれわれのものより 3 倍も大きかったのだ！ かつて、マンダン族の小屋で、冬の夜にキャンプファイヤーを囲んでくつろいでいるときに、隊員たちはインディアンからこの恐ろしい熊の話聞いたことがあった。インディアンたちはこう言っていた。グリズリーは逃げるところか、向かってくるんだ；一匹の奴を仕留めに行くときには、男は、あたかもこれから戦に行くような化粧をしなくてはならないんだ；そして、奴をと仕留めると、それは、ブラックフィートの戦士（ やっつけた ）ほどの“大手柄とされる”ほどの荣誉がもたらされると。そして、彼等の話によれば、これは、よい道理だった。；殺したものがいつもグリズリーだったとは限

らないのだ！ しかし、探検隊は、まさに最新鋭のハーパー・フェリー1803 という火打ち石銃の試作品を支給していた。だから、隊員たちはなんの心配もしていなかったのだ。4 月 29 日に、ルイス隊長がこんな記録を残していた。“インディアンたちは、この動物が彼等と同じように弓と矢を、あるいは、まるで無感覚な耐風マッチのようなものを装備していると思い、とても恐れていた。しかし、腕の立つライフルマンの手からすれば、かれらは言われるような手ごわさや危険性は何もなくった。”

最初の、そして、二匹目のグリズリーが予想されたように彼等の手にかかって殺された。多分、その大きさに、兵士達は、これは簡単には行かないぞというかすかな恐怖感を覚えたのだろう。しかし、それほどこずるものではなかった。その後、ブラトンが、5 月の 11 日に、なかなかくたばらない一匹と格闘した一事実、そいつは、もうくたばるはずなのに攻撃して来たのだ。日誌の書き出しは、その語調が変わりはじめた。

その三日後に、彼らは、草原で寝ている一匹を発見し、六人の狩人がそれにそっくと近づいていった。40 歩くらい離れた彼らの隠れ場所から続けざまに射撃をし、そのすべてが命中した。と、その歳とった怪物が襲いかかってきたのだ。そして、まだ射撃していなかった二人が、発砲した。これもまた、



命中していた。しかし、こうしたちょっとした傷は、単に、その熊をさらに激怒させるだけだった。もはや、大混乱だ！ 男たちは藪の中に逃げ込み、そして、彼らの火打石銃を再度使う準備と、装填の複雑な工程に懸命だった。（火薬を出すんだ、量は適当か、そして、それを銃筒につめろ。グリースを塗った宛て金と弾を取り出せ、弾は、筒先へ。突き棒を取り出せ、弾を装填するんだ。突き棒を戻せ。今度は、火皿だ。火薬をもう一度出せ。それを少しだけ火皿に入れるんだ。火皿をとじろ。さあ、撃て。繰り返すんだ。）しかし、何度撃ってもその効き目はなく、それは、藪だろうが、なんだろうが、鉄砲の弾が飛んでくるほうに突進してくる熊に、かれらがどこにいるかを教えているだけだった。二人の男が、20 フィートもある土手を飛び越えて、川に飛び込んできた；歳とった熊が彼等の直ぐ後にきた。最後に、誰かが、その熊の頭めがけて弾を撃ち込んだ。彼らが、熊を岸に引きずり出し、そして、止めをさしたとき、彼等は、両方の肺と肩を打ち砕いた弾丸も含め、8発の弾が命中していたことを知った。こうした言葉の裏に、グリズリーを称えるためにどれだけのものがしたためられていたのだろう。

1805 年 5 月 26 日 日曜日

・・・・私は、この時、初めてロッキー山脈を見た・・・・これが・・・・山々の頂は雪で覆われ、太陽が、まるで、私に、もっともはっきり見えるように、そして、素晴らしい光景を作り出してくれるようにその上に輝いていた。こうした山々を見ていて、私は、自分が以前は限りないものと思っていたミズーリ川の水源近くにいることがわかり、神聖な喜びを感じていた；しかし、・・・・この雪の障壁が、多分、まちがいなく私がこれから目指す太平洋への道に投げかけるであろう幾多の困難と、そして、私のみならず、われわれの仲間の苦難と過酷な運命のことを思い浮かべていた・・・・

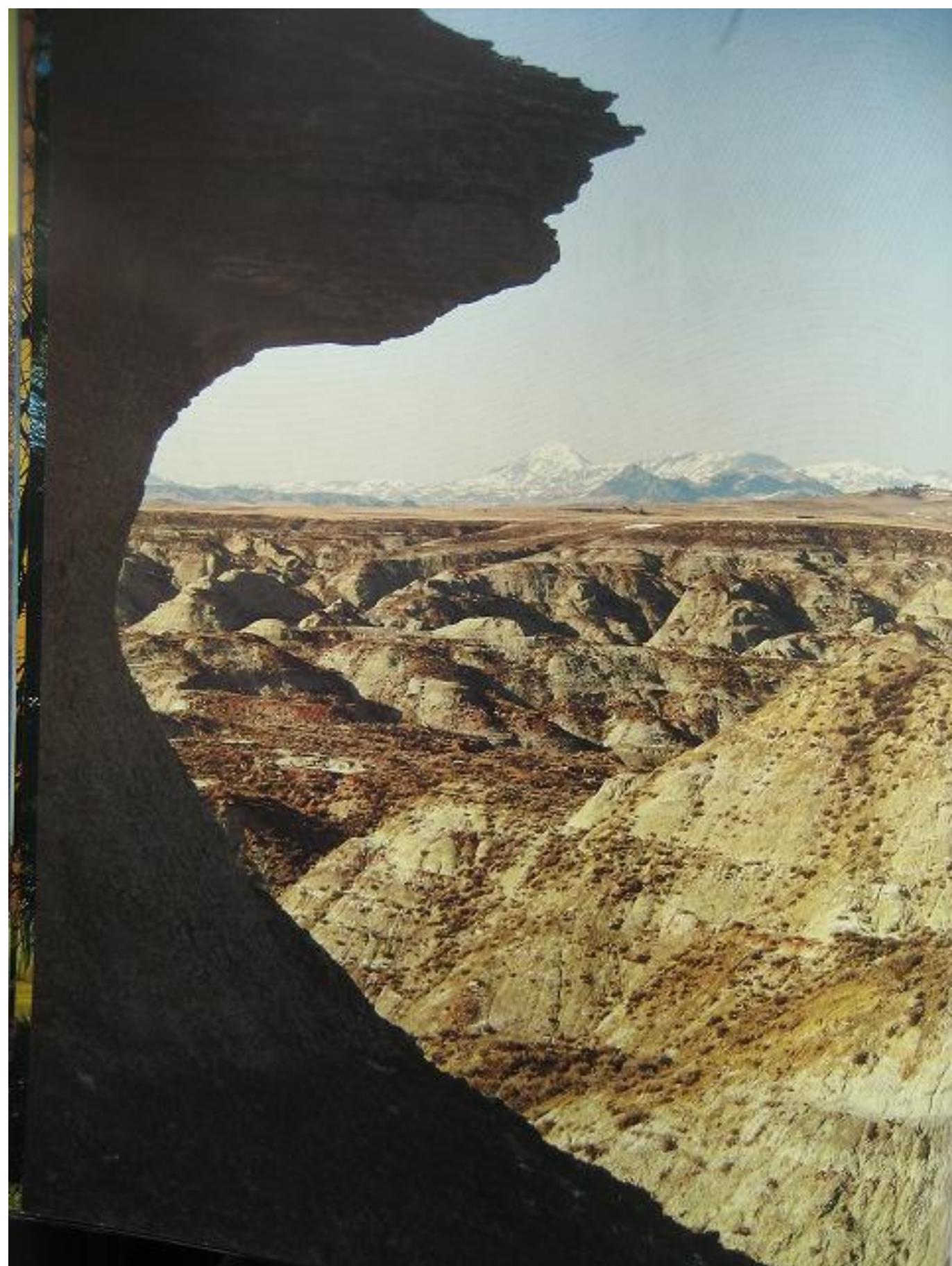
メリウェザー・ルイス



隊員たちは、つかの間の休憩を取るために櫓から目を上げ、そして、ロッキーの山々を見上げた ― 頂は雪の帽子をかぶり、はるかかなただ、そして、静寂であり、巨大であった。隊長たちは、良く見るために日誌の手を休めた。事実、現実が閉じようとしていた。たった一年前、ジェファースンとルイスとクラークは、大きな白い箇所のある地図を囲んでいた。そして、ミズーリ川とコロンビア川の水源地同士が入り組んでいる場所のこと、太平洋を横断し、東洋から水運による貿易路のこと、コロンビアに到達すること、大分水嶺を越える一日がかりの陸路の荷運び（ワゴンであれば簡単であろう）、そして、再びミズーリ川をくだりセント・ルイスに戻り、もたらされる利益について話をしていた。今、こ

こは、骨迫ってやっとセント・ルイスから、2300 マイルの地点、ルイスとクラークは、その“一日がかりの陸路の荷運び”をする地点に近づきつつあった。そして、とてもかなえられそうにない現実が、その地図の白紙のところを埋めていたのである。

この、堅固で、知的で、経験豊富な一団が、今、これまで貿易商やわな猟師たちを打ちのめしてきた困難と、日課のように闘っていた。ここには、沢山のがらがら蛇のような噛み付いてくる動物がいたが、でも、隊員たちは沢山の蛇を殺して、それで、新しい種目の科学的な説明書きをしていた。（彼らは、北太平洋ガラガラヘビと、プレーリーガラガラヘビについて最初に記述をした人たちであるが、彼らの発見したこの地域でのもっともさえたる動物は、堂々たる風格をした巨大な角をもったヤギであった。）彼らは、もう、ここでは、グリズリーに追いかけることを書き記すような頭を痛いことはほとんどなかった。シャボノオが、スクールが来て、またパニックになり、へまをしたとき、丸太船が浸水して、転覆しそうになった。クルザット（かれは、フィド



ラーの持ち主であるが)が、銃で撃つぞと言って脅かし、シャボノオのパニックを沈めた。そして、サカガウェアが、その近くに浮かんでいた器具を回収して隊長たちの信頼を得た。その後、彼等は岸に上がり、荷物を乾燥するために二日間ほど滞留した。ある日の晩、キャンプファイヤーの火が、リーダー達が寝ていた布のテント(インディアンたちのものを真似たものであるが)の上にかぶさっていた木の枝に燃え移った。見張りが大声を上げて、彼らに気付かせ、大きな、燃え盛る枝が、彼らの寝ているところに落ちてくる、その難を逃れることができたのは、間一髪のところであった。

彼等は、冒険をするために堅固にされた隊員たちだ。毎日、日課として、そこに何があるのかを見るためにクリークのような道を 10 マイルも歩き続けていたのである。軍隊で支給された、羊毛の服と、購入した靴は、もうどうに使い古いしてしまった；彼等はモカシンを身につけ、着ているのは、鹿の皮でできた服だ。それは、適当になめしてやわらかくする時間などないから、ごわごわして、重かった。この時期、寒さもきつかった。5月ではあったが、とにかく、標高が高かった。朝は、川の縁には凍りが連なっていた。そして、彼らが漕ぐときにはオールにも氷が張っていた。状況が悪く、もう、これ以上漕いでいくことはできなかった。ミズーリ川はいまや山の川となっていたのだ。隊員たちは、胸まで、氷の解けた水につかりながら悪戦苦闘して進むか、あるいは、ぎざぎざと岩が突き出た場所を越えてもがきながら、ボートを引っ張り揚げなければならなかった。これが大陸を侵食し、削ったものを海まで運んでいる、春のミズーリ川の姿であった。うす汚い土手と、乗り出した川岸はどこでも崩れていた。そして、時々、丸太船とその漕ぎ手を呼ぶ声が近くにあった。

ここには、注目に値するような目覚しい出来事はなく、あるのは、畏敬とか、疑念の記録だけだった。隊員たちは、毎日、よくやった。そして、彼らは、そのときは、気がつかなかったが、数週間後に、彼らは、これらの日が、実は、まだ、ほんの序の口であったと振り返ることになった。

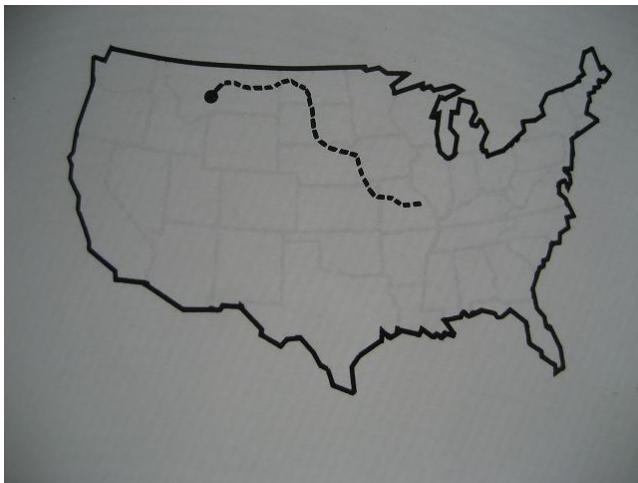




1805 年 6 月 14 日 金曜日

・・・上のほうで、猛烈なうなりを聴いた私は、・・・まさに・・・この自然界のなかでもっとも感激的なものの 1 つを目の当たりにして大変な喜びを感じていた。それは、川の端から端までその距離は、少なくとも四分の一マイルはあろうかと言う、右手に高さ 50 フィートほどの垂直におちる滝、そして、幾つかの段々のある滝だった・・・水は、なめらかな、途切れることのない一枚のシートとなって滝つぼに落ちていく。そして、その水が今度は、一揆にロッキーの谷をめぐらして、ものすごい高さの大波を立て、そして、それが砕けるときには、閃光ときらめきを放ちながら、猛烈な勢いで流れ落ちていく。

メリウェザー・ルイス

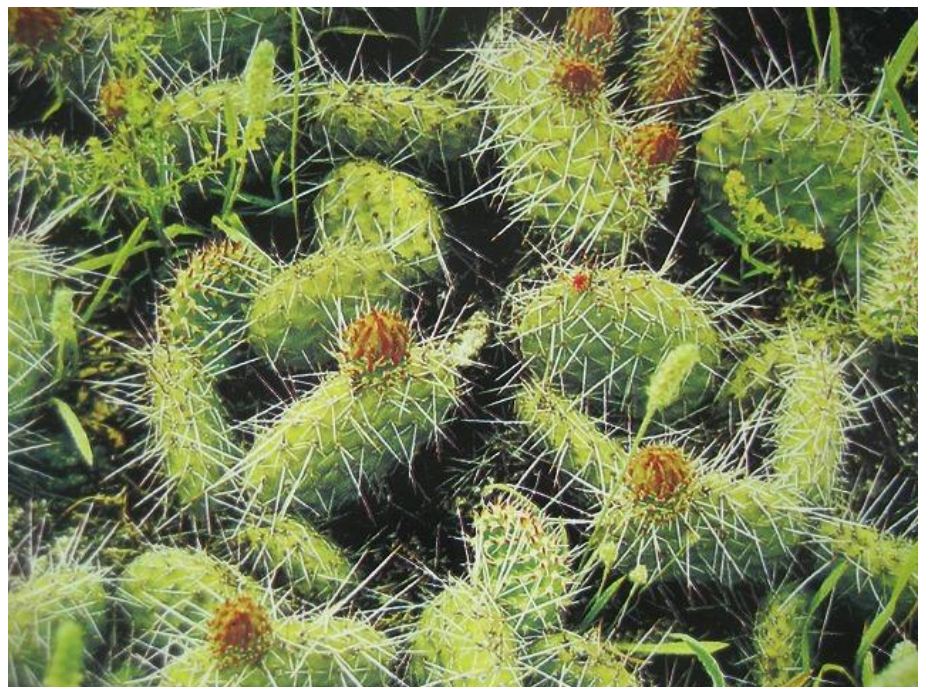


ミズーリ川のグレート・フォールは、和みの気持ちを持って受け入れられた。そして、探検隊には、喜びと悲劇の両方となったのだった。その二週間前に、隊長たちは、川が分岐していることで大変なショックを受けていた；インディアンたちは、そんなことは微塵にも教えてくれていなかったのだ！ どちらの支流がミズーリ川の本流なのか？（勘違いをした支流は、実は、マリアス川だった。探検隊がそこに到達したときには、異常な春の雪解けで水かさが増しており、ミズーリ川の本流ほどに大きく見えたのだ。） 南に向かうコースと決断した後も、そして、その流れを二週間も辿ったあとでも、かれらはそれが正しいものかどうか確信をもてなかった。今、ここには滝がある。確かに、インディアンたちはこのことを言っ

いた — これは、まさしく道しるべのワシの巣と同じだ。

それらの滝は、その美しさからすれば、感激そのものだった。強力なミズーリは、五つの一連の滝となって流れ落ちていた — 一番大きなたちは、高さが 90 フィート程度であった — 水は、そこを猛烈な勢いで流れていた。ルイスは、日誌にはそのときの状況を大変流暢な表現でまとめていたが、最初にそれを見たとき、ものも言えないほど感激していた。かれは、それを、この世の中でもっとも素晴らしい情景の 1 つだと述べていた。それは、（ナイアガラは、そのとき知られていた。しかし、ビクトリアの滝と、ヨセミテの大滝、ならびに、イエロー・ストーンの滝は、まだ知られていなかった。）

そして、滝は、悲劇のもとでもあった。と言うのは、この探検隊は、ここを陸送で迂回しなければならなかったからだ。その陸送の距離はなんと、18 マイルもあった。ここでこれ以外になす術はほかになかった；隊員たちがこの予期せぬ難関に対して為すべきことは、知恵をだすことと、辺境の地で学んだ経験だけだった。漕ぎ手の半分は、これから先上流に持



って行き、有効に使うには大きすぎたので、この陸路の途中、適当なところに丸太船を隠した。他の隊員は、その辺りで、一本の大きなイチョウの木を見つけ、これで大きさが 22 インチの車を四つ切り出した。―これが、この目的で最良の材料ではなかった。車軸にするにはあまりよくなかったのだ。そこで、彼らは、丸木舟のマストを切って、その代わりにした。この人力でできた、一時しのぎの荷車で、彼らは、この滝を迂回する長い引き揚げ作業を始めた。

このはるか山奥の場所は、何か不思議な力と不吉なものにのろわれているような感じがした。サカガウエアが病気になり、瀕死の状態だった。ガラガラヘビがいたるところに出できたし、蚊とブヨが大群で襲ってきた。バッファローがあちこちに水を飲みにきて、川を横切っていった。そして、あるものは、滝に飲み込まれた。グリズリーが死体を食べていた；彼らは、自分の縄張りの特別な感覚を持っていて、隊員たちが出会った動物のなかではもっとも恐ろしいものだった。兵士達の誰もが、あちこちで襲われた。中には、二度も追いかけられたものもいた。ルイス隊長は、三匹のバッファローに襲われたことがあり、また、あるとき、最後まではっきり区別することはできなかったが、豹に似た動物に直ぐ近くまで詰め寄られたことがあった。

陸送する道は、長く、そして、かなりののぼりであった。その上、真夏の暑さは、重みのように降りかかってきた。そして、道々には、ヒラウチワサボテンが群生していて、そのトゲは、鹿皮でできたモカシンを二重にはいているときでさえ、難なく突き抜けて刺さってきた。隊員たちは、小休止をすると、たちまち、居眠りをするほどであった。先を急ぐのは怒りそのものだった。急速は、待つことができた；夏は過ぎ去りつつあった。そして、ロッキーは、未だ乗り越えてはおらず、そこにただ悠然と立ちはだかっていた。

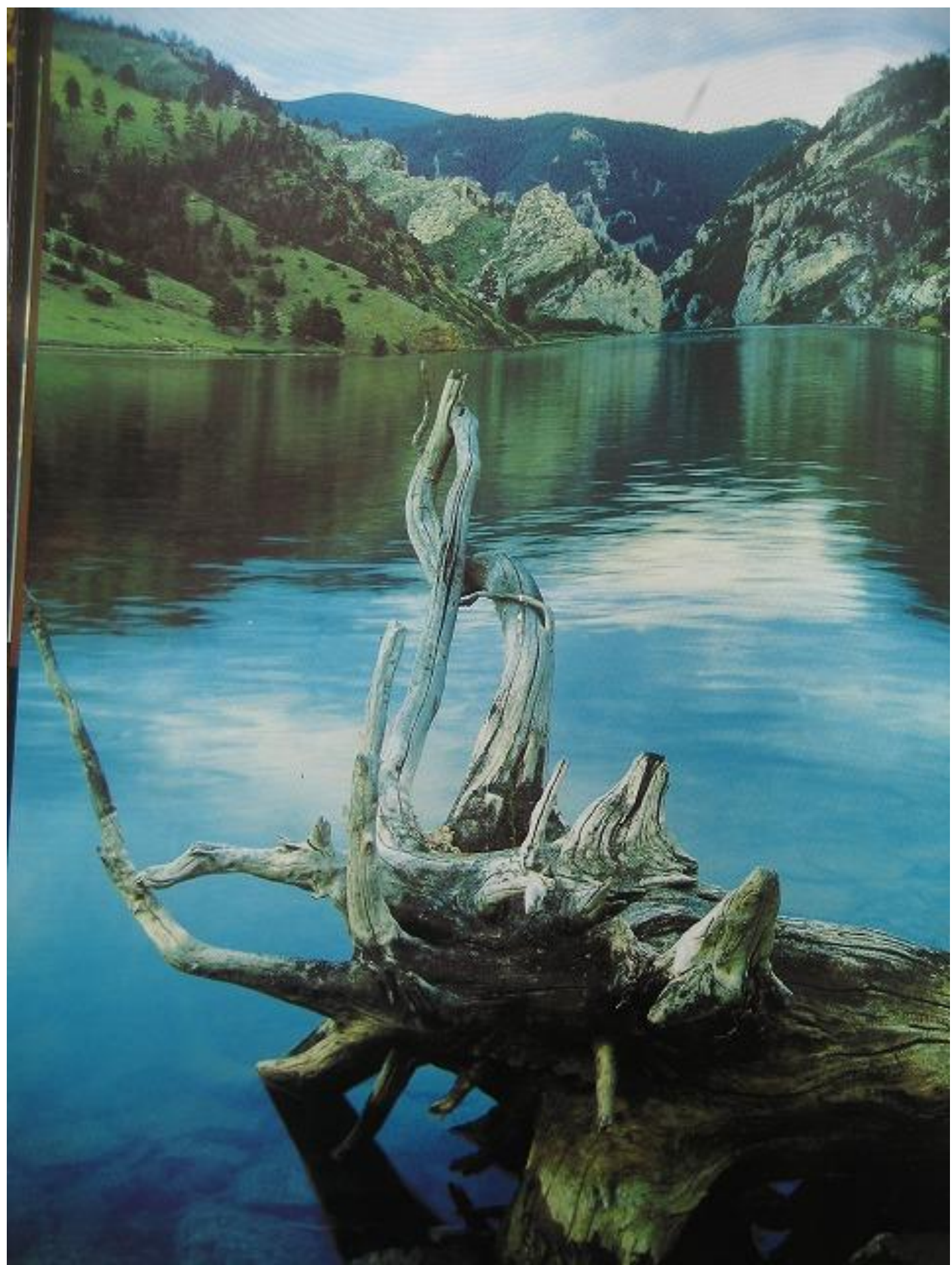


1805 年 6 月 30 日 日曜日

・・・隊員たちは、この日、だるくて気が立ち、そして、のちくらしていることに不満を漏らしている・・・どこを向いても、無数のバッファローが溢れている。その数は、目にしているだけでも、ザッと 10,000 頭はいたのではないかと思います。

ウィリアム・クラーク

WILLIAM CLARK



1805 年 7 月 4 日 木曜日

・・・ここでは、以前、この春に実行したような、セント・ルイスに隊員たちの一部とともにカヌーを送り返す決断はしなかった・・・隊員のすべてがこの探検隊の成功を心に誓い、それを実現することを、あるいは、なんとしてもそれに挑戦しようと固く決心しているように見えた。われわれ、隊員の全部が、今こそ、自分達は、この旅のなかで、最も危険で、そして、困難なところに突入しつつあると信じていた。まだ、誰も不平を言うものがない；隊員のみんなが、われわれが乗り切ることと、不屈の精神を携えて立ち向かうことをまっている、その困難に出会う用意ができているようだ。

メリウェザー・ルイス



探検隊がミズーリ川の滝の迂回になお悪戦苦闘しているあいだに、独立記念日がきた。そこで、隊員たちは、ウィスキーを飲み干した。彼らのお祝いは、単なる形式ばったもの以上のものだった。ルイスとクラークは、二人とも、国そのものよりも歳上であった。彼らは、アメリカが独立するまえに、イギリス市民として生まれていた。そして、クラークの一番上の兄さん、ジョージ・ロジャー・クラークは、その独立戦争のなかで、大活躍をしていた。いま、かれらは、この若い国の探検隊の、そして、外交使節の、その途上にいた。

ワシントンにもどれば、その晩は、仮面舞踏会が開かれていた。おそらく、ジェファースン大統領は、ダンスの合間にバルコニーに抜け出して、暗闇に思いを馳せていただろう。もし、彼がそうしたのなら、かれの思いは、音もなく富んでいく夜鳥のように、シンシナティーからセント・ルイス、そして、クルザットが彼のパイオリンを弾いている、そして、サボテンのトゲでさされた痛みから解放された足でダンスを踊っている隊員たちが楽しんでいるキャンプファイヤーまで、暗い川の 2,000 マイルを飛び越え、この若い国をまたぐように横切っていったに違いない。それは、帝国のもっとも遠い前哨部隊だった。

キャプテンたちは、彼らがマンダン砦でしたように、この滝の場所からも、科学的な標本と情報とともに、ボートを送り返す計画をしていた。しかし、いまや、彼等の目の前にある挑戦の苦難の程度がはっきりしてきて、彼らは、隊員に誰一人余裕はないと判断した。(時代が彼らの判断の正しさを証明している；彼らのもっているあらゆる隊員の力を必要としていたのだった。) だから、彼等は全員で、西の方角に向かっていくこの四日を祝ったのだ。

背中に苦痛を覚える陸路の荷揚げが続いた。そして、周りは、なお、神秘に包まれていた。彼等は、それまで見たこともないような、次々沢山の“泉”、もしくは、湧き水を見つけた。そして、遠くのほうに、これまた、今まで経験したこともないような轟きを耳にした。



この時、クラーク隊長とシャボノオ、サカガウェア、そして、赤ん坊のポンプはかろうじて逃れることができた。ものすご



い雨と山道で男達を血だらけにしている雹の嵐から何とか逃れる避難場所を谷間に見つけたあと、血が突然吹き出してきて彼等を血だらけにした。胸までも水に浸かってものがきながら、クラークは、インディアンの女と彼女の幼子を自分の前にあった避難場所に押し上げた。彼らは、難を逃れたが、しかし、鉄砲、角製の火薬入れ、弾入れ、そして、コンパスをその騒動の間に紛失してしまった。そして、次の日、もとの場所にもどってきて、コンパスを見つけた；さらに、彼らは、自分達が集まった場所に積み上げられた岩の掘っ建て小屋を見つけた。

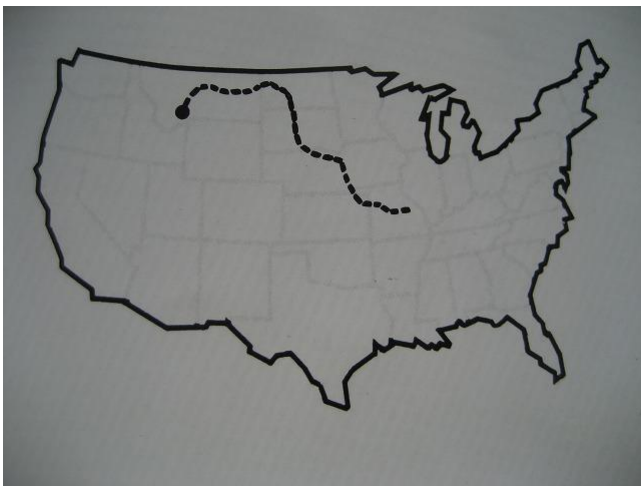
今、かれらは、ちょっとした落胆に直面していた。ルイスは、ハーバー・フェリーの兵器工場に、毛皮で覆うことのできる分解可能なボートの骨組みを作らせていた。そして、彼等はそれをここで取り出して試してみた。しかし、どこにもつなぎ合わせに埋め込み、隙間をなくすための松脂がなかった。というわけで、このボートの試みは失敗したのだ。彼らは、牛脂とおがくずで試したが、それはうまくいかなかった。そこで彼らは、役に経たない骨枠をあきらめ、代わりに、二本の大木を切り倒して、さらに丸太船をつくった。

こうした仕事は、冷酷極まりないものであったが、しかし、ここは、狩猟するには天国であった。キャプテンたちは、肉が欠乏する 때가くることを知っていたので、彼らは、大量の乾燥肉とつくり、“ジャーキー”を蓄えたのだ。7月の15日に一この大滝を通過し、荷物を積み替えた。足は痛かった。一彼らは、積載過剰になった丸太船を、もう一度、川の流れのなかに押し出した。

1805年 7月 24日 水曜日

・ 隊員たちは、あまりの重労働に不満をいっている。彼等の労働は、とりわけきついものがある。私は、時々、カヌーを操る仕事を手伝いながら、彼等を励ましている。そして、彼等の言葉のなかに、耐えられる素晴らしいさおを押すことを学んだのだ。 ・

メリウェザー・ルイス



地図をみると、ミズーリ川は大きなさかさまになった釣り針の形を思わせる。セント・ルイスからマンダン部落までの北にむかう川筋は、釣り針の軸の部分であり、マンダンから、グレート・フォールまでの州を横切り延びているところは、曲がり部で、その滝から、水源まではかぎとなっている。そして、今、隊員たちは南にむけ歩いていた。右手には、ロッキーの高い山々が連なり、日没は短くなっていた。こうした夏の日の暑さは、彼等の強靭さを徐々に奪っていった。しかし、この緯度での涼しいほど夜は、隊員たちに蚊やブヨからのつかの間の開放を与えてくれた。

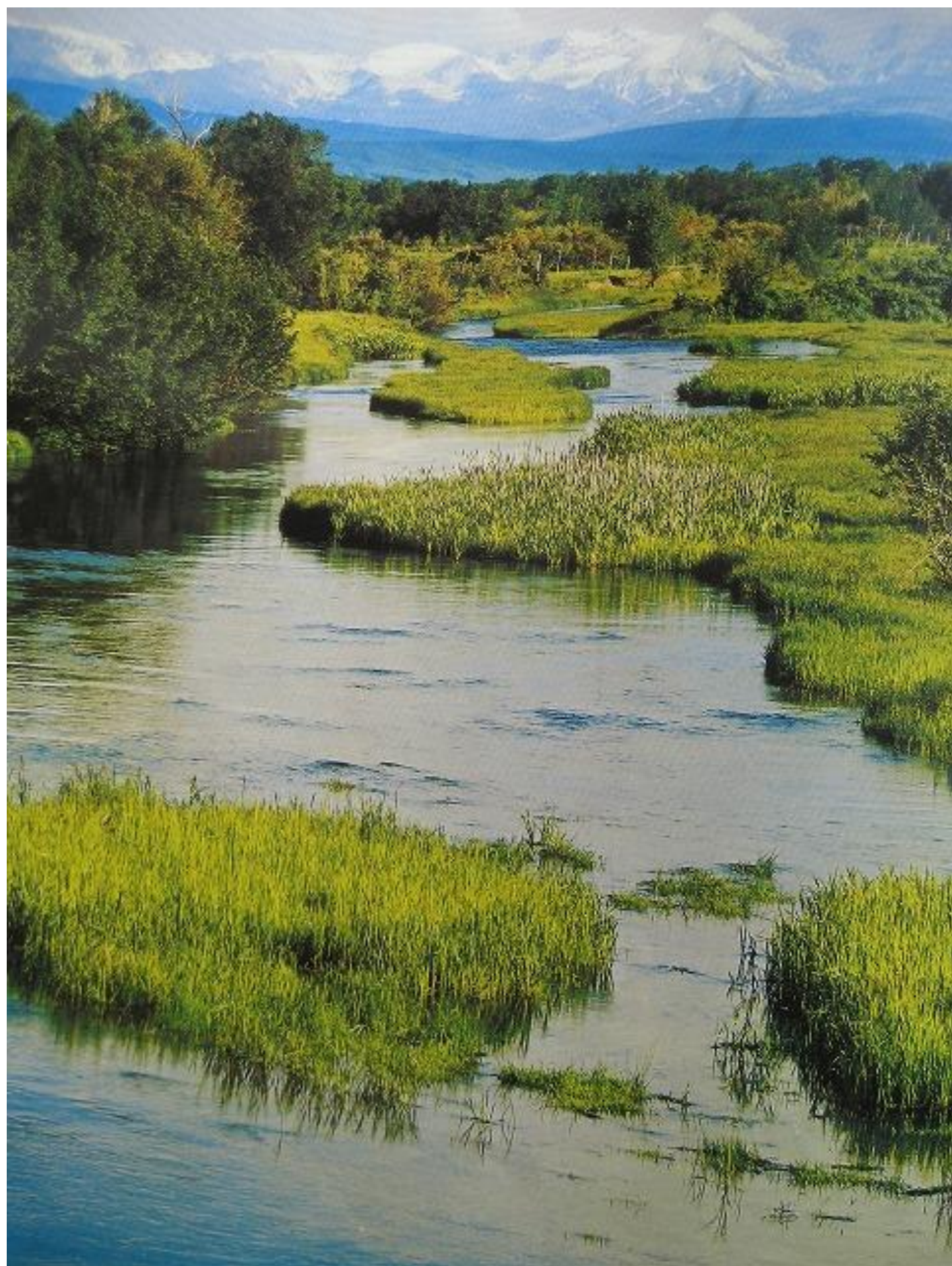
それにしても、ショジョネ族はどこにいるのだろうか？ いまこそ、彼らを見つけなければならなかった；探検隊は、どうしてもガイドが必要だった。そして、それ以上に馬が必要だったのだ。彼らの敵であり、また、見方であったミズーリ川の終点は、もう間近であり、彼等は、それを知っていた。少なくとも一年の半分は、ロッキーは雪で閉ざされているのだ；彼等はそこを乗り越えてゆく道を探して、そこを乗り越えて行かなければならなかった。

サカガウェアは、彼らと接触することを実現するその手助けになることを期待されて、この隊につれてこられた。今、彼女は、確かに、三つの支流が合流しミズーリ川になる、その地点に探検隊が近づいていると思っていた；彼女の部族はその近くにいるはずだった。隊員たちは彼女が間違っていないことを期待していた。

だからこそ、この発見のための探検隊は、根気強く歩き続けていたのだ。セント・ルイスからもってきたもので、いま、彼らの手元に残っているものはほとんどなかった。丸木舟は、旅の途中で作られたものだった。軍の解説した衣装の作り方は、皮をやわらかくするなめし方を教えてくれた。斧の柄は壊れたか、あるいは、その近くにある木を使って修理をし、それが、また壊れ、壊れるとまた、修理するという具合であった。体を支えている足に履く“靴”は破れて、とうに脱ぎ捨てていた；急場しのぎの代用品は、予備の魚刺しのモリから作られた。幸運にも、盾は、鍛冶屋と鉄砲職人の臨時の補完燃料になった；かれは、ややこしい部品の修理をしたり、自分達が持っているものから、隊員たちが必要とするものをうまく作っていた。

器具以外のものが傷跡として残っていた！ プライオール軍曹は、バッファローのわき腹を上げていて、肩を脱臼した。そして、その痛みがなおも残っていた。ヨークとシャボノオは、歯痛があった；それは、多分、アルカリ性の飲み水のせいであった。もっとも、隊員たちは、みんなそれをいままで飲んでいたのである。誰もが、足は、とがった石とウチワサボテンのために完全に痛くてめっちゃくちゃな状態だった。一彼らは、それでも前進をしなければならなかった。ショシヨネ族と彼等の馬は一体どこにいたのだろうか？





1805 年 7 月 27 日 土曜日

・・・・ミズーリ川の南東から流れている川の合流地点で、・・・・その場所は、突然、広々とした、とても素晴らしい大平原と、どちらを見ても遠くに、高い山々に囲まれているような湿原が開けていた；この場所こそ、ミズーリ川の三つの川の合流点だと想像して、私は、隊を休止させた・・・・

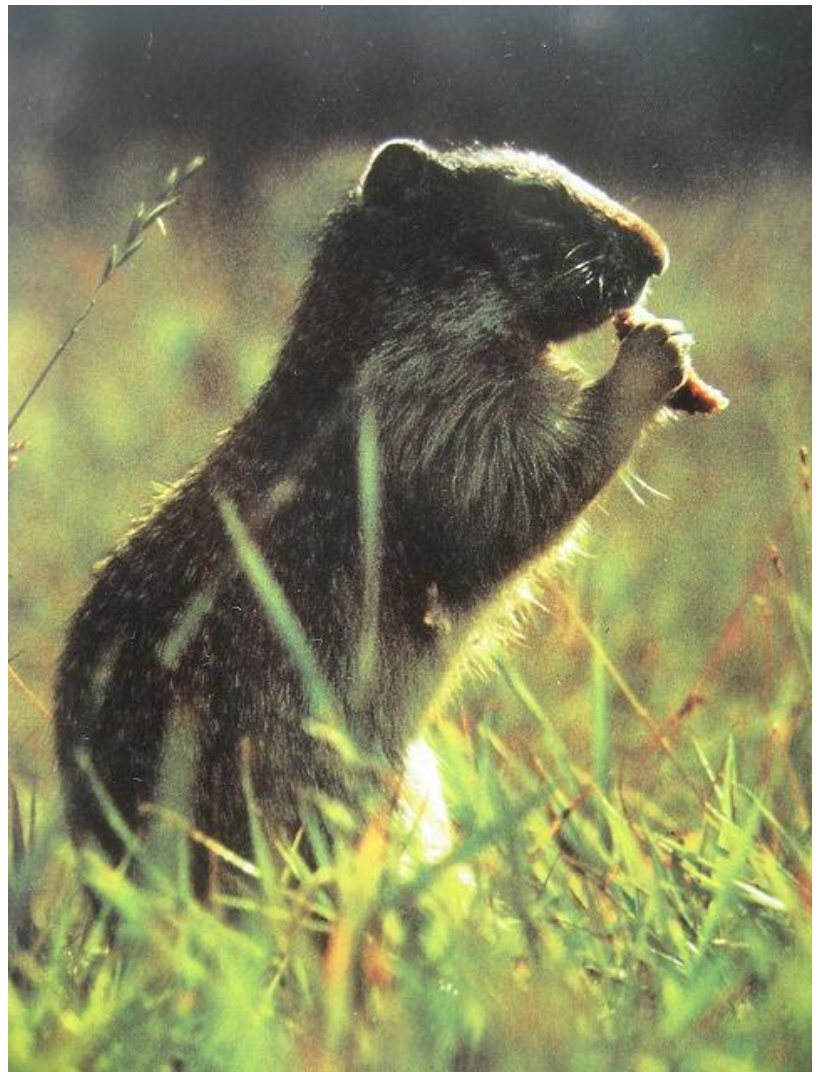
メリウェザー・ルイス



クラークのほうが先にミズーリ川の三つの川が合流する地点に到着していた。（彼等は、その支流にジェファーソン、マディソン、そして、ガラチンの名前をつけた。） 枯れ葉、ルイスにメモを残し、さらに、ショショネを探しに出かけた。7 月 26 日になり、彼は、サボテンのとげによる鋭い痛みとまめができて足がずきずきしていたが、12 マイルほど離れた小高い丘の上に上った。そこで、辺りをみまわし、そして、戻ってきた。とても暑く、そして、疲れがたまっていた。湧き水の出ているところで、食事をし、水を飲んだ。そして、マディソン川を数参るほど、探検した。そして、その川を分かった。（その途中では、泳げないシャボノオが川に流されたので、これを救助するために川に飛び込んだのだ。） インディ

アンズの痕跡を探しながら、4 マイルほど歩いたが、何も発見することはできなかった。しかし、その道すがら、彼等を襲ってきたグリズリーを二匹ほど殺した。彼は、その晩、大変な発熱がして、頭痛がひどかった。そこで、次の日は、彼は工程を 8 マイルほどに制限した —そして、ルイスと落ち合うために 20 マイルほど戻ってきた。彼らは、この“大陸のこの西部における地理学上、基準となる地点”の経度を測定するために、しばらくここに留まろうと決断した。ルイス隊長がこう書いている。インディアンを見つけるために、“自分でこの辺りを少しぶらぶら歩きまわるつもりだ。”と。誌う、ぶらぶらとだ！

ここで、これらの注目すべき男達を見てみよう；疲れ切ったクラーク、彼は、バッファローの毛皮のうえに大の字になって寝ていた。そして、理解力の鋭いルイスは、この日、注意深く、新種の黒いグズベリーについて、彼の日誌に書き込んでいた。そして、とりわけ注目すべきは、三人の男のことである；ジョージ・ドゥリュエイヤーは、狩猟の達人；ジョン・コトラーは、最初は未熟者であったが、いまや、彼は、成熟したヒッコリーのようなそんざいだ；そして、ジョン・ポット、かれは、隊員たちが彼の名にちなんでつけた、わずか 2・3 マイル遡ったところの小さな川のことを



非常に喜んでいた。“際立った男達”と、後に、歴史家の **Bernard De Vote** がその三人にことをこう呼んだ；その後の 5 年の間に、二人の男は、この合流地点の直ぐ近くで死ぬことになり、そして、もう一人は、伝説になった。

その 5 年間に、コトラーは、何度も何度も山に惹かれてもどっていった。かれは、今日、イエロー・ストーンとして知られている不思議な場所を畏敬の念に駆られながらさまよい歩いていた。その後、彼の旧い探検隊の友達、ポットの仲間になった。ブラックフィートが彼等を捉えたのは、この場所 ―この三つの川の合流点の近く― であった。インディアンは、ポットを殺害したが、若い勇敢なコトラーには敬意を表して、彼を裸にして、追跡するゲームの先頭を切らせた。コトラーは、一人を除いて全員に勝った。そして、その一人を殺し、彼を助けた、マディソンという川に飛び込み、流木の下に隠れた。夜になり、かれは、隠れては歩き、歩いては隠れた、―そのとき彼は、恐怖におののき、ひとりぼっちで、そして、裸だった。八日目に、彼は、ビッグホーンに新しく作られたマニエル・リサのとりでに、よろめきながらたどり着いた。そこで、彼は、食べるものと安堵の気持ちを見出したのだ。そこは、アメリカ人のヒーロー達のいる場所でもある。これは、1809 年の出来事であった。

ドリュウエアーは、彼が次の年にその砦に行ったときにこの話を聞いた。そのとき、彼は、リサのためにわなを仕掛けて猟をしていた。リサは、ビーバーの毛皮の取引で富を生み出すために彼が必要な砦を作る場所を見つけるようにと、その三つの川が合流する地点、ここは、ルイスとクラークが最初に報告したところであるが、そこに彼を送り出した。

ドリュウエアーは思い出しながら、馬でその辺りに入っていった。2・3 週間後に、ブラックフィートが偶然、狩をしていた彼を捕まえた。彼は、野人のように抵抗したが、結局、インディアンたちは彼を殺し、そして、その頭皮を剥いだ。

しかし、いまは、1805 年なのだ。そして、隊員たちには、これから何が起こるのかは皆目、検討がつかない。彼らは、ここ、ミズーリ川の三つの川の合流点にキャンプを張る仕事についていた。

1805 年 8 月 8 日 木曜日

インディアンの女〔サカガウェア〕が、われわれの右手のほうにある小高い平らな場所を指差して言うには、そこが、西の方に連なっている山々の向こうの川の、彼女の部族が夏に狩をする場所から、そう、遠くはないとのことである。彼女は、この丘のことを、彼女の部族は、その形が丁度その動物の頭の格好に似ているところから、ビーバーの頭と呼んでいると知っている……私は、明日、……そのインディアンたちを見つけるまで探し回ろうと決心した。

メリウエザー・ルイス



ショショネ族を見つけ出すことが、絶望的になってきた。いまや、ありとあらゆる手段を講じて、かれらはすぐにもインディアンたちと出会わなければならなかった。しかし、いまだ、なんらその兆しがなかったのだ。事実、この兵士達は、マンダンの砦を出て以来、これまで、全く他の人たちに会うことがなかった。すでに、彼らがショショネ族の領域にいることはまちがいがなかった！彼らが、ミズーリ川の三つの川が合流する地点に近づいたときに、サカガウェアが、その場所を思い出し、そして、彼等が、合流点は、もうそんなに遠くないと話した。そして、その合流点に到達すると、探検隊は、マニタリ族の戦士達がサカガウェアの部族を襲い、そして、何人かを殺したときに、彼女が部族と一緒にキャンプ

をしていた津局、その実際の場所にキャンプを張った。サカガウエアは、そのとき、逃げ回ったが、結局、ジェファーソン川を 4 マイル遡ったところで捕まえられた。彼女は、探検隊がその場所に来たときにも、そこを思い出していた。

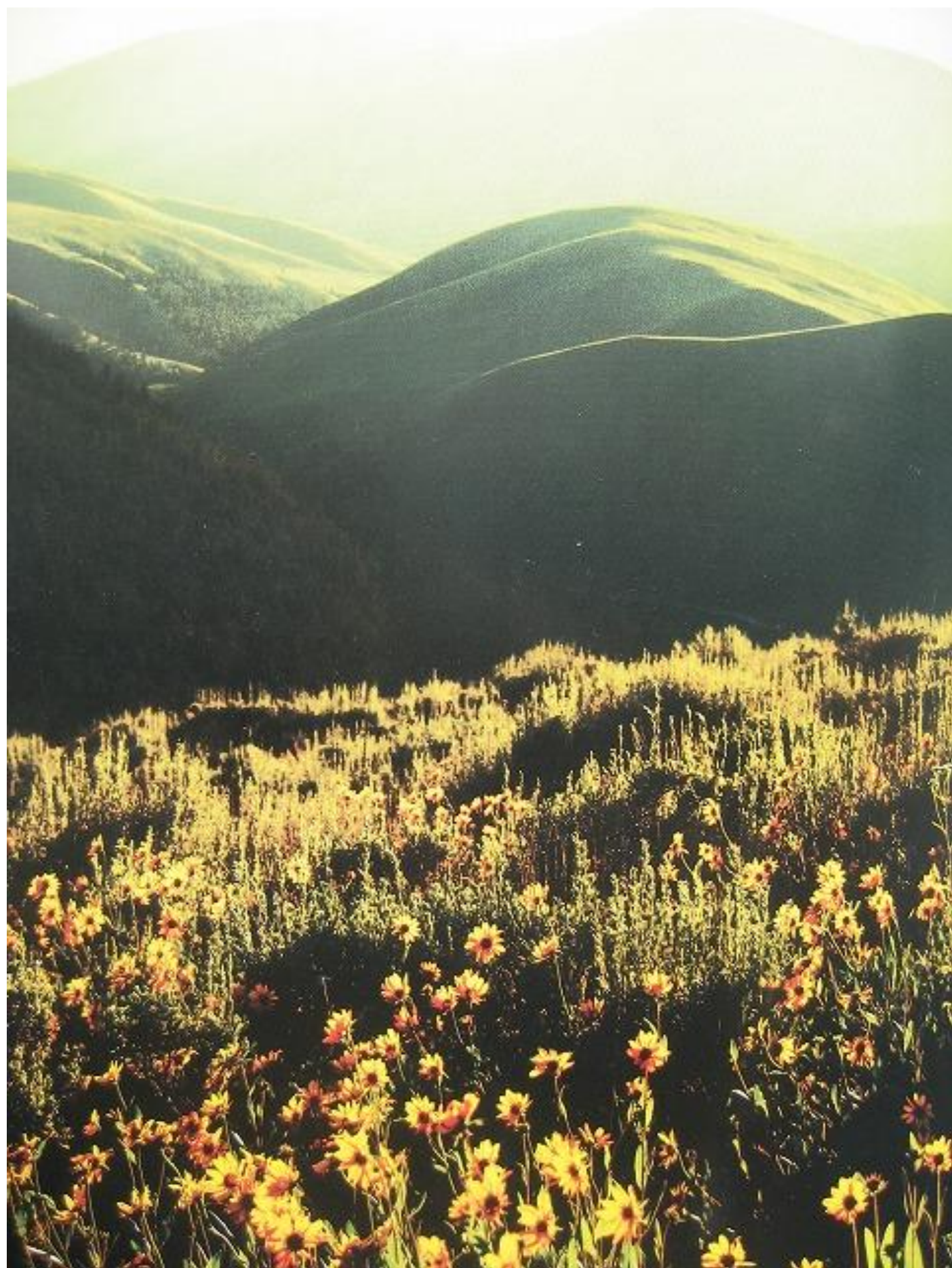
サカガウエアの性格は、日誌からすると、つなぎ合わせの面白いクイズのようなものである。記録が証拠立てているようなものより、ずっとはるかにある、かすかに光り輝くロマンチックな伝説が彼女の周りに育っていった。それは、彼女のまわりの男達の心を感動させながら、クラークとの恋心のなかにいる彼女自身も含めて、そして、複雑に絡み合う山々の峰のなかで探検隊を的確に案内していく彼女に対する信頼が、彼女を美しいものにつくりあげていったのものなのだ。

なんとばかなことだ。極めて重要な幾つかの地点で — それは、マリアス川や三つの川の合流点 — キャプテンたちは、彼らが、冬にマンダン砦にいる間に集めた情報と、彼等独自の地理学的な感覚に基づいて、サカガウエアに相談することなく決断をしていた。彼女の美しさについて、日誌のなかには、彼女の見た目のことはなんら触れられていない。そして、探検隊が、彼女が捕らえられた場所に来たときに、ルイスは、こう書いていた：“・・・私は、彼女がその出来事を思い出して悲しみの感情を、あるいは、彼女の部族の故郷に再び自分がいるという喜びの気持ちをあらわにするのを見出だすことができない；もし、彼女が、食べるものが十分にあり、少しだけ身につける飾りがあるなら、彼女は、それでどこにいても完全に満足しているものと信じている。”と。そして、その山々のなかで探検隊を案内している間に、彼女の歳がわかってきた：今、大体、17 歳で、彼女は、この場所からミニタリス族によって連れ去られて、その後、物々交換か、あるいは、ギャンブルの支払いでシャボノオの手にわたってから、まだ、12 年ほどしか経っていなかった。その伝説は、まさに神話そのものである。

しかし、もう一度確認しよう：彼女は、明らかに、探検隊の一員として受け入れられていた、否、尊敬されさえしていたのだ。この探検隊が、わずか 10 代の女と、彼女の幼い赤ん坊がいることに不都合を感じたことがあるなどということはどこにも見当たらない。こういう思いがなかったということ事態、非常に重要なことなのである。振り返ると、ミズーリ川が幅広い急流で、丸木舟を沈没し、水夫達を飲み込み恐怖に陥れたとき、彼女は、ひっくり返った機器が流されていくのをさっと回収するなど、何時も、冷静さを保ち、機転をきかしていた。水が溢れんばかりに落ち込んでいる滝のところで、そこから逃れるために彼女の赤ん坊とともに、もがいていたときも、彼女が動転していたなどという言葉はどこにも出てこない。サカガウエアは、伝説が彼女を作り上げたものではないけれども、にもかかわらず、彼女は特筆に値する少女であった。

そして、今、彼女は岩の形を見極め、隊員たちが別の角度からそれを見るときには、彼女の部族が夏に滞在するところに出るといった。ルイスはさらに前進する強行軍に三人の隊員を連れてゆこうと決断した。





1805 年 8 月 12 日 月曜日

その道は、われわれを、巨大なミズーリ川の水のもっとも遠い泉へと導いてくれた。われわれは、そこを探すために、なんと沢山の苦難の日々と、手首の効かない夜をすごしたことか・・・2 マイルしたのところで、マクニールが誇らしげに、この小さな小川の両側に一足で立っていた。そして、神に、自分が、あの巨大で、これまで終点がないと考えていたミズーリ川を跨いでいることを感謝していた・・・私は、その反対側よりもずっと険しい山道を、3/4 マイルほど下ったところにいた。そこは、冷たい、透き通った水が流れる堂々と切り立つたクリークであった。ここで、私は、初めて偉大なるコロンビア川の水を味わった。

メリウェザー・ルイス



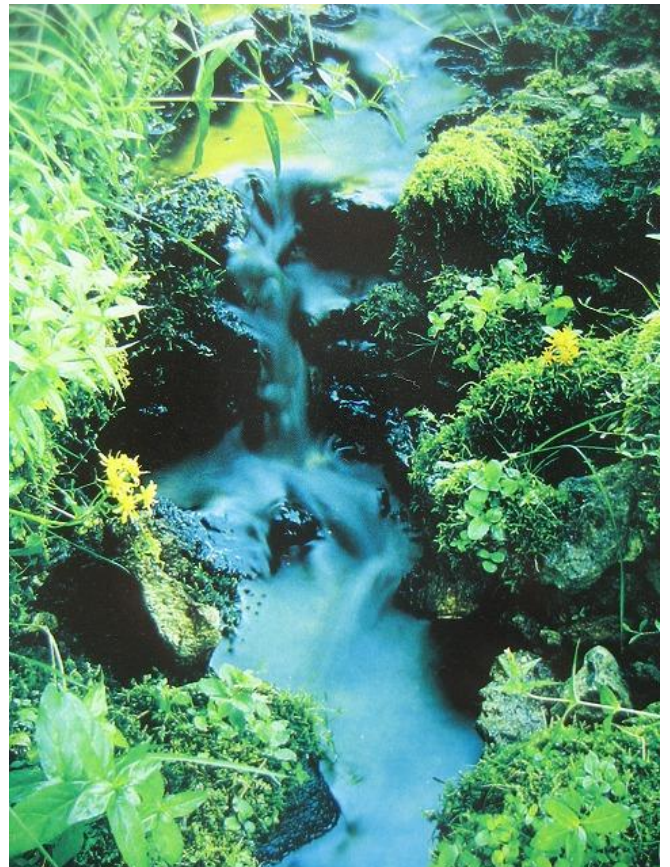
彼等は、三つの川の合流点を後にし、ロッキー山脈の向かって真っ直ぐ伸びているジェファーソン川の低木の密生した急流に向かった。今や、それは、絶えず引き綱を使うことだった。数時間も水のなかを歩いていると足がだるくなり、そして、岩が彼等の足をこすった。探検隊は、まさに、疲労困憊と苦難の切り立った縁にいたのだ。

8 月の 6 日は、特別の日になった。ルイスは、三人の隊員と一緒に前を進んでいた。そして、この日、二つのパーティは、連絡ができなくなった。ビーバーが、ルイスがクラークのために伝言を残しておいた若い柳の木の枝を食いきり、どこかに持って行ってしまったのだ。ドリュエイヤーが、狩に出かけて、クラークを見つけた。

そして、二つのグループは再び連絡をしあうことができるようになった。丸太舟が急流で転覆した；ホワイトハウスは、投げ出され、ボートが彼の上にひっくり返った。（不恰好な状態で数日過ごしたあと回復をしたが、ルイスは、水がもう 2 インチ少なければ、ホワイトハウスは助からなかったろうと明言していた。） そのあと、同じ日に、別の丸太舟 2 隻もひっくり返った。荷物の一部がなくなったり、直せないような状態になり、とにかく、何でもかんでも水に濡れてしまった。夜になり、隊員が木の枝にかけておいた三匹の鹿の皮が豹に持っていかれた。狩猟担当のシャノンが狩にでて戻って来なかった。（彼は、原野を生き抜いて、その後、数日で戻ってきた — 経験のなせる業だ； 一年前、彼がやはり行方不明になったとき、この豊富なもののある真っ只中で、ほとんど飢餓状態になった。） クラークの膝は、灼熱とサボテンのトゲのために、相変わらず痛みがひどく、そして、苦痛を訴えていた。日誌にはこう書いてある“急流と岩で、沢山の困難と疲れを伴いながら前進している。” そして、終わりに天候に関する記録が記述されている

：“この日の夕方には、雨を伴った北西のものすごい風が吹いていた。”

一体、ショショネ族はどこにいるのだ！クラークが見つけた幾つ



かの足跡は、多分、インディアンたちは、すでに兵士達の姿を見ているか、あるいは、探検隊の鉄砲の音を聞いて、かれらから逃げていることを暗示していた。ショショネ族は、兵士達をブラックフィート族だと思っていたのだろうか？ キャプテンたちは、自分達は白人で、ブラックフィートではないということを知らせようと、隊員たちに小さな紙片と布を残しておくように指示した。（これは、皮肉であった。ショショネ族は、それまで白人を見たことがなかったのだ！）

サカガウェアの部族が峠の向こう側にいるという彼女の信念に全幅の信頼をおいて、ルイス隊長と三人の隊員がさらに、探索を続けた。

事実、それは、遠くではなかった。ジェファーソン川は次第に細くなり、小さな小川になっていた。そして、“今まで、終点のなかった”ミズーリ川を踏破する瞬間が来たのだ。こうして、レミヒ峠を越え、彼らは、そこに泉を見つけた—その流れは、西に向かっているのだ！それは、その水がやがては川に注ぎ込み、そして、多分、もう1つか二つの流れとなり、それが、コロンビア川となり、太平洋に注ぐということを意味していた。初めて、白人達が、大分水嶺を越えたのだ！

1805 年 8 月 13 日 火曜日

・・・われわれは、素晴らしい馬にまたがっているおよそ 60 人ほどのインディアンの戦士の団に出会った。彼等は、猛スピードでわれわれのほうに向かってきたのだ・・酋長と二人のおとこが本体より少し前にでて、仕草で女達に話しかけた。そして、彼等は、われわれが誰なのか、そして、彼女達にあげたプレゼントを誇らしげに示した。この男達は、それから前に進んできて、そして、私を心より愛情をこめて抱いた・・・いま、お互いのグループが前に歩み寄り、そして、われわれはみんな、その彼等のやり方で、心底疲れるまで抱きつかれ、そして、彼等の油と顔料のまじった塗料で、塗り捲られた。私は、火のついたパイプを手にし、そして、かれらに、煙を吹いてあげた・・・

メリウェザー・ルイス

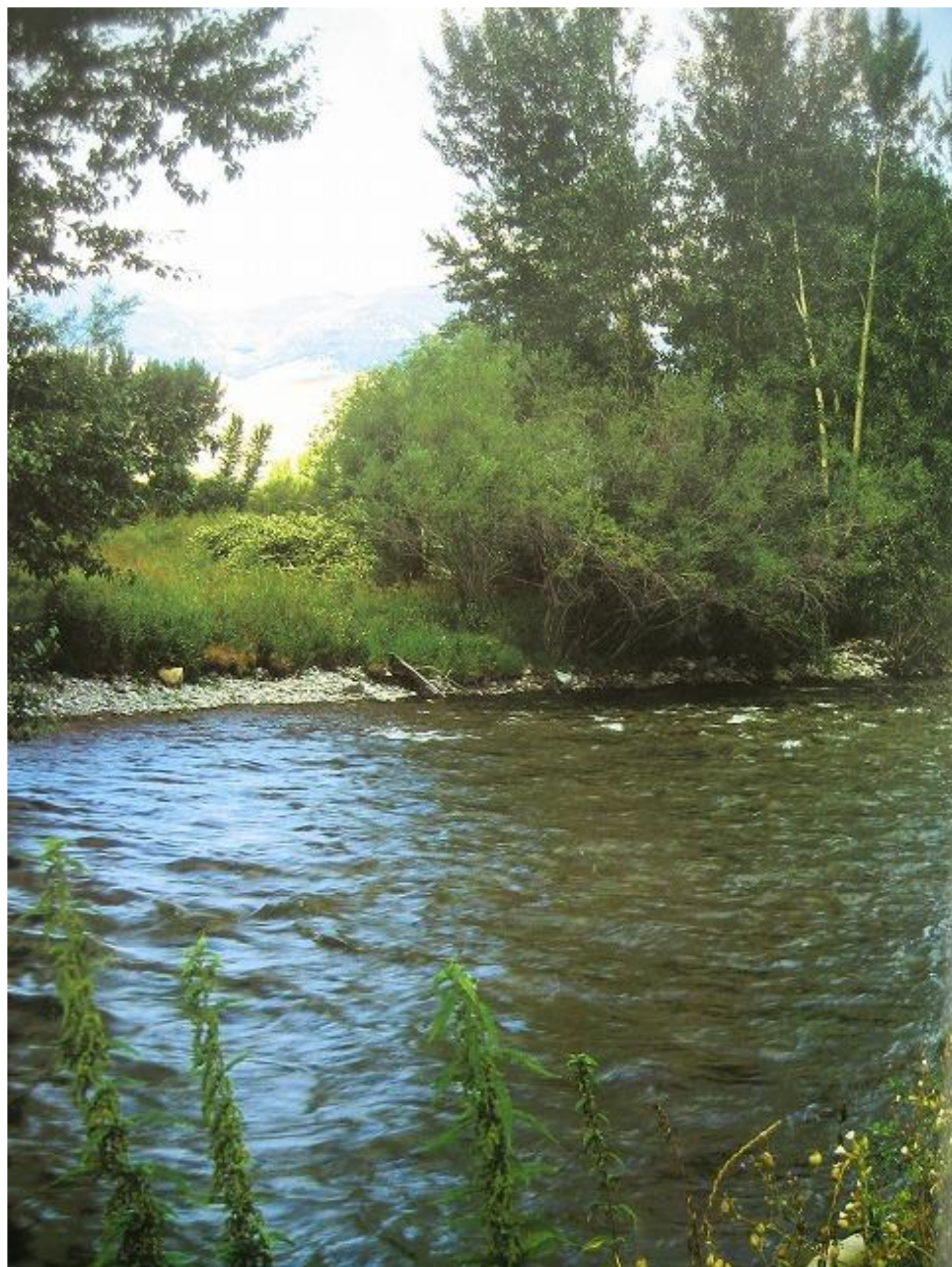
まだ、大分水嶺を越えているところであったが、ルイス隊長と彼の三人の共は、一人だけにいるインディアンを見た。不運にも、ルイスは、彼の共に、両方に少し離れて配置につくように指示した。（彼等は、足跡を見失い、そして、それを探していたところだった）そして、インディアンは、彼等が自分を取り囲もうとしているのだと思ったに違いない。彼は、どこかに逃げてしまった。

次の日、かれらはその分水嶺の西側を下っていった。（それは、驚くべきことだった。そして、そんなことが次々に起こった：このことと同じように非常に重大な日々というのは、ルイスが、新しい品種の灌木や草花の植物学上の記述に時間を費やしていることである。）ある、朝方、大分経ってから、彼等

は一人の男と、二人のおんなど、何匹かの犬を見た。人間達は逃げ出したが、ルイスは、犬達に贈り物を上げようと捕まえようとした。しかし、結局、犬にも逃げられた。

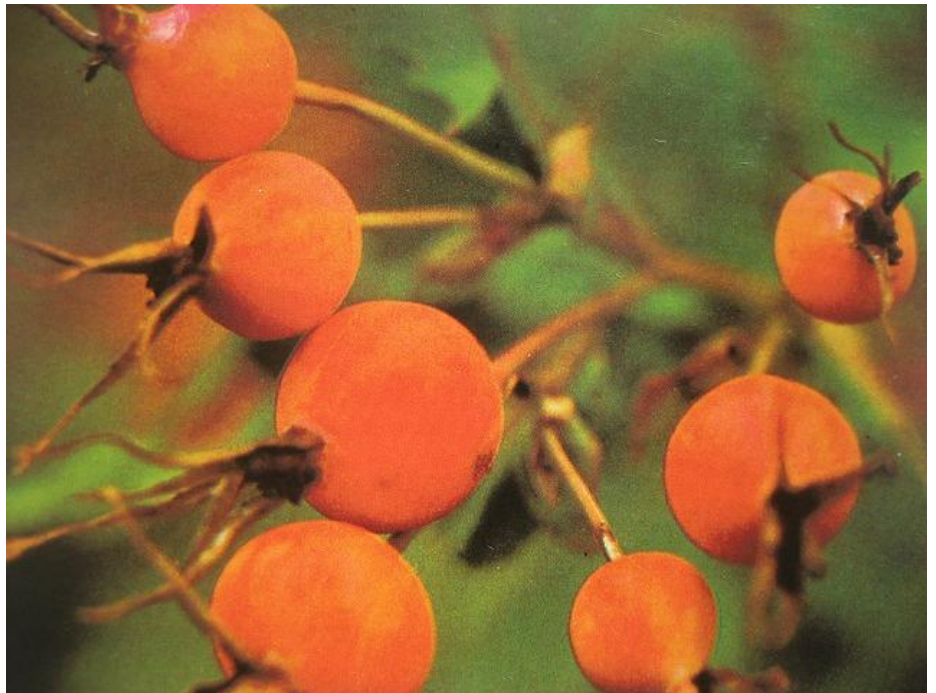
彼らは、三人の逃げた足跡を追跡した。一マイルも行かないところで、角を曲がると、突然、二人のインディアンの少女と老婆に出くわした。少女のうちの一人は逃げたが、他のものは、逃げるチャンスをうかがいながら、座っている。そして、捕虜になる運命を覚悟して頭を下げていた。ルイスは、彼と彼の共の追跡に疲れた男達はインディアンとほとんど見分けがつかないと気付い





たので、彼は、彼が白い肌をしているということを見せるために腕を捲し上げた。 おっ、なんと素晴らしいことだ！そして、彼はかれらにプレゼントをあげた：“ 沢山のビーズとわずかのモカシンを作る千枚通し、ガラスのように見える錫の合金でできた小物、そして、少量の顔料” それは、実は無駄だった。しかし、控えめにしている時ではなかった。ドリュエーイヤーは身振りの会話に長けていた。そして、彼は、その年とったおんなに、逃げた少女をよびもどすように頼んだ：ルイスは、彼女が村に行つて警告することを恐れていた。だが、彼女はもどつてきて、プレゼントを受け取った。そのあと、ルイスは、バーミリオンの塗料で少女達の頬を化粧した。と言うのは、サカガウェアが彼に、これがショジョネ族の間では友好の証であると教えていたからだ。この出会いのあと、女達は冷静になった 一出会いは、叙事詩的な出来事として部族の歴史のなかに生きていくものであった 一 探検隊の隊員は、彼等をインディアンのカンパ地につれていくように頼んだ。

かれらが、とどろくひずめの音を聞いたのは、およそ2マイルほど行ったときだった。60人ほどの戦士がフルスピードで彼らのほうに向かってやってきた。（彼等がみたその日の朝最初に見たインディアンが村に帰つて警告をしたのだった。）ルイス隊長は、鉄砲を横に置き、そして、旗を持って前に進んだ。しかし、酋長は。そんなことより、女達が無事でいることを不思議に思った。ルイスの気前のよさが、この女達が酋長に、このよそ者達は、これまでには前例のないような人たちだよと話したときに、成果となつて表れた 一 白い肌をした、そして、とても好意的でもあるさ！ 両方の集団から完成が上がり、お互いに相手を受け入れると、それまでの緊張は、いっぺんに浮かれ気分になった。酋長の名前は、カメウエイアーでであった；後に、兵士達は、かれが、以前にかれらが会つたその人であったということがどれほど幸運なことだったかと言うことに気がついた。

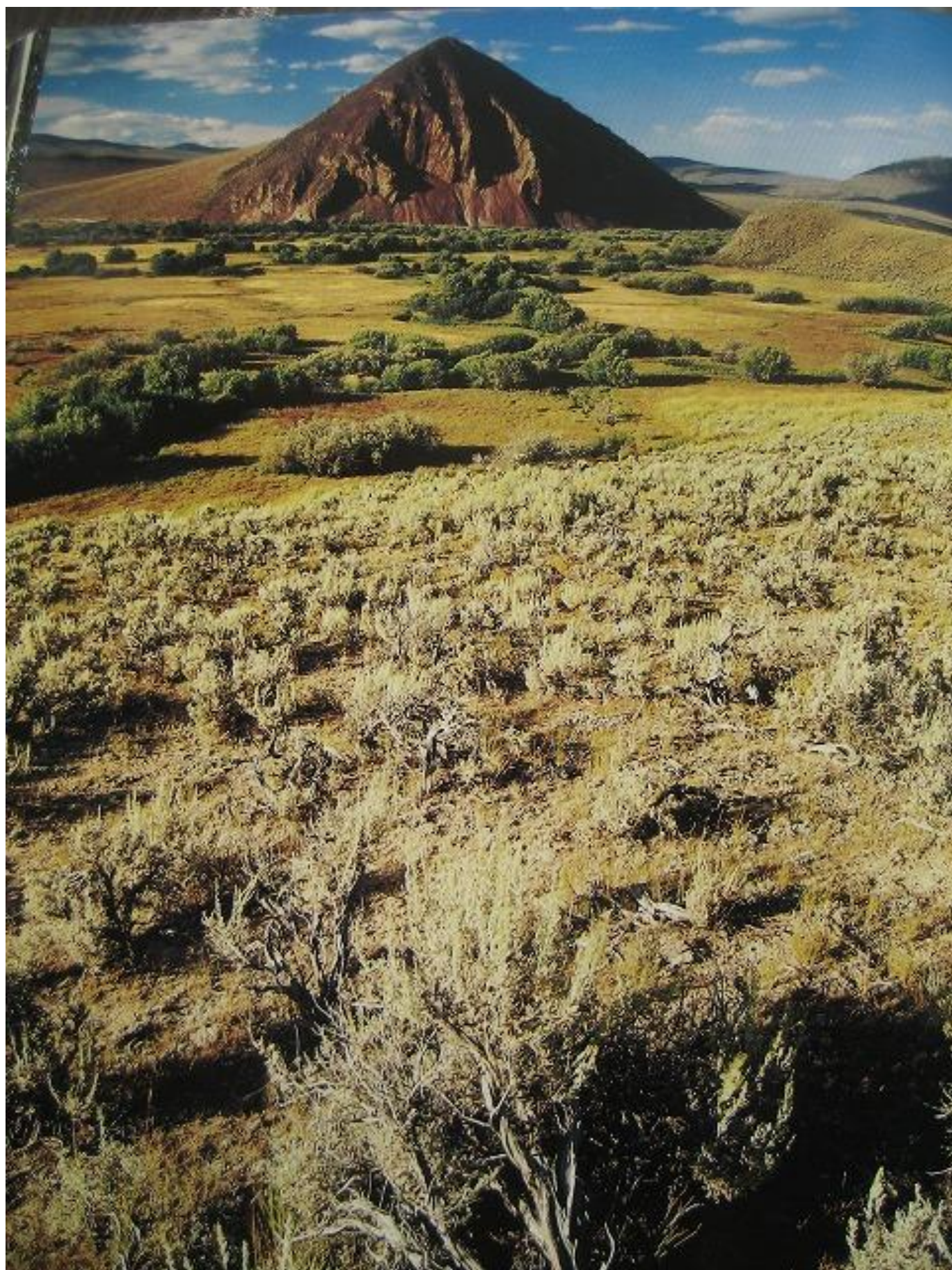


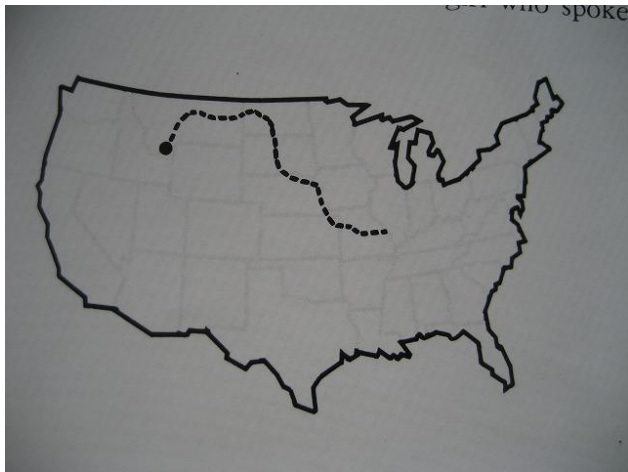
1805 年 8 月 17 日 土曜日

・・・・クラーク隊長が、通訳のシャボノオと到着した。そして、一緒にきたインディアンの女〔サカガウェア〕が、なんと、酋長のカメウエイの妹だということが分かった。この部族の者達との会合は、実に、感激的なものであった・・・・われわれは、十分に満足した・・・・ここで、われわれが陸路で、これからの旅を続けていくことを可能にしてくれるだけの沢山の馬を簡単に手に入れることができるという、喜ばしい見通しがついたので、水路で行くべきだなどと言うことは、あまり進められたものではないと考えている・・・・自分達自身に気付いた。

メリウエザー・ルイス

ルイス隊長に率いられた小さなグループの先発隊は、カメウエイの一团と二日間、一緒に過ごした。これらのインディアンたちは、生き残っていくのが容易と言うわけではなかった。丁度、ルイスとクラークが通つてきた領域にブラックフィートが襲ってくるその恐怖のために、かれらは、ずっと高い高原で生活しなければならなかったのだ。そして、そこには、バッファローも来ることはないし、また、おいしい食べ物もなかったのだ。最初の日、ルイスは、20人ほどのインディアンが、10匹のアンテロー





ブを、二時間も追い掛け回して、結局、何も仕留めることができなかったのを見た：これが実証例だ：極めて原始的な武器では、ほんのわずかの食料を手に入れるだけでも凄い苦労を必要とした。兵士たちは、彼らの持っている鉄砲に改めて誇りを感じなければならなかった。

ある日の食卓で、ルイスは鮭の一切れを振舞われた。これをみて、彼は、個々の水が太平洋に繋がっていると確信した。そして、ここに別の勇気付けられる出来事があった。実になんと大きな安堵か 一馬の大群がいたのだ。ありとあらゆる大きさの、そして、あらゆる品種の、ざっと数えても 700 頭もの馬がいた。18 世紀の人たちには、馬は、20 世の人々が車になじみであるのと同じように、なじみのものであっ

た。そして、これらの長いたびの途中の兵士達には、それは、まさに、給料日のように思われたに違いない。馬に囲まれているということは、素晴らしいことであつた。ルイスはおもった；そのいななきとにおいては、心地よく安眠をもたらしてくれる。

ルイスは、直ぐに、カメウワイトに、まだ、なお、山の向こうで悪戦苦闘しながら上ってくるクラークと、ほかの隊員たちに、一緒にいに行くように頼んだ。突然の変化に、インディアンたちは疑いをもった。プレゼントをもったこの男は、彼等をブラックフィートの待ち伏せしているところに連れていこうとしているのではないか？ ルイスは、堂々としていた。彼は、尊敬の態度を示しながら、時に要望をだし、時に皮肉を言いながら、それらを完璧までに友好的に織り交ぜて話をした。彼は、インディアンたちが、びっくりするほどのプレゼントを受け取ることを、そして、黒人をみることができると約束した。（このインディアンたちは、これまでインディアンしか見たことがなかった。ルイスが、白人をみた最初のひとであつた。その世界に、黒人などいたのであろうか？）そして、ルイスは、彼らの言葉を話す少女がいることも話した。さらに、彼らは臆病だったのか？ 彼は、彼らを促し、そして、せかした。こうして彼等は動き出した。

しかし、彼は、彼等が峠を越えたところで、もと来た道を戻ろうとしたので、彼等を促し続けなければならなかった。そして、ルイスがクラークのためにメモを残しておいた場所（メモは、乾いた棒のうえにおいてあつた。かれが―ここはビーバーがかじらないと指定したところだ）に戻ってきたとき、もっとも厄介な瞬間がやってきた。確かにメモはそこにあつたのだが、クラークがいなかった；彼は、まだ、ここまで来ていなかったのだ。パニックと同じようなものがインディアンたちの間に起こった。いま、確かに、彼らは、だまされたのだった。しかし、彼等を納得させる最後の努力の結果、インディアン達は、これは待ち伏せではないと考えた。兵士達が彼等のライフルをインディアン達に私、そして、みずから、インディアン衣装をまとったのだ。これは功を奏した；インディアン達は、しばらくの間ここで待つことに同意したのだ。

次の場面はどんな風に話せばよいのだろうか？ 歴史の本のなかに、架空の話は存在するのだろうか？ 神秘の指が歴史の離れ離れになった糸を編んで、それをもとの網にするだろうか？ なんと、クラークと他の隊員が視界に現れたのである。そして、大騒ぎのなかで、ルイスは、通訳をさせるためにサカガウエアを呼んだ。彼女が通訳を始めた；が、彼女は躊躇していた；そして、驚くべき事実が確認された：なんと、カメウワイトは彼女の兄だったのだ！ ここにいる白人達は、彼女を、まさしく彼女が略奪されたもとの部族のもとに送り届



けたのだ。

彼の日誌のなかで、ルイスはこの再会についてあまり多くのことを語っていない。しかし、彼は、この運命的な再会がショジョネ族から馬を得ることに大いに貢献したと認めていたに違いない。

1805 年 8 月 20 日 火曜日

私は、・・・・カメウエイトに、この山を流れている川の通行を支配している鼻に飾りをつけているインディアン〔ネツペレス族〕は、どのルートを通って、山を越えミズーリ川まで来ているのか尋ねた；彼が言うには、それは、北のほうに行くことだといった。しかし、それに加えて得られた情報は、そのルートが極めて状況が悪いということだった・・・・しかしながら、インディアンが峠を超えていたということ、そして、ことしもこの川の側からその山の同じ下流に越えていったということを聞いて、瞬間、私の完全なる敗北だという念が私自身の気持ちの中に湧いてきた。

メリウェザー・ルイス

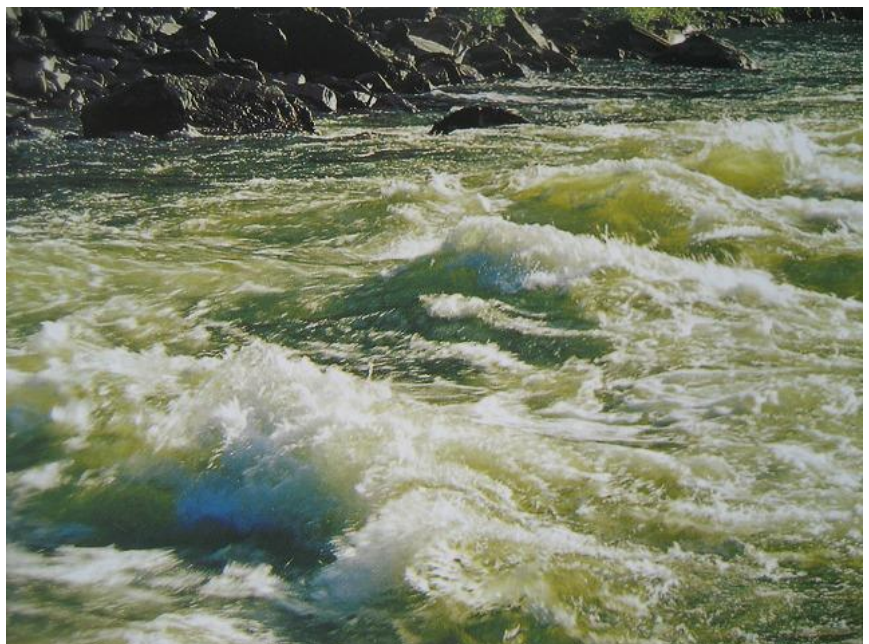


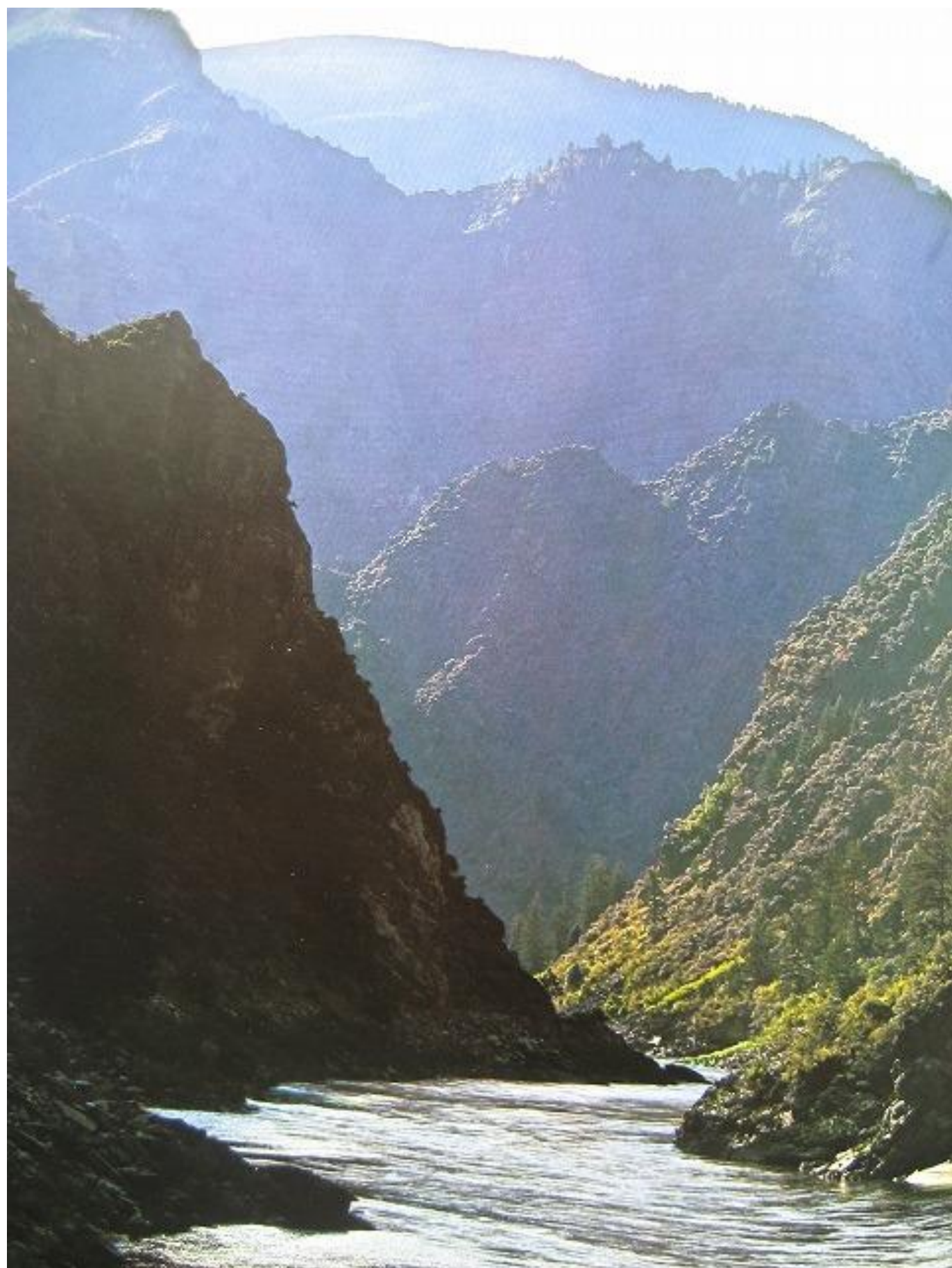
ここが山場だという感覚がショジョネ族との会合にどんどん広がっていった。兄弟と再会したというサカガウエアの劇的な感動があったが、まだ、そのほかにも沢山の出来事があった。この五ヶ月間というもの、探検隊は大草原を横断してきたが、彼等はほとんどを水路を辿ってきた；そして、その間、かれらはまったく他の人に出会うことがなかった。そして、いま、まさにその大平原は終わりに来ていた；丸太舟は、石で苦しめられていたし、もうほとんど使えなくなっていた；探検隊は、インディアン達と一緒にキャンプをした。2・3時間の間、隊員たちは憩いのときを持ち、自分達が成し遂げたことの素晴らしさに酔いしれた。

その感覚は続くことができなかった。彼らは、これまできたよ

うに、その道のりはかなりものすごいものがあったが、しかし、まだ、ロッキー山脈に入ったばかりであった。そして、その時には、そのことを知るよしもなかったが、この場所というのは、その山々を超えようとして選んだ場所としては、最悪のものであったのだ。時期は、すでに8月の終わりであった。そして、高地にはすでに雪があった。彼らは、先を急ぐルートを見出すか、あるいは、それを教えてもらう必要があった。

キャプテンたちは、ここで、再び、隊を分けることを決意した。ルイスは、クラークが11人の隊員を引き連れて、先にゆき、ル





ートを探しまわる間、ショショネ族のところにとどまり、次の前進の準備をすることにした。

クラークのグループは、この大分水嶺を横切っている、レミヒ川に沿って下っていくべきだったのか？ そこには、ボートを浮かべるに十分な推量があったし、やがては太平洋に出ることは間違いなかった。カメウエイトの部族のなかに、トビーという名の一人の老インディアンがいた。彼は、決して川を下ってはならないと言い張った — いままで、誰もそれをしたことがない — 彼は、数年前に、まさしく北の陸路の道を通して山を越えていた。そして、山の向こう側のインディアン達は、(これがネツ ペレス族に関する最初の情報であった) 彼に、川を通るルートは、流れが急で、しかも、滝が

レミヒ川は渡ることができたし、また、直ぐに、サーモン(鮭のいる)川に合流していた。斥候のグループがインディアン達の二つの漁場のキャンプを通り越したが、そのたびに彼等は、魚を手に入れるためにそこに立ち寄った。と言うのも、この高地の問題のひとつは、どこにも、何もなくなるということだった： 探検隊の食料となる獲物が十分見つからないのだ。これは、単なる問題というものではなかった。土手、一それ (それは、山の頂から、真っ直ぐ、川まで一揆に落ち込んでいたのであるが) を、こう呼ぶことができるなら、それは、隊員たちが悪戦苦闘して下っていけば行くほど、だんだん状況が悪くなっていたのだ。結論は、明らかになってきた。しかし、クラークは、なおも、さらに確認するために4人の隊員をつれて、されに20マイルほど前進した。彼は、多分、今日でさえ、“戻ることのできない川”と呼ばれている、山が壁のようにそそり立ち、急流が締め付けている場所に入っていたのだ。そして、結局、納得したのだ。やっぱり、このルートは不可能だ。ここには、丸太舟を作るために十分な大きな木はなかった；急流はとても無理であった；滑る岩肌の斜面は、人間にも、そして、馬にも危険極まりない(クラーク自身、一度スリップし、尻をひどく打った。);そして、獲物は、隊に食料を供給するには、あまりにも少なかった。

このことは、望みを絶たれたとみなすべきではない。それは、単なるルートチェックであり、懸命なる決断をするために必要な補足情報に過ぎなかった。二人の隊長は、彼等が学ぶべきことを、クラークは、彼の偵察から、そして、ルイスは、ショショネ族に対する質問から蓄積したのだ。その結果、彼らは、彼らが聞いた北に向かう陸のルートを探さなければならないと決断した。トビーは、彼等のガイドとして一緒に行くことに同意した。

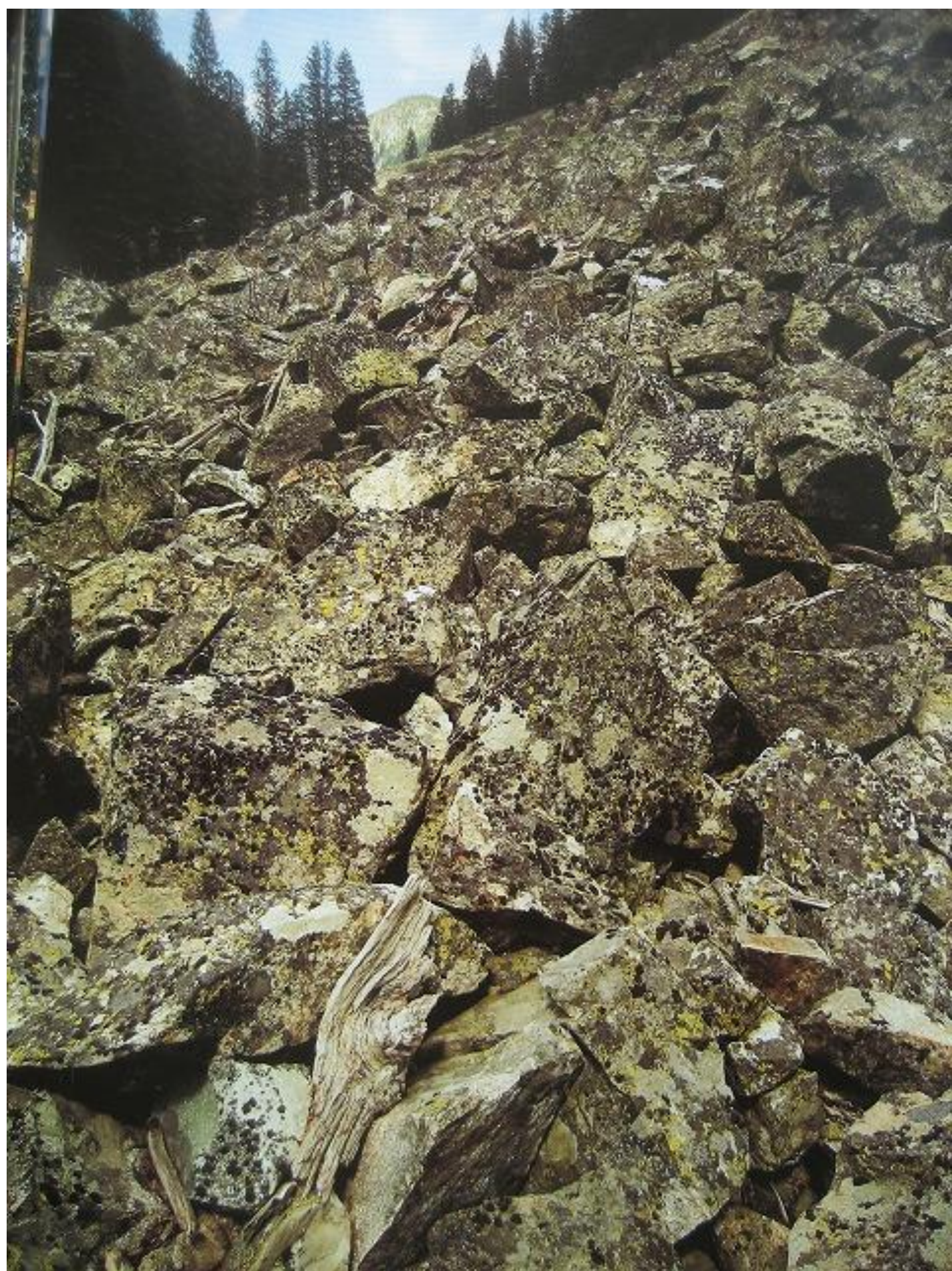
1805 年 9 月 2 日 月曜日

・・・われわれは、・・・藪のなかを進んだ。そこでは道を切り開いてゆかなければならなかった。われわれの馬がちょっとした不注意で滑る途方もない危険を冒して、ロッキーの丘のルートを越えていった。上り下りをしている進んでいたが、数匹の馬がつまずき、その中の何頭かはひっくりかえってしまった。そして、なかには、その丘の斜面を滑り落ちていったものもある。一匹の馬は足が不自由になり、二匹は、あきらめた。

ウィリアム・クラーク



サーモン川を下ってゆこうという試みの代わりに、北にむかい、そして、ビッタールートの領域を横断する陸路を見つけようという決断は、発見のための探検隊が徒歩で、また、できれば、馬に乗って前進するということを意味していた。彼等は、ショショネ族と物々交換で馬を手に入れたが、しかし、それは決して容易なことではなかった。インディアン達は、ちょうどそのとき、いつもの年のようにバッファローたちのいる平原に下っていこうとしていた時だった。冬に必要な肉が、彼等が恐れているブラックフィート立ちの領域を超えて来ているのだ。彼らも馬が必要だったのだろう。キャプテンたちは、もはや少なくなりつつあ



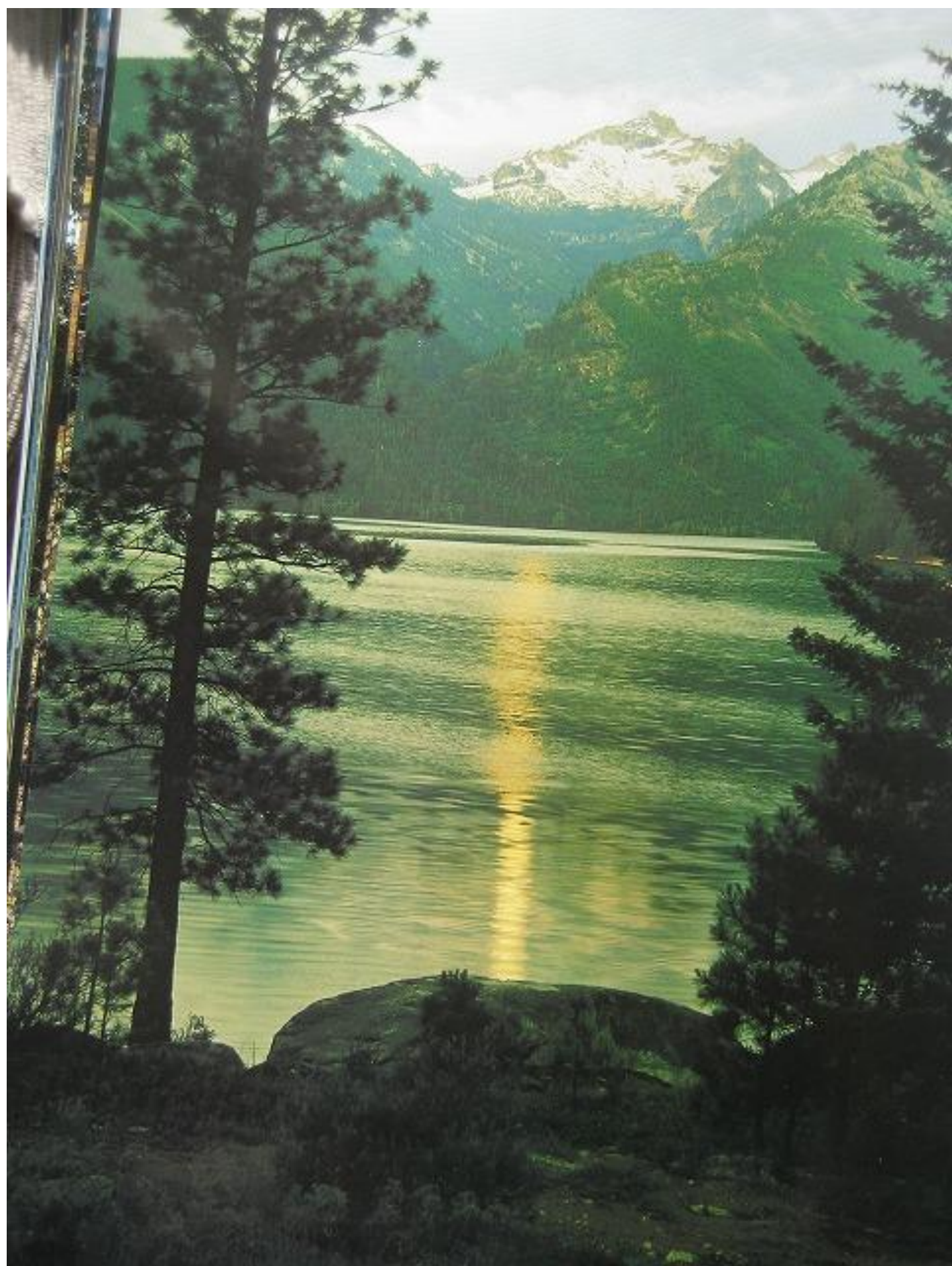
た交換用に提供する品物を、あれこれ探しださなければならなかった。そして、鉄砲までも差し出したのだ；クラークは、100 発の弾丸と一緒にピストルさえ、そして、火薬と、ナイフもだ — これらすべてがたった一匹の馬のために。ナイフは、多分、マンドン砦にいたときに壊れたストーブの残骸から作ったものであったが、しかし、彼はピストルのほうはなかなか手放しがたかった。これほどまでにして提供したにもかかわらず、彼等が手にした馬の数は、29 頭であった。それは必ずしも満足するものではなかった。クラークは、こうして手に入れた動物たちのことをこんな風書いている。なかには、“貧相なもの何匹かいたし、若い馬だった。馬達は、ひどい背中をしているものが沢山いたし。他のものも荷物を背負わせるに慣れていなかった……” 兵士達は歩かなければならなかったであろう；馬達が荷物をはこんだ。隊員たちが、革を使ってうまいこと荷袋を作り、これを馬の背につけ、この袋に箱から道具を移し変えた。

こうして彼等は、左手に切り立ったピッタールート¹の山壁を見ながら北に向かって出発した。彼等は、しばらくサーモン川にそって前進した — 革が左に曲がるころまで行き、そこから、彼等は、クラークがそれ以前に調査し、そして、みんなに報告したあの厳しい溪谷をさけ、山を越えてまっすぐ進んでいった。彼らは、サーモン川を後にし、北を目指しながら、山を登り始めた。

これは、荒れた高い山を乗り越えていく彼等の最初の経験であったはずだ。そして、 — これまでの開拓者であった彼等にとって — そのために備えなければならない、経験と言うものが全くなかったのだ。そこには、若くて、険しいロッキーの山々があった。 — 旧くて、なだらかなアレゲニーの山々ではないのだ。隊員たちは、斜面を、そして、草もはえず、土すらも見当たらない、岩が幾重にもかさなった山を登った。そして、天候が悪くなった。クラークの日記のなかの言葉が、彼等の状況の悪さとあがきを教えてくれている：“……雨だ……夕方、……われわれは、夜通し続けなければならなかった……場所によっては、これまで馬が通ったこともないような最悪の道が沢山ある……雪が2インチも積もっており、雨が止んで曇になった……非常に寒い朝で、すべてのものが凍っている。荷物も、そて、あれもこれもだ。” 状況は、隊員たちにも、馬にも、そして、いろいろな道具にも、極めて厳しいものだった。彼等がもっていた最後の温度計さえも壊れてしまった；このことは、この探検隊の科学的な調査という目的から考えても極めて十台に損失であった。

でも、彼等は頑張った。ピッタールート¹の主要な山々は、未だ、彼等の左手にそびえていた — 彼らは、その東側の端の部分を乗り越えつつあった。そして、いまや、長い、とても素敵な、北に向かう谷に向かって下っているのだ。それは、重大な目標でもある大陸横断の輝かしい幕開けでもあったのだ。





1805 年 9 月 4 日 水曜日

・・・われわれは、ツシェパウ〔フラットヘッド〕の部族の一団とであった。そこには 80 人ほどの住む小屋が 33 もあり、合計で 400 人くらいがいた。そして、馬も少なくとも 500 頭はいた。彼等は、われわれの肩に白い毛布を投げ、平和の象徴のパイプでタバコを吸うなど、われわれをとても友好的に迎えてくれた。・・・私がこの川を下ってきた最初の白人だった。

ウィリアム・クラーク



探検隊がピッタールート谷に進んでいったときに、彼等はツシェパウ族の一団とであった。どういう理由で、このインディアン達を“フラットヘッド族”と呼ぶようになったのかは分からないが、この名前は、定着している。(彼等は、決して平らな頭をしたいたわけではない。)

その部族は非常に大きなものだった。全体で 400 人くらいいたではなかろうか、彼らは、33 の小屋に分かれて住んでいた。彼らの生活の習慣は、スネーク族のそれと良く似ていた。一年のほとんどは、ブラックフィートが平原に襲ってくる、その恐怖を避けて、高い山の中で暮らしていた。そして、冬を越すために食料をためなければなら

ないときには、彼らは、バッファローの狩をするために、ほんの短いあいだ、とても神経を使って、山を降り、旅をしていた。このために、彼らも馬が必要だった。そして、彼らは馬を沢山所有していたのだ。クラークが数えたところでは、少なくとも、500 頭はくだらなかった。そして、直ぐに彼らは、何頭かを手に入れるために交渉を始めた。

そして、交渉は難航したのだ。このインディアン達は、しわがれ声で発音する言語を話していたが、クラークは、それを、ゴロゴロ喉をならす、と呼んでいたが、それまで、探検隊がであったどの言葉とも違っていった。しかし、幸運にも、このフラットヘッドのインディアン達のなかに、ショショネ族の少年がいて、彼は、フラットヘッドのことばとショショネの言葉の両方を話すことができた。そこで、この交渉はこんな具合になされた；クラークがまず、英語で提案をする。それをプライベート・ラビッチがフランス語に訳す。次に、シャボノオがフランス語からミニタリ語に訳した。それを彼の妻のサカガウェアが、フランス語をショショネ語にし、この少年が、それをフラットヘッド語にする！とにかく、こんな具合で交渉は進んだ。そして、探検隊は、13 頭の馬を購入し、さらに、疲れた馬を新しい馬と交換した。その中の三匹はメスの子馬だったために、荷物をいっぱい載せることができなかったが、それが必要なときには、いい食料となったのだ。

訪問はそれほど長いものではなかった。というのも、フラットヘッドはこの時、毎年やっていたバッファローの狩をする



ために、ミズーリ川の三つの川の合流点辺りに早く出かけたかったのだ。そして、発見のための探検隊は、なおも冬の到来と競争をしていた。いまや、荷造り準備が整い、かれらは、谷を目指して上っていった。この旅は、それまで探検隊が経験してきたものと比較するとずっと条件が良かった（そして、それはこれから来るものと比較しても天国みたいなものだった。）ただ、1つ小さな問題があった — まず、探検隊は、彼らの新しい馬がフラットヘッドに戻ろうとするのを防ぐために見張り番の仕事をしなければならなかった — それでも、かれらは、大体、毎日 20 マイルくらい前進した。

（三人のフラットヘッドの男が、20 頭のフラッドヘッドの馬を盗んだ二人のスネーク族をすごい勢いで馬にのり追いかけたときには大混乱が起こった。実際のところ、スネーク族は隣人の部族で；フラットヘッドは、実際そのときに、やはり同じようにブラックフィートを恐れているスネーク族と一緒に、バッファロー狩に行こうとしていたときだった。しかし、馬は馬、榮譽は榮譽だった。この勇敢な若者たちは、ゆでた鹿の肉をむさぼり食い、そして、かれらの獲物を探し回っていたのだ。）

小さなクリークが、左手の手前に、山から流れ出ている。そして、トビーはそれをみて、その場所がどこであるのか理解していた。ここは、探検隊が向きを変えて、ピッタールートに山に登っていかなければならないところだった。時間の余裕はあまりなかった — いまや、雪がいたるところに姿を見せ、それは、山の頂だけという状況ではなくなった — そして、かれらはすぐにそのクリークに入り、のぼりに入った。しかし、この山道は、険しく、凍りつき、そして、荒涼としたものだった — それは、スネーク族から得た情報、そして、フラットヘッドの人たちが警告していたように、極めて厳しいものだった。そこで、探検隊は、この合流点のところで、何日か滞在することにした。そして、かれらは、この場所を、“山越えのための休息” キャンプ地と名づけた。かれらは、馬に草を食べさせ、食料とするための狩をし、そして、休息をとった。探検隊は、まさに、最大の挑戦に立ち向かおうとしていたわけである。

1805 年 9 月 14 日 木曜日

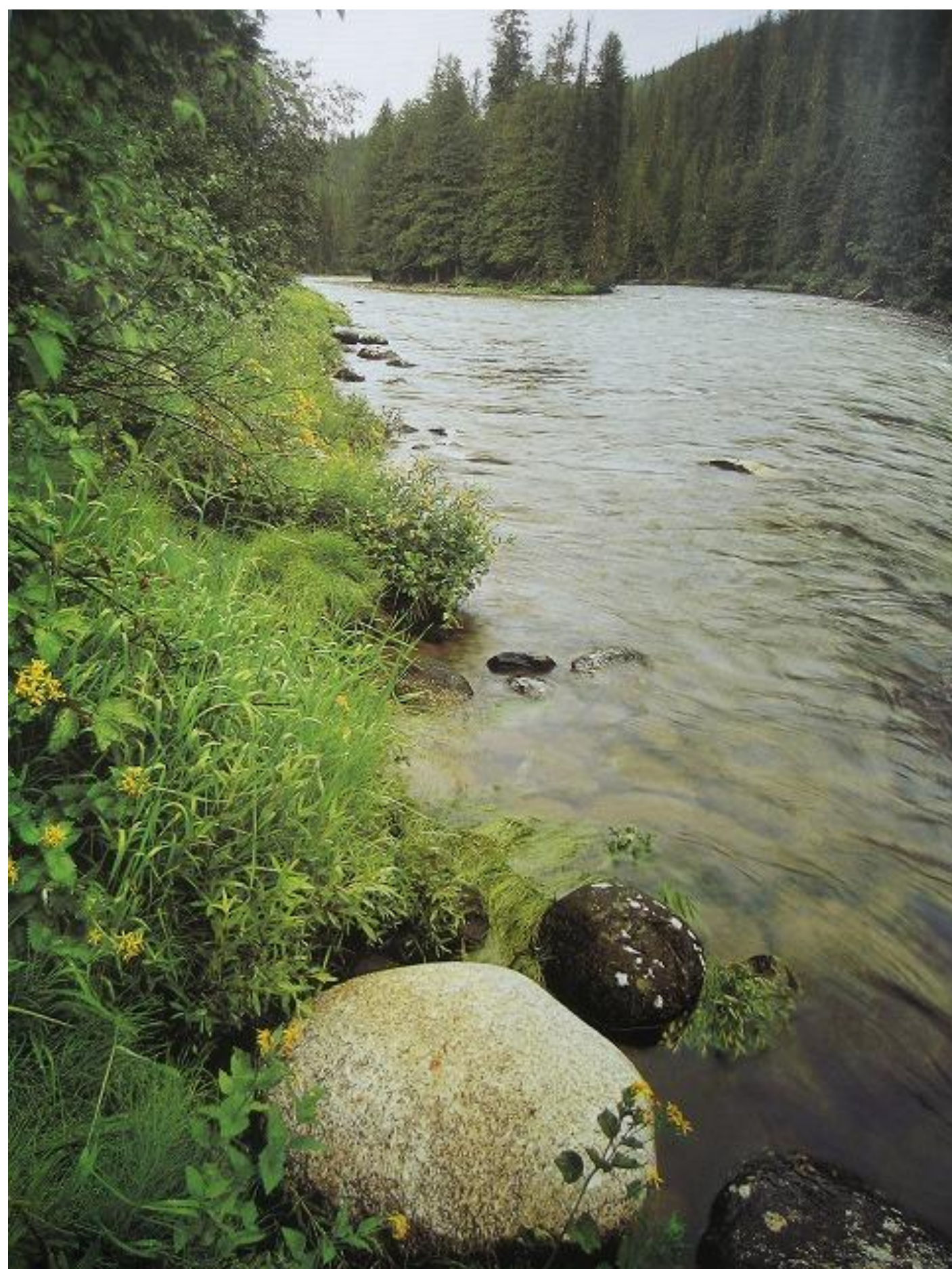
われわれは、・・・その川の右のほうの支流の河口付近にある小さな島の反対側にキャンプを設営した。・・・われわれは、ここで、隊員のために子馬を殺さざるを得なかった。そして、彼等の食欲を満たしたのだ。そういうわけで、この南の支流を子馬殺害のクリークと名づけた。また、この川自体は、フラッドヘッドの川と呼ぶことにした・・・

ウィリアム・クラーク



探検隊は、9 月の 11 日の朝に、この山越えのための休息キャンプ地を出発したかったのだが、夜の間に、二匹の馬が行方不明になってしまった。結果的には、隊員がこの馬を見つけ出したけれども、そのおかげで、彼らは 3 時まで出発することができなかった。出かけるのに決して悪い条件ではなかったが、しかし、すでにあたりには獲物が見当たらなかった；この割合で行くと、この山越えのための休息地で仕留めることができた四頭の鹿では、34 人の隊員たちにそう長くは持たないであろう。ということで、かれらは、この日、7 マイル前進して、キャンプを張った。

9 月 12 日の日は、もっとひどい状況になった。かれらは、山の険しい斜面の状態が非常に悪いことに気付いた — “とても我慢できるなんてものではない” とクラークが言っていた。そして、彼は、そこで何かに気付いていた男なのだ — しかし、かれらは、倒れた木や灌木のごたごたになり、如何にも崩れそうな斜面の代わりに、クリークの川底を進んだ。彼らは、山を越えて行った — 8 マイルほどは、そこには水はなかった。クラークが、



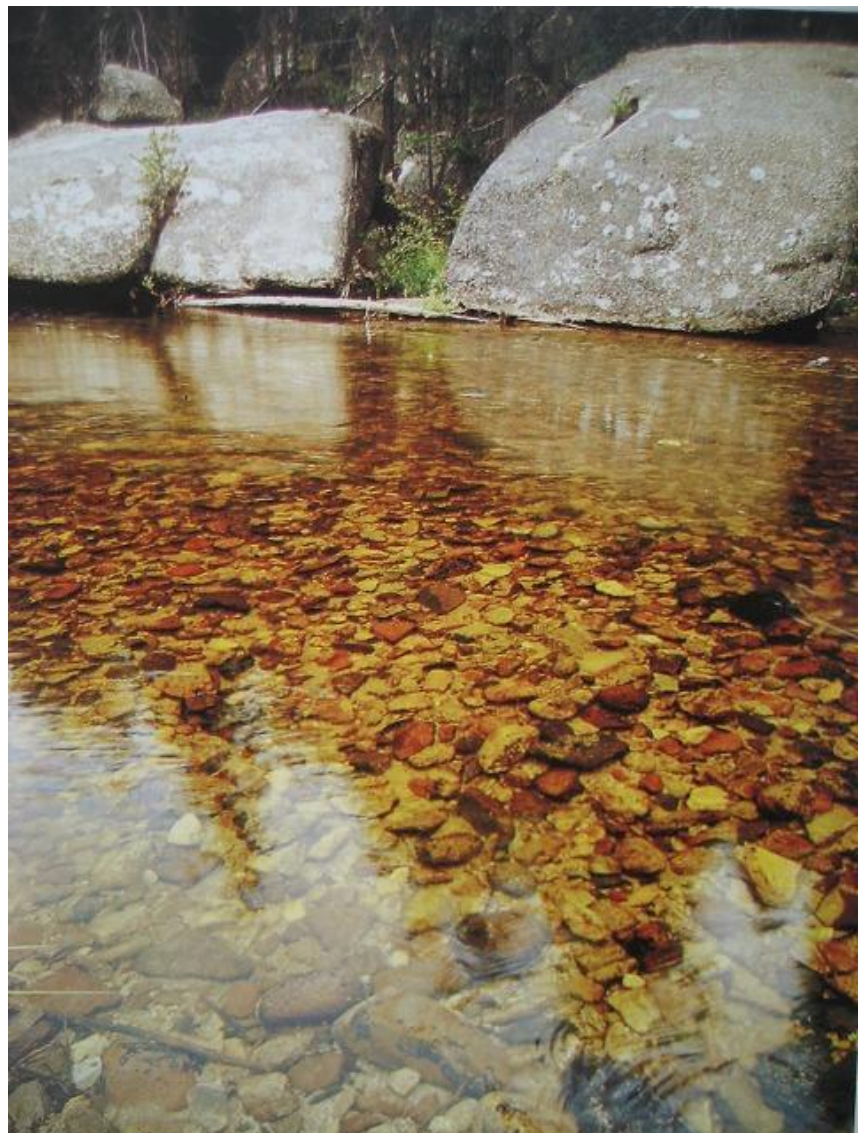
樹皮が剥ぎ取られた松の木を何本か見つけた。そして、サカガウェアが、それは、この道を通っているインディアン達はその樹皮のなかのものを食料とするためにした形跡だと話した。これで理解できた；彼等のその日の狩の成功は、一匹の雉が確保できたということで十分だった。残りの部隊が、10時に到着した。“隊員と馬は、疲れ切っていた。”

次の日の朝、またしても、馬が行方不明になった。（馬がいなくなったこの事件は、決して不注意から来たものではない。隊員たちは、馬の足をしっかりと縛っておくことができたのだが、それよりも彼等が餌を食べられるようにしておくことのほうが重要だったのだ。）それで、結局、隊員たちは、追いかけることにし、2・3マイル離れた場所で、とんでもないものを発見した——なんと、そこに温泉があったのだ。そこには、インディアン達がバスタブにするために掘ったものさえあった。先を急がなければならぬという時間的な制約だけが、彼等がこの大自然のなかで温泉につかり、ゆったりと解放されることから、自制をさせた。隊は、ビーバーのダムを超えたが、しかし、お腹のすかした隊員たちは、一匹のビーバーすら見るができなかった。クラークが再びこんなことを記録していた。“道”は、耐えがたきものだ。ただ、今度は、これに、“これが普通だ”と付け加えよう。

14日は、とても強行軍であった。クラークが、“隊員も馬も疲れ気っている”と、再び行っていた。そして、“非常”と、付け加えた。このことは、開拓者の疲れに対する尺度からの認識であった。そして、かれらは山の背からはずれ、溪谷のクリークに下っていく道なき道を、トビーの案内を頼りに、さ迷い下っていった。しかし、彼がこの道を通ったのは、すでに、数年も前のことであり、ここで、かれは重大な過ちを犯した。かれは、すでに山の背を辿っているときに道に迷っていたのだ。そして、インディアン達が魚とりのキャンプをする場所に下りていくわき道に入ったしまったのだ。そこで、彼等は、楡上の魚とりの仕掛けを見つけたが、そこには、魚はいなかった。いよいよ隊に食料が尽きていたので、仕方なく、子馬を処分することにした。これは、彼らが最初に口にする馬の肉であった：そして、それは、そのあとも何度が体験することとなった。

15日は、馬の肉の朝食から始まった。そのあと、一日中、筋肉が痛み、肺が息苦しくなり、わき腹が鋭く刺されるような苦しみが続いた。きつい仕事は、惨めであった。そして、この日は、溪谷から抜け出し、日誌に“歩くのがやっと言うほどの悪い”と書かれている道を、山に背のほうに登り、（インディアンの通っていた正規の道は、間違いなく、山の背を通るもので、一方、後に白人達が開いた道は、溪谷をとおるものであった。）、やはり、12マイルしか進むことができなかった。馬を二匹、失うことになった。一匹は、崖を滑り、山の斜面を40ヤードも転がり落ちてしまった。このため、沢山の貴重な記録の入っていたクラークの野外机が、粉々になってしまった。もとの状態の記録をとり戻すために残ったのは、粉々になった断片だけだった。

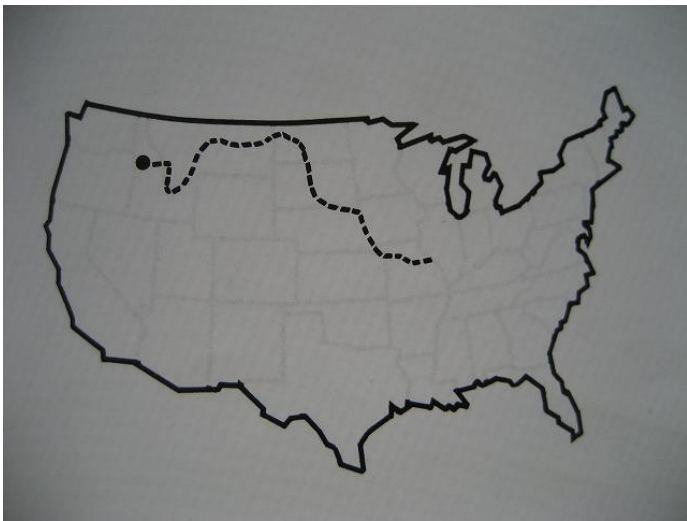
夕方のキャンプが大歓迎された。隊員たちは水を確保するために雪を融かし、子馬の肉の残りを使い、料理をした。そして、彼等のずたずたになった毛布や、バッファローの毛皮の切れ端にそれを包んで保存食にした。そして、明日はどんなことが起こるのかの思いを胸にしていた！



1805 年 9 月 20 日 水曜日

私は、・・・山を下り、松の木の茂る地域にでた。そこからは、3 マイルほど、小さな平原が開けている場所まで、素晴らしい道であった。そして。その開けた平原には、沢山のインディアンの小屋が建っていた・・・彼等齒、自分達のことをチョ プン ニッシュ あるいは、穴のあいた鼻の部族〔ネツ ペレス族〕と呼んでいた。

ウィリアム・クラーク



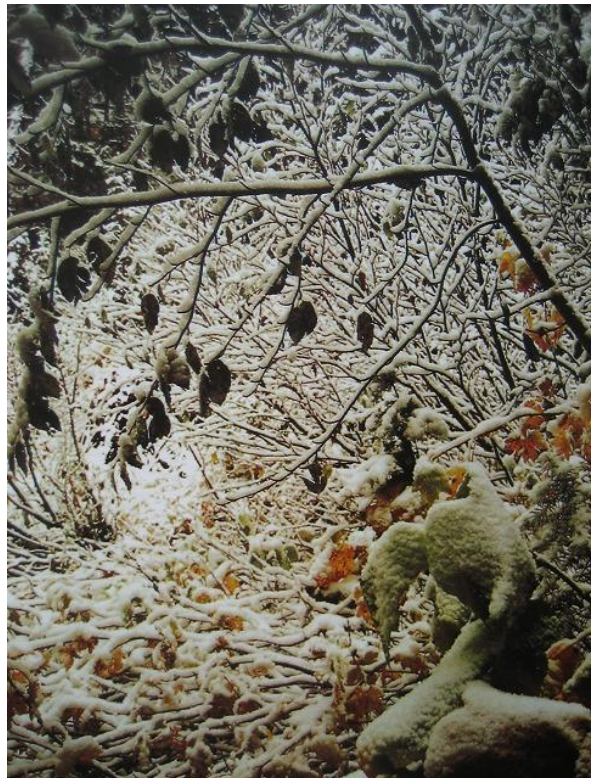
9 月 20 日、この日は探検隊に取って新たな悲惨な日となった。太陽が昇るころには、雪が 4 インチも積もっており、なおも降り続いていた。隊員たちは、モカシンを履いたが、足には、さらに、その上に布切れや毛皮をまき、ソックスにした。クラークが鹿を見つけたが、火打ち石が効かず、七回も撃ちそこなった。その結果、残ったものは空腹だけだった。行程は、昨日の悪夢の繰り返しであったが、さらに今は、雪が追跡する足跡さえ見えなくしていた。隊員と馬はひっきりなしに滑りこけていた。山の背には雲がかかり、視界が途切れ途切れになり、水滴でずぶ濡れになり、寒さが肌を刺していた。“体中が濡れ、私の一生のなかのすべてのものが冷え切っている。”と、クラークが書いていた。

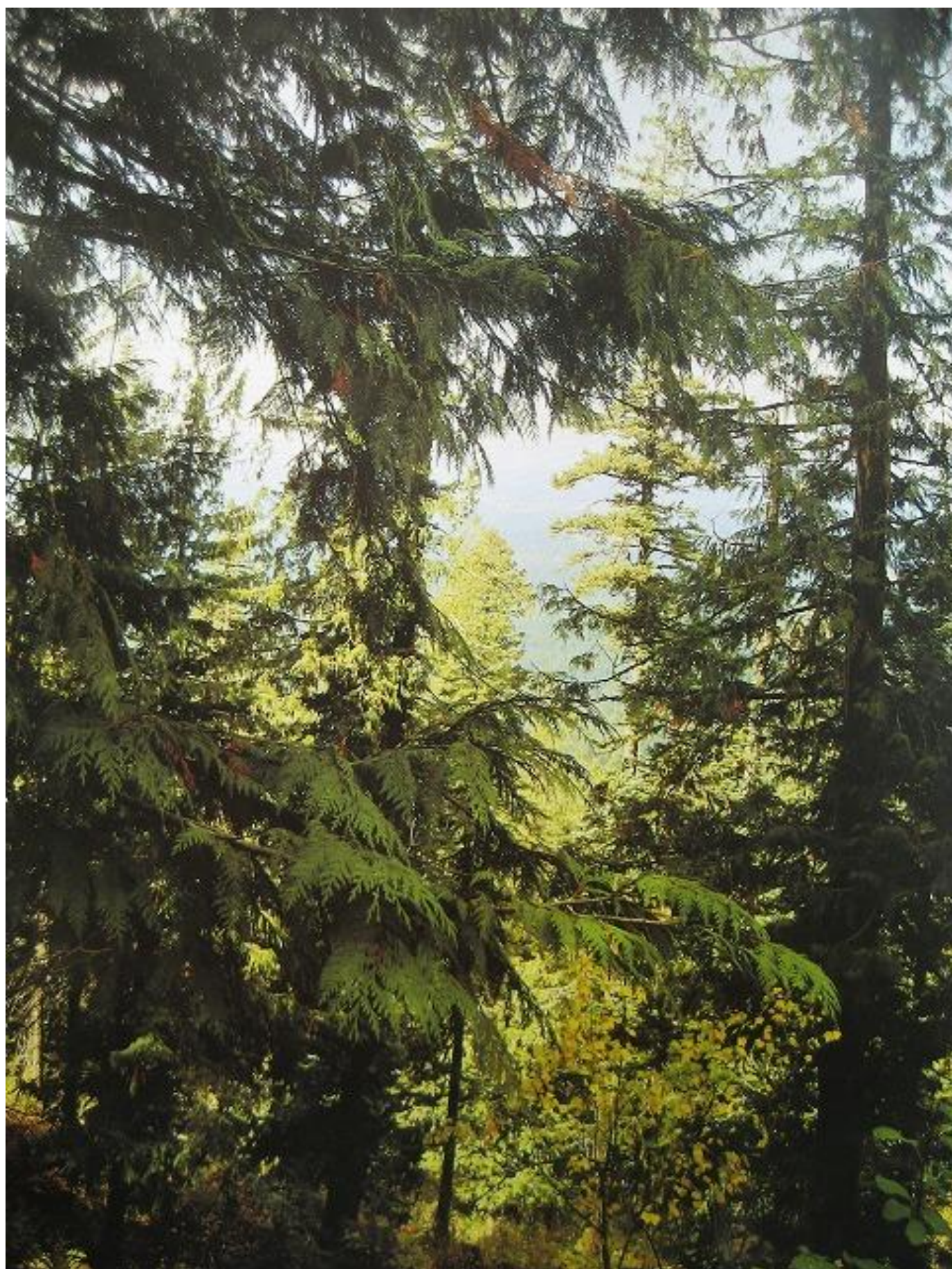
彼等は、食用とするために別の子馬を殺した。そして、やっと横

になることができる程度のわずかの平らな場視を見つけてキャンプを張った。次の日は、状況はもっと悪くなった：彼等はその晩、最後の一頭の子馬を殺し、そして、ぬれた皮に食料を包んで保存した。

それは、まさしく狂乱状態であった。とんでもない隊員の犠牲を強いるような、とても信じられない出来事が起こった。隊員の士気が低下し、彼らの間に、絶望に似たようなものが漂い始めたのだ。どちらを見渡しても彼等の目に入るものは、三角形の尖った延々と連なる山々だけだった。それは、崇高な光景であったが、誰もそんな風には感じなかった。この自分達が進んである道には、終点があるのであろうか？そこで、隊長たちは、クラークが、数人の頑強な隊員をつれて、— 食料と、この高地から抜け出す道を探すために、斥候にでることを決断した。

クラーク隊長は、明け方に出発した。彼の一族の努力は、信じがたいほどのよく考えたものであった。そして、かれらはそれを実行した。彼らが、頂上に達したのは、20 マイルほど上ったところであった。そこで、彼等はついに、南西の遥か眼下に平原を見ることができたのだ。そう、まさにそれが、終点！だったのだ。かれらは、さらに、12 マイルほど前進し、そこでキャンプを張った。夕飯抜きの設定で、そのキャンプ地に、“空腹のクリーク”と言う名前をつけた。一方、ルイス隊長のほうは、少しはましであったかもしれないが、大差はなかったであろう。彼





は、18マイルほど前進し、そして、ろうそくの火の下で、夕飯をとることができた。

9月29日、この日、クラーク隊の隊員たちにとっては、身の毛のよだつようなひどい冬の日であったが、彼らは、一匹の迷ったインディアンの馬を見つけ、これを殺した。そして、一部を食料として食べ、そののこりをほかの隊員たちのために、紐でつるしておいた。しかし、不運にも、ルイスの隊は、その日、それを手にすることができなかった。彼の隊は、そこからまだ遠くに居て、冷たく、雨に打たれ、そして、ひもじい思いをしていたのだ。次の日、朝を迎えて、彼らは馬の死骸を見つけ、それを心から悲しんだ；しかし、それから、10時間後に、キャンプはとても冷え込んだ。すでに、この日は、この悲惨な行軍を始めてから、8日目に入っていたが、しかし、ルイスの一隊は、未だ、旅の終点を確認することはできずにいた。にもかかわらず、この日のルイスの日記の書き出しが、新しい鳥の発見のことで始まり、地理学の観測に関する記述し、そして、新しい種類のスイカズラについての説明！で締めくくられているということは、全く信じがたいことである。

しかし、この哀れな状況の終わりは間近であった。クラークの一隊は、山の背を下り、ネツ ペレス族の野営地に入っていたのだ。

1805年 10月 10日 水曜日

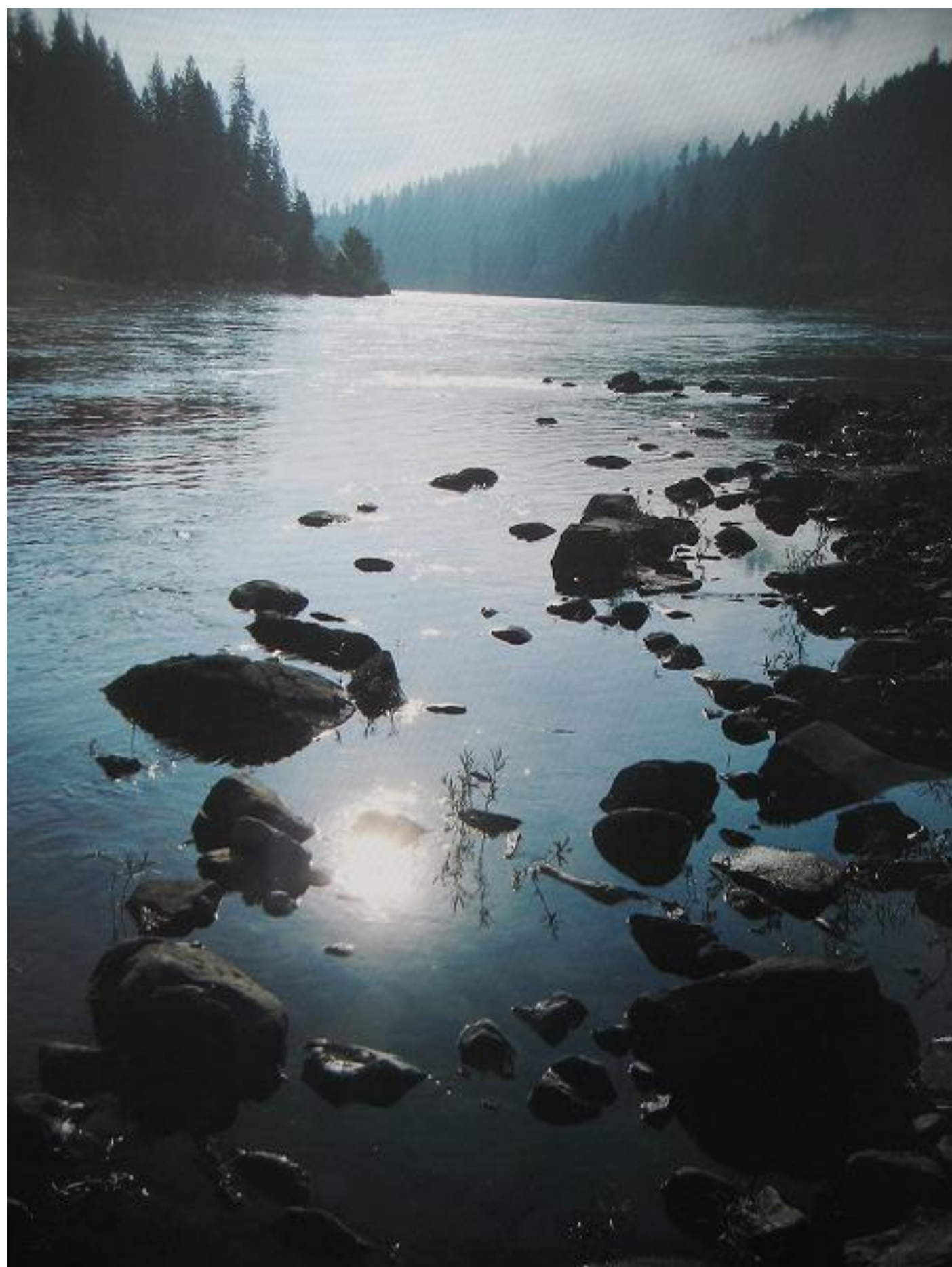
チョ プン ニッシュ あるいは、穴のあいた鼻の部族〔ネツ ペレス族〕はみんなが男のようにがっちりとしていて、また、女性はとても温和な性格だ。そして、彼等なりにとてもおしゃれで、男達の衣装は、白いバッファローの毛皮か、あるいは、鹿の皮で、大体は、それに白い色をしたビーズの飾りをつけていた。また、海の貝殻や真珠層を髪の毛につるしたり、襟巻きにするかわうその毛皮の端につけていた。そして、髪の毛は二つの房にして、自分の肩の前にたらしっていた。羽と、彼らの住んでいる地域で見つけることができる白、緑、そして、淡いブルーなどのいろいろな塗料も使っておしゃれをしていた。また、中には、毛皮を縫って作った、色のついたシャツや、ズボン、あるいは、モカシンなどもはいていた・・・・・・・・

ウィリアム・クラーク



ネツ ペレス族の食事は、様々な塊根のあるヒナユリの根と、とてつもなく長い距離の川をここまで遡ってくる鮭が主食であった。腹をすかした兵士達は、この豊富な、とはいえ、あまりなじみのない食べ物にがついた。クラーク隊長は、運搬用にできるだけたくさんの馬を買い入れ、それを後から来るルイス隊のためにロイベン平原に向かえに出した。そのとき、ルイスたちの食料といえば、ルイスが仕留めたコヨーテと隊員たちが小川のなかで捕まえてきたザリガニくらいしかなかった。平原は、彼等にとっては、まるで、聖地のように思われた；彼らは、朦朧として食事をし、そして、よろけるようにしてネツ ペレスのキャンプ地に下ってきた。こうして厳しい苦難が克服されたのだ。

しかし、いま、彼等は新しい難問を抱えた。何かが、多分それは食べものの極端な違いではないかと思われるが、探検隊がほとんど活動できなくなったのだ。隊員たちは、馬から下りて、道の脇で食べたものをもどし、ひどい下痢をし、横になっていた。ルイスは、丸一日、ほとんど動くことができなかった。ネツ ペレス族はとても親切にしてくれ、隊長たちはできるだけの治療を施していたが、しかし、隊員たちの体がこの新しい食べ物に慣れるには、時間がかかった。彼らはここでこれからのために保存食を作ろうと試み、そして、何頭かの鹿を射止めた。また、彼等



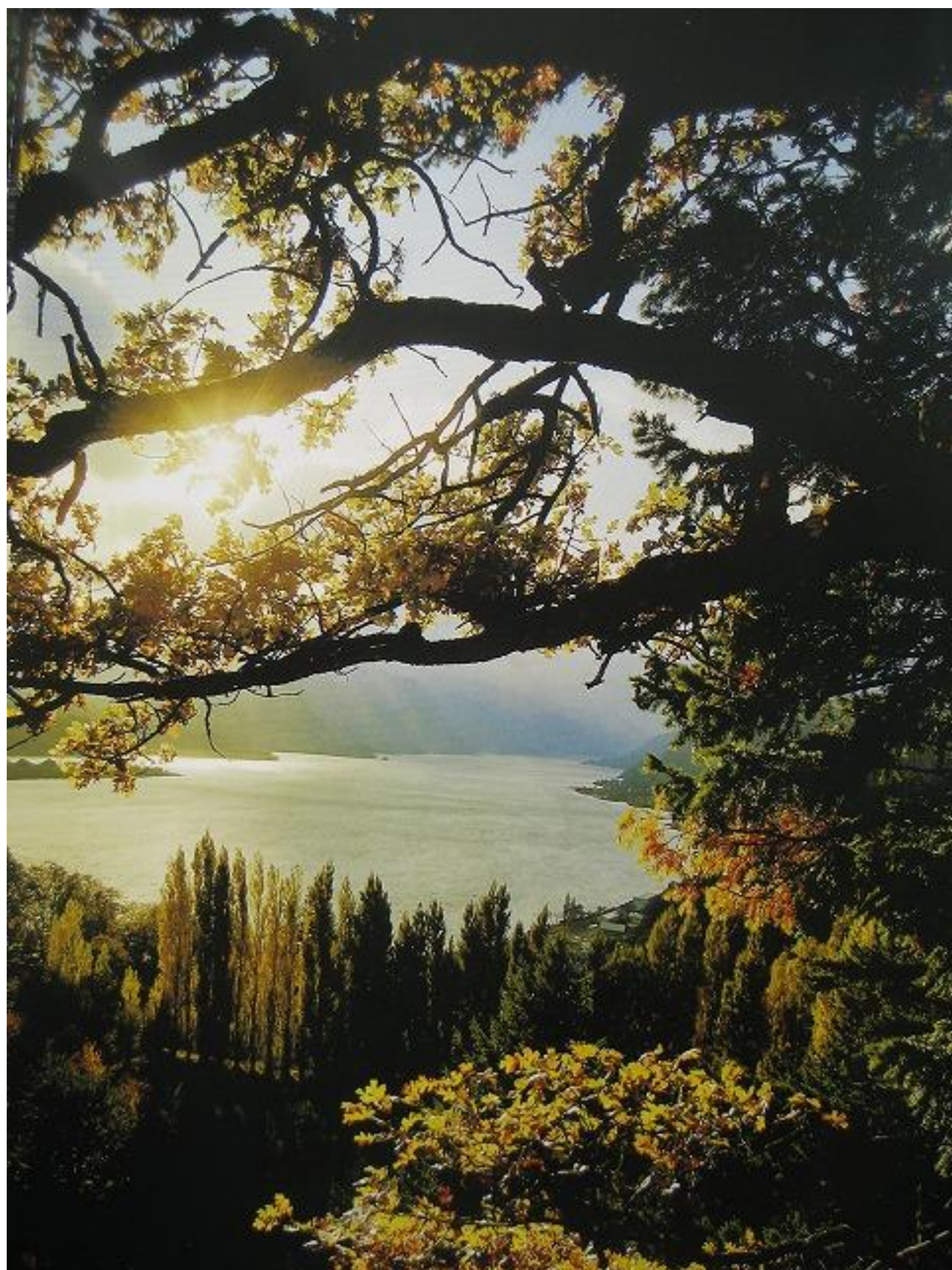
は、これから、非常のときの食料と考えて、犬を食料として食べ始めた ― 一年後、彼らが、バッファローの居る平原までもどるまでのことを考えてのことである。（犬の肉は、クラークの口には合わなかった；彼は、このあとも決して犬の肉を食べることができなかったただ一人の男であった。兵士達のほとんどのものは、その味を楽しむほどにもなったのだが。）

探検隊は、クリーンウォーター リバーの流れる平原に移動した。そこには、丸太舟をつくることのできるほどの大きなボンデローザマツの木もあり、体調の優れた隊員たちは、その仕事に取り掛かった。病気と、人手不足のために、この時の仕事は、ゆっくりと、そして、比較的容易なインディアンのやり方に従って進められた ― 丸太をくりぬくときは、のみを使わず、そのかわりに火をつけるというやり方である。10月の6日までに、五艘の丸太船が出来上がった。ある晩、かれらは、帰りの旅の途中で回収するようと、荷物の一部を分らないように埋めて隠



した。紛れもない証拠とするために、焼小手印をつくり、これで彼等の馬に焼印を押した。ネツ ペレス族は、探検隊が戻ってくるまで、馬の世話をすることを約束した。（この部族は、この約束を良く守った。事実、食料が隠し場所から見えてしまったときでも、ネツ ペレス族の人たちは、隠してあった品物をしっかりと元通りにし、探検隊が帰ってくるときまで、それを守っていた！）こうして、探検隊は、再び、水上での前進を続けて行った。

体調たちは、相変わらず病気と戦っていた。そして、日誌には、10月7日に、彼等が、クリーンウォーターの早い流れのなかに、ちいさな小船の艦隊を浮かべたときに感じたに違いない歓喜のことが少しも触れられていなかった。この時こそ、それまでの旅のなかで、かれらが、流れに沿って前進する初めてのときであった！



1805 年 11 月 3 日 日曜日

・・・この日、夕方にかけて、川を遡ってくるカヌーに乗った何人かのインディアン達と出会った。彼等が、あと二晩も川を下れば、海を見ることができるはずだと教えてくれた・・・
ジョセフ・ホワイトハウス



彼らは、川をどんどん下っていったが、休みなしだった！ まさしく、その早い川の流れて、船は何をしなくても岩肌を滑るようにして進んでいくのだ。隊員はうきうきしていた、がしかし、そこは、とても早く、そして、岩がごつごつした川だった。最初の日に、一艘の丸太船が岩に衝突し、折れてしまった。川は突然狭くなり、誰も溺れなかったが、それで、隊員たちは、クリーンウォーター 川を下るのは、ミズーリ川には行かないと理解した！ そこで、この適応力に優れた探検隊の隊員たちは、いま必要な技術を直ぐに身につけたのだ。かれらは、上流側から先の急な流れをどのようにしてしるのかを学んだ — いつ、陸揚げしたらいいのか、いつ、流れに挑戦すればよいのかといったことである。ここでも、やは

りかれらは、時々、上陸をしなければならなかった；川があまりにも荒れていたからである。そこで彼らは、荷物を乾かし、そして、もう一度しっかりと荷造りをし直していた。

彼等は、スネーク川に到達し、そこから、一揆にコロンビア川にでた。その重要な合流点で、彼らは周りの状況を調査するためと、場所の位置を確認するためにしばらく停留した。そこは、まさに、偉大なるコロンビア川の流れてであった。澄み切った深みのなかで幽霊のように赤々ともえるような姿をして海から遡ってきた鮭がいた。そして、連なる谷あいの影は、川が曲がるたびにゆっくりと変化し、しばらくその景色が続くと、再びまだ曲がるという具合であった。コロンビア川は、その度にこの探検隊を一步一步ゴールに近づけていってくれた。

海に到達したいという願望で、かれらは、急流を下り、そして、時に、陸送をしたのかも知れない。なおも、何がしかは不可能であり、そこで、彼らは、自分達で、荷物を背負い、丸太舟を一行に並べて残しておいた。他の場所では、それほど大変ではなかったが、泳げないものは、泳げる隊員たちが、その正真正銘のエネルギに大喜びし、大声を出



して喜んでいるときに、陸を歩いていた。ある場所で、川全体が、陸送もできないような門のような形をした崖と崖の間が、45ヤードほどしかない幅になっていた。クラークは、次のように記録していた。“私は、どっちを向いても煮えたぎり、渦巻きながら、はらわたが膨らんだような、恐ろしい様相ではあったが、それにもかかわらずこの場所を通ろうと決断した。” インディアンたちが、その苦難の状況を見ようと崖の上に集まってきていた ―そして、小さなボートが下流の穏やかな流れのところまで安全に通り返して行くのを見て驚いていた。

探検隊は、いたるところでインディアンに助けをもらった。いや、救われてともいえた。しかし、ここでは、探検隊は、インディアン達に絶望した ―彼等は、物乞いをし、そして、気が向いたら何でも掠め取っていつてしまうこそ泥たちだったのだ。しかし、かれらはとても素晴らしいカヌーを作った ―そこで、かれらはとてつもない風と波を乗り越えていた。探検隊にとって、これまた、極めて興味を引いたのは、インディアンたちが所有していた金属の小物



や、布切れであった。 ―これは、コロンビア川の河口に船でやってくる貿易商から手に入れたに違いない小さな装身具だった。そして、彼らは、ときおり、意味の分からないような、でも、間違いのない英語！の、聞き慣れたことばを使い、隊員たちをびっくりさせた。

この大事業は、いまや、どんどん、もう1つ別の局面に突き進んでいった。ゆったりとしたミズーリ川の流れ、マンダン族との冬のこと、際限もないバッファローの群れ、カメウエイトとの会合、そして、あのロッキーの悲惨なまでの山越え、こうしたものの記録のうえに、さらにもう1つの曲がり角を回ろうとしていた……



あとがき

探検隊は、いま、海岸にいた。アメリカ人が大陸を横断することに成功したのだ！そして、いま、彼らは、この太平洋を見ながら、冬を越していた。ただ、気分はものうく、そして、うっとうしい冬で、毎日、雨の日が続いていた。しかし、食料は不足することなく、従って、苦痛を感じるほどのものではなかった。帰りの旅に必要な塩を確保するために海水を煮沸したり、狩をしたり、あるいは、モカシンをつくり時間をつぶした。いちど、彼らは、海岸に打ち上げられたという鯨を見学するために小さな探検にでた。サカガウェアと一緒にいった。（この山に住むインディアンの少女と一緒にいったということは、なんとも素敵な話だ！）

春になり、かれらは帰りの旅の途についた。それは、また、もう 1 つの雄大な旅であり、その日誌には、読者は引き込まれていく。ある時点で、探検隊は二つに分かれて、別々に探検をした。その 1 つは、ルイス隊長が率いた探検隊で、ブラックフィート族に遭遇し、彼らのうちの二人を殺し、そのあと、かろうじて逃げてきた。グリズリーとであったときには、いつもと同じような悪戦苦闘があった。そして、ボートの事故にも出会った — そして、クルザットが間違っって発砲し、ルイスを撃ってしまったときは、大苦境であった。しかし、かれらは、この調査探検を完遂し、1806 年の 9 月に、— 疲れきり、ぼろぼろになり、沢山の調査をし、そして、歓喜にあふれ — 川を下り、大歓声の待つセント・ルイスに帰還した。

この探検隊の最初の成果は、直ぐに現れた。彼等が探検した、毛皮が信じられないくらい豊富な土地の話は、瞬く間に居酒屋から、店に、そして、小屋から小屋に伝わっていった。そして、次の年の春には、そのミズーリの流域にわな猟師たちどっと押し寄

せたのだった。そして、その流れは、1840年代になり、かわうその毛皮取引が衰退するようなファッションの変化が起こるまで留まることなく、ものすごい勢いになっていったのだ。

もう1つの別の結果と言えば、これは、負のものであった。北西部の通商路というかつての古い言い伝え——これは、インドへの水路での通商ルート——が沈静化してしまったことであった。すなわち、ロッキーを越える陸路を使った通商ルートでは、誰も利益を確保することはできないということが、そして、水路ででの通商ルートなどという簡単なものは、存在していないということが、いまや、はっきりとしたのであった。その代わりに、この探検隊は、人々のインドへの思いを断ち切らせてしまうような、資源の豊富な新しい大地を発見したのであった。

そして、彼らは、合衆国の発展の軌道の上にその資源の豊富な大地を運んで来たのだ。これこそ、まさに、ルイスとクラークの探検隊の最大の、かつ、永久的な貢献なのであった。それは、気候の温和な地域のアメリカ大陸を始めて横断し、そして、ミズーリ川の上流地域、ロッキー山脈、さらに、コロンビア川をへて太平洋の北西部海岸に至る地域の領有権を確立したのが、いかなるヨーロッパの権力の代理者ではなく、アメリカ人、そのものであるということである。こうしたことすべてが、直ぐに実現したわけではないが、しかし、それが、現実になったとき、それは、トーマス・ジェファースンの構想とルイスとクラークの探検隊の隊員たちの勇気ある決断の賜物であった。丸木舟は、普通なら、何の象徴もないのだが、彼等のそれは、ちがう。そこに、帝国の足跡を残していたのだ。

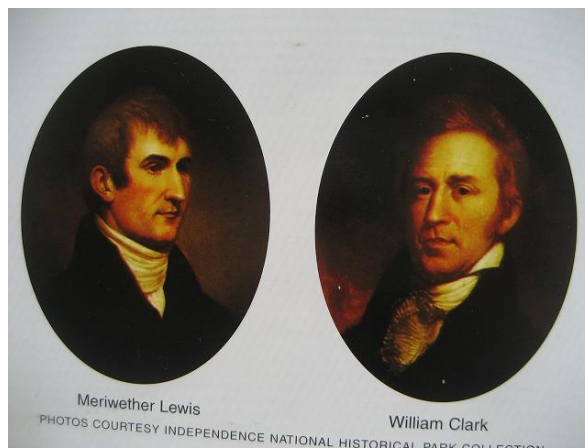
さらに、別の見方がある——おそらく、もっと価値のあるものであるが——大陸を横断するということを見る見方である；それは、それを成し遂げた人の経験そのものを見ることである。部族がまとまり、そして、それが連合体となり、政治的な忠誠心が変わる；しかし、こうした人々は、自分達だけの経験に基づいて生活していた。この人たちのその後について；メリウェザー・ルイス隊長は、この旅で偉大なる貢献をしたが、その2・3年後に死んでしまう。殺害されたのか、自殺なのかは分からない；そして、ウィリアム・クラーク隊長、彼は、長い間、インディアン部族の代理人として、そして、セント・ルイスの大御所として、長い間、恩賞生活をしていた；シャノン、彼は、ケンタッキー州の上院議員になった；ガス、ウィラード、そして、ブラトン、彼らは、鉄道によって大陸を横断するひとたちを見る生活をするようになった；コルター、ドリュリアード、そして、そのほかの何人かは、彼等がなづけた山や川に戻っていった；サカガウェアとシャボノオは、ミズーリ川の中流にすむインディアン達と一緒に暮らすために戻っていった。そして、彼等の息子の“ボンブ”は、しばらくクラークとともに過ごしたあと、ヨーロッパを旅し、教育を受けたあと、山男になる；黒人のヨークは、この探検のあと、クラークから解放の許諾を得る（一説によると、かれは、テネシーに行き、そこで運送業をはじめが裕福な暮らしはできなかったようである；また、別の話では、彼の栄誉を良く知ったインディアン達の仲間となり、そこで、尊敬と栄誉を与えられて生活していたとのことである。かりに、この後のほうの話が事実ではなくとも、かれには、そうされるだけのものはあった。）

彼等の探検の日々の最後には、あの、西部に何時も憧れのまなざしを持っていたトーマス・ジェファースンさえも、共有することのできない、彼らの間の経験の絆が存在していた。彼らこそ、ハイウェイのない、そして、ダムのない流れを遡り、数え切れないほどのバッファローを見ながら、統治者のいない沢山のインディアンの部族と語らいながら、この大陸を横断した男達なのである。かれらは、それを初めて成し遂げたのである。

ミズーリ川を探検し、そして、そこから、太平洋へと繋がる最も優れた経路を開拓するという、ルイス氏とクラーク氏の探検隊は、予想されていたように、これを成功裏に完遂した。彼らは、ミズーリ川をその源流近くまで辿り、そのあと、太平洋岸までコロンビア川を下り、われわれの大陸を横断する非常に意味のある経路の正確な地理測定を実施し、それを確たるものにした。また、旅の途中の地域の実情と、その地域の商業的な意味、住民達について沢山のことを学習してきた；そして、それは、公正に見ても、ルイス氏とクラーク氏、兵士たち、および、その随行者達は、その献身的な奉仕により、彼等の国家から、それなりの褒章を受けるに値するものである。

—— トーマス・ジェファースンの議会に宛てたメッセージ

1806年 12月2日



1805 年 12 月 25 日 クリスマス

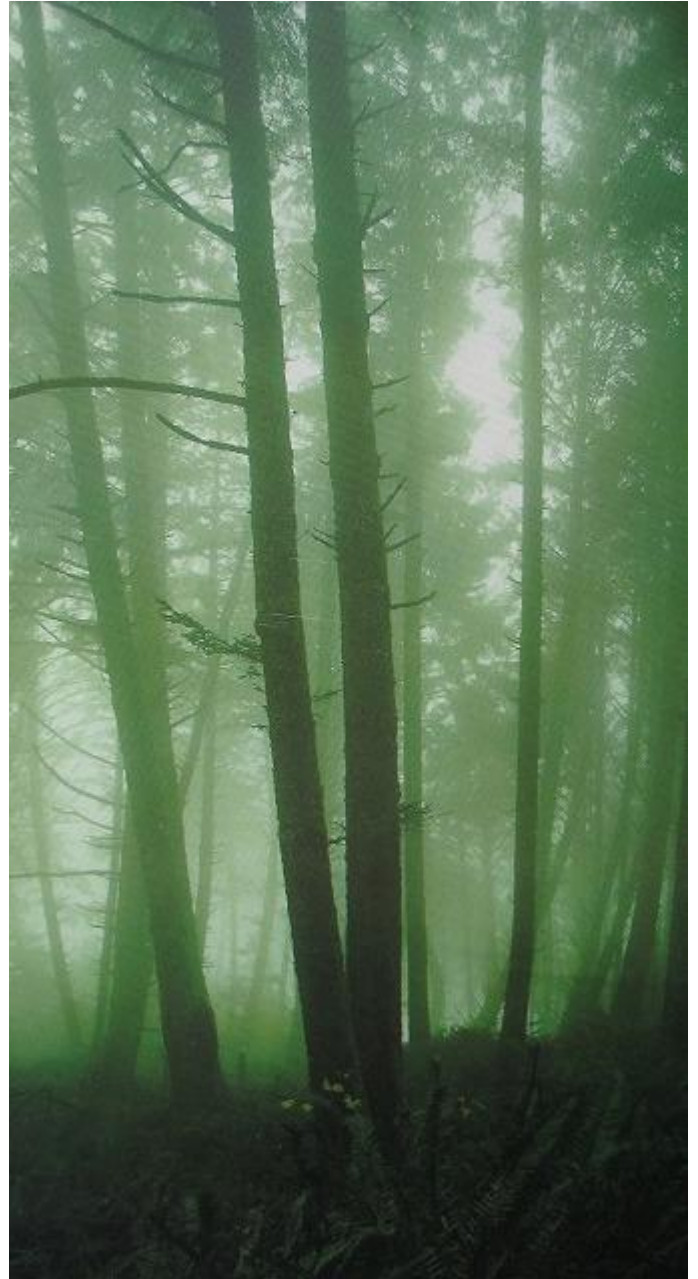
・・・・この日、朝日が昇るころ、隊のすべての銃を発砲し、われわれの窓の下に全員が集まり、歓喜を上げ、歌を歌う声で眼を覚ました。・・・・私は、ルイス隊長からプレゼントとして、馬の毛皮、シャツ、そして、ソックスを、また、ホワイトハウスからは、モカシン、グザリッチからは、インディアン達の使う小さな箆を、インディアンの女からは、ニダースもの白いイタチの尾の毛皮を受け取った。そして、インディアンのブラックフット族のものからも・・・・

ウィリアム・クラーク

1806 年 3 月 23 日 日曜日

・・・・われわれはカヌーに荷を積み込み、1 時にクラトソップ砦を後にし、われわれの故郷を目指しての旅に出発した。1805 年の 12 月 7 日からこの日まで、この場所で冬を過ごし、この間、われわれは、考えていることは何でもできるような、そんな快適な日々を過ごした。そして、われわれは、貧相なエルクの肉や、木の根のようなこともあったが、一日の三食を欠かすような日はなかった・・・・

ウィリアム・クラーク



(鈴木 誠二訳)

